

流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書5

一 流山市前平井堀米遺跡 一

令和2年12月

千葉県教育委員会

流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書5

ながれやま し まえひら い ほりごめ
— 流山市前平井堀米遺跡 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第34集として、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市前平井堀米遺跡の発掘調査報告書です。

これまでに行われた調査では、奈良・平安時代の集落跡や中・近世の生活の痕跡を示す土坑群などが発見され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果を数多く得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和2年12月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 田中文昭

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、千葉県流山市前平井字堀米110ほかに所在する前平井堀米遺跡(遺跡コード220-033)の第1次から第17次までの調査成果を取録している。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、平成25年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章に記した。
- 5 本書の執筆は、第2章を主任上席文化財主事 落合章雄が行い、その他は主任上席文化財主事 蜂屋孝之が行った。編集は蜂屋が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで以下の機関及び方々からご指導、ご協力を得た。
千葉県県土整備部市街地整備課・流山区画整理事務所、流山市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団、栗田剛久、小林清隆、太田宏敬、津田芳男
- 7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記の通りである。
第1・2・6・7・8図 流山市発行 1/2,500 流山市都市計画地図
第4図 柏書房株式会社発行 1989『明治前期関東平野地誌図集成』
第5図 国土地理院発行 1:25,000「流山」(NI-54-25-1-2)・「松戸」(NI-54-25-2-1)平成17年発行
- 9 図版1で使用した遺跡周辺航空写真は、昭和48年に京葉測量株式会社が撮影したものである。

【遺構種別記号】

SD：溝状遺構・区画整形遺構 SE：井戸 SH：ピット群 SI：堅穴住居跡 SK：土坑・陥穴・地下式坑

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法と調査概要	4
第2節 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の地理的環境	5
2 周辺の遺跡と歴史的環境	7
第2章 旧石器時代の遺構と遺物	25
第1節 概要	25
第2節 遺構と遺物	25
第3章 縄文時代の遺構と遺物	30
第1節 概要	30
第2節 遺構	30
第3節 出土遺物	30
1 縄文土器	30
2 石器	35
3 土製品	38
第4章 古墳時代の遺構と遺物	39
第1節 概要	39
第2節 遺構	39
第5章 奈良・平安時代の遺構と遺物	51
第1節 概要	51
第2節 遺構	51
第6章 中・近世の遺構と遺物	101
第1節 概要	101
第2節 地下式坑・土坑・井戸・その他	101
第3節 溝状遺構	128
第7章 遺構外出土遺物	140
第1節 概要	140
第2節 出土遺物	140
第8章 まとめ	145

挿 図 目 次

第1図	流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡……………2	第35図	(4)SI002……………53
第2図	前平井堀米遺跡の調査次別範囲と地形…3	第36図	(5)SI005(1)……………55
第3図	グリッド分割図……………4	第37図	(5)SI005(2)……………56
第4図	遺跡の立地と周辺の地形……………6	第38図	(5)SI006……………57
第5図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………8	第39図	(5)SI007……………57
第6図	上層確認調査トレンチ配置……………15	第40図	(5)SI008……………58
第7図	下層確認調査グリッド配置及び本調査地点……………16	第41図	(5)SI009……………60
第8図	上層遺構分布図……………17	第42図	(5)SI010……………60
第9図	遺構配置図1……………18	第43図	(5)SI011……………61
第10図	遺構配置図2……………19	第44図	(5)SI012……………62
第11図	遺構配置図3……………20	第45図	(9)SI001……………63
第12図	遺構配置図4……………21	第46図	(9)SI002(1)……………65
第13図	遺構配置図5……………22	第47図	(9)SI002(2)……………66
第14図	第1ブロック出土遺物分布……………26	第48図	(9)SI003……………67
第15図	第2ブロック出土遺物分布……………27	第49図	(9)SI004……………68
第16図	第1・2ブロック出土遺物……………28	第50図	(9)SI005……………70
第17図	単独出土石器……………29	第51図	(9)SI007(1)……………71
第18図	(11)SK008・(11)SK009……………31	第52図	(9)SI007(2)……………72
第19図	縄文土器1……………32	第53図	(9)SI008……………73
第20図	縄文土器2……………33	第54図	(10)SI002……………73
第21図	縄文土器3……………34	第55図	(10)SI003……………75
第22図	縄文時代石器1……………36	第56図	(10)SI006……………76
第23図	縄文時代石器2……………37	第57図	(10)SI007……………77
第24図	土製品……………38	第58図	(10)SI008 縄文時代石器……………78
第25図	(9)SI006……………40	第59図	(10)SI011……………79
第26図	(10)SI001……………41	第60図	(10)SI012……………80
第27図	(10)SI005……………42	第61図	(10)SI013……………81
第28図	(10)SI010……………43	第62図	(10)SI014……………83
第29図	(10)SI019……………45	第63図	(10)SI017……………84
第30図	(11)SI001……………46	第64図	(10)SI018……………85
第31図	(11)SI013……………48	第65図	(10)SI020A……………86
第32図	(13)SI001(1)……………49	第66図	(10)SI020B・(10)SI020C……………87
第33図	(13)SI001(2)……………50	第67図	(10)SI021……………89
第34図	(4)SI001……………52	第68図	(11)SI002……………90
		第69図	(11)SI003……………91
		第70図	(11)SI004……………92

第71図	(11)SI006	93	第91図	(16)SK018(1)	120
第72図	(11)SI011	94	第92図	(16)SK018(2)	121
第73図	(11)SI012	95	第93図	(16)SK018(3)	122
第74図	(11)SI014	96	第94図	(16)SK018(4)	123
第75図	(12)SI001	97	第95図	(16)SK018(5)	124
第76図	(15)SI001	98	第96図	(16)SK025・(16)SK026	126
第77図	(15)SI002	98	第97図	(16)SK027・(16)SK032	127
第78図	(16)SI031	99	第98図	(5)SD004A・(5)SD004B	129
第79図	(5)SK013・(5)SK014・(5)SK020・(5)SH015 ・(5)SH023	102	第99図	(5)SD003・(5)SD004B・(5)SD016・ (5)SD017・(5)SD018・(5)SD019	130
第80図	(8)SK100・(8)SK101・(8)SK102・(8)SK103 ・(8)SK104	104	第100図	(5)SD003・(5)SD018・(5)SD019 出土 遺物	131
第81図	(8)SK105・(8)SK106・(8)SK107A・(8)SK107B ・(8)SK107C	105	第101図	(10)SD022	132
第82図	(8)SK108・(8)SK109・(8)SK110	107	第102図	(11)SD010A・(11)SD010B・(11)SD010C・ (11)SD010D・(15)SD003	133
第83図	(8)SK111・(8)SK112・(9)SX009	109	第103図	(16)SD015・(16)SD023・(16)SD024・ (16)SD028	134
第84図	(10)SK004・(10)SK023	110	第104図	(16)SD024 出土遺物	135
第85図	(11)SK005A・(11)SK005B・(11)SK007A・ (11)SK007B	111	第105図	(16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・ (16)SD016・(16)SD019・(16)SD020・ (16)SD029・(16)SD030	136
第86図	(14)SK001・(14)SK004	113	第106図	(16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・ (16)SD016・(16)SD029 出土遺物	137
第87図	(14)SE003・(15)SK004	114	第107図	(16)SD006・(16)SD007・(16)SD033・ (16)SD034	138
第88図	(16)SE002・(16)SK003・(16)SK004・ (16)SK005・(16)SE008	116	第108図	遺構外出土遺物	141
第89図	(16)SK009・(16)SE011・(16)SE012	117	第109図	出土錢貨	142
第90図	(16)SK013・(16)SK017・(16)SE021・ (16)SE022	119			

表 目 次

第1表	前平井堀米遺跡(1)~(17)調査一覽表	4	第6表	砥石一覽表	143
第2表	周辺遺跡一覽表	9	第7表	石臼一覽表	143
第3表	前平井堀米遺跡上層遺構一覽表	23・24	第8表	板碑一覽表	144
第4表	旧石器時代石器一覽表	29	第9表	錢貨一覽表	144
第5表	縄文時代石器一覽表	38			

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真	(10)SK014C・(10)SK014D
図版2	調査前風景(2)地区	図版18 (10)SK014C・(11)SK005・(11)SK007・
図版3	遺構配置状況(5)地区	(11)SK008・(11)SK009・(14)SK001・
図版4	遺構配置状況(5)地区・旧石器時代第1ブ ロック遺物出土状況(8)地区・遺構配置状況	(14)SE003・(14)SK004
(9)地区	図版19 (15)SK004・(16)SK003・(16)SK004・	
図版5	旧石器時代第2ブロック遺物出土状況(10) 地区・遺構配置状況(16)地区・調査風景(5) 地区	(16)SK005・(16)SE008・(16)SK009・
図版6	(4)SI001・(4)SI002・(5)SI005・(5)SI006 ・(5)SI007	(16)SK011・(16)SK013
図版7	(5)SI008・(5)SI009・(5)SI010・(5)SI012 ・(9)SI001・(9)SI002・(9)SI003	図版20 (16)SK017・(16)SK018・(16)SE022・
図版8	(9)SI004・(9)SI005・(9)SI006・(9)SI007	(16)SK026・(16)SK027・(16)SK032
図版9	(9)SI008・(10)SI001・(10)SI002・(10)SI003 ・(10)SI005	図版21 (5)SH015・(16)SE002・(15)SD003・(5)SD004A ・(5)SD004B・(16)SE021・(16)SD001・
図版10	(10)SI006・(10)SI007・(10)SI008・ (10)SI010・(10)SI011	(16)SD007・(9)SX009
図版11	(10)SI011・(10)SI012・(10)SI013・ (10)SI014・(10)SI017・(10)SI018	図版22 竪穴住居跡出土土器(1)
図版12	(10)SI019・(10)SI020A・(10)SI020B・ (10)SI021・(11)SI001・(11)SI002	図版23 竪穴住居跡出土土器(2)
図版13	(11)SI003・(11)SI004・(11)SI006・ (11)SI011・(11)SI012・(11)SI013	図版24 竪穴住居跡出土土器(3)
図版14	(11)SI013・(11)SI014・(12)SI001・ (13)SI001・(15)SI001・(15)SI002・ (16)SI031	図版25 竪穴住居跡出土土器(4)
図版15	(16)SI031・(5)SK013・(5)SK014・(5)SK020 ・(8)SK100・(8)SK101・(8)SK102	図版26 竪穴住居跡出土土器(5)
図版16	(8)SK103・(8)SK104・(8)SK105・(8)SK106・ (8)SK107A・(8)SK107B・(8)SK108	図版27 竪穴住居跡出土土器(6)
図版17	(8)SK109・(8)SK110・(8)SK111・(8)SK112・ (10)SK004・(10)SK014A・(10)SK014B・	図版28 竪穴住居跡出土土器(7)
		図版29 竪穴住居跡出土土器(8)
		図版30 竪穴住居跡出土土器(9)・遺構外出土土器
		図版31 土製品・砥石・金属製品
		図版32 中・近世遺物(1)
		図版33 中・近世遺物(2)
		図版34 中・近世遺物(3)
		図版35 中・近世遺物(4)
		図版36 中・近世遺物(5)
		図版37 板碑・石臼
		図版38 旧石器時代石器
		図版39 縄文土器(1)
		図版40 縄文土器(2)・縄文時代石器・土製品
		図版41 縄文時代石器・銭貨

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、常磐新線(現・つくばエクスプレス)の建設に関連して流山運動公園周辺地区土地区画整理事業を計画し、事業実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長あてに提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に27か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認して、その旨回答した(第1図)。

その後、両者は事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとした。

記録保存のための発掘調査は、財団法人千葉県文化財センター(現・公益財団法人千葉県教育振興財団)が実施することとなり、千葉県企業庁との間に委託契約が締結され、平成9年度から発掘調査が開始された。事業主体は、平成18年度からは千葉県土整備部が本区画整理事業を引継いでいる。

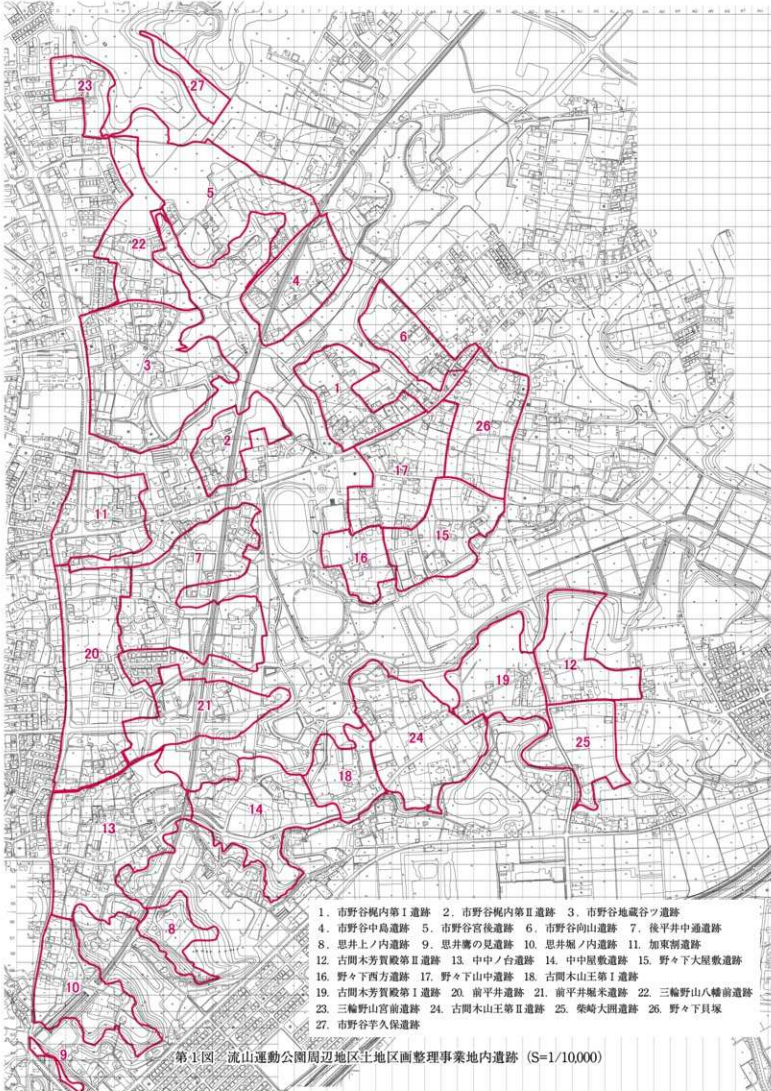
前平井堀米遺跡は、流山市前平井字堀米ほかに所在し、全遺跡面積は46,479㎡を測る。このうち88%にあたる40,840㎡について、平成9年度から平成24年度までの間に17次にわたる発掘調査を実施している。前平井堀米遺跡における未調査地区は限定的で、これまでの発掘調査によってほぼ遺跡の全容が明らかになっている(第2図)。当該遺跡内に依然として残る未調査区域については、今後調査を実施した上で、追加的な報告を行う予定である。

発掘調査及び整理事業に関わった各年度の担当職員、作業内容等は第1表のとおりである。上層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し10%程度の確認トレンチを設定し、遺構の時期及びその広がりを確認した。その結果、4次調査において400㎡、5次調査において2,929㎡、8次調査において1,100㎡、9次調査において823㎡、10次調査において3,530㎡、11次調査において1,630㎡、12次調査において501㎡、16次調査において1,430㎡が本調査となった(第6図)。

下層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し2%～4%程度の確認トレンチを設定し、石器出土地点の層位と広がりを確認した。その結果、平成14年度に実施した8次調査、平成15年度に実施した10次調査において旧石器時代の石器群が検出され調査を実施している。いずれの調査においても出土物の広がりが限定的であったことから、確認調査の範囲内で終了している(第7図)。なお、9～11・13～16次調査区では、標高が低い地点や谷部にあたっている地点などがあり、立川ローム層が失われていたことから、確認調査については不要とした。

区画整理事業地内においてこれまでに実施された発掘調査の報告書としては、思井堀ノ内遺跡についての中世編及び旧石器～奈良・平安時代編の2冊の報告書が財団法人千葉県教育振興財団(現・公益財団法人千葉県教育振興財団)から刊行され^{注3・4)}、思井上ノ内遺跡、中屋敷遺跡の報告書が千葉県教育委員会から刊行されている^{注4)}。本書は、当事業に伴う報告書の5冊目となる。

前平井堀米遺跡の整理事業は、平成24年度に公益財団法人千葉県教育振興財団が、さらに平成29年度から令和2年度まで千葉県教育庁教育振興部文化財課が引き継いで実施し、令和2年度に報告書刊行に至っている。



1. 市野谷観内第1遺跡
2. 市野谷観内第Ⅱ遺跡
3. 市野谷地藏谷ツ遺跡
4. 市野谷中島遺跡
5. 市野谷宮後遺跡
6. 市野谷向山遺跡
7. 後平井中通遺跡
8. 思井上ノ内遺跡
9. 思井霧の見遺跡
10. 思井堀ノ内遺跡
11. 加東割遺跡
12. 古間木芳賀殿第Ⅱ遺跡
13. 中中ノ台遺跡
14. 中屋敷遺跡
15. 野々下大屋敷遺跡
16. 野々下西方遺跡
17. 野々下山中遺跡
18. 古間木山王第Ⅰ遺跡
19. 古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡
20. 前平井遺跡
21. 前平井堀米遺跡
22. 三輪野山八幡前遺跡
23. 三輪野山宮前遺跡
24. 古間木山王第Ⅱ遺跡
25. 榮崎大田遺跡
26. 野々下貝塚
27. 市野谷幸久保遺跡

第1図 流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡 (S=1/10,000)



第2図 前平井堀米遺跡の調査次別範囲と地形

第1表 前平井堀米遺跡(1)~(17)調査一覧表

【発掘調査】

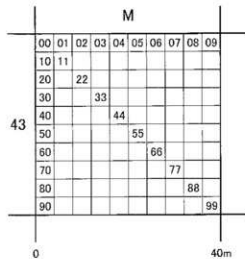
調査 回数	年度	事業名	調査 期間	調査体制	担当者	対象 面積 (㎡)	確認調査面積(㎡)		本調査 (㎡)	
							上層	下層	上層	下層
							確認/対象	確認/対象	上層	下層
(1)	平成10	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H10.02.20 ~H10.02.25	(財)千葉県 文化財センター	総務課調査係 高山太郎 調査係長 野村 朝	611	150/611	28/611	0	0
(2)	平成10	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H11.1.15 ~H11.1.29	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 沼津 豊 係長 高木文雄	3,102	374/3,102	100/2,495	0	0
(3)	平成11	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H12.22.31 ~H12.22.29	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 沼津 豊 係長 及川洋平	616	62/616	20/516	0	0
(4)	平成12	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H12.6.1 ~H12.6.29	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 沼津 豊 係長 高木文雄	400	-/-	16/400	400	0
(5)	平成13	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業(その2)	H13.10.1 ~H13.10.31	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 佐久川 章 係長 田坂 浩	4,397	565/4,397	100/4,297	2,928	0
(6)	平成14	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H14.5.8 ~H15.5.15	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 池本 敏 調査係長 池本 敏 調査係長 池本 敏	922	34/922	8/922	0	0
(7)	平成14	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業(その2)	H15.1.20 ~H15.1.24	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 池本 敏 調査係長 池本 敏	1,267	130/1,267	16/1,267	0	0
(8)	平成14	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業(その3)	H14.1.17 ~H15.2.27	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 池本 敏 調査係長 池本 敏	3,070	416/3,070	96/3,070	1,100	0
(9)	平成15	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業(その4)	H15.2.27 ~H15.5.16	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 池本 敏 調査係長 池本 敏	2,105	210/2,105	20/2,105	823	0
(10)	平成15	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業(その4)	H15.10.1 ~H16.3.26	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 池本 敏 調査係長 池本 敏	5,441	624/5,154	130/5,441	3,520	0
(11)	平成15	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H16.1.17 ~H16.3.26	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 池本 敏 調査係長 池本 敏	3,528	344/3,528	40/3,528	1,630	0
(12)	平成16	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H16.5.10 ~H16.5.19	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 矢野一宏 調査係長 田坂 浩	501	-/-	12/501	501	0
(13)	平成16	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H16.7.1 ~H16.6.6	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 矢野一宏 調査係長 田坂 浩	2,880	2,004/2,880	4/2,880	0	0
(14)	平成16	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H16.10.1 ~H16.10.29	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 矢野一宏 調査係長 田坂 浩	1,738	704/1,738	-/-	0	0
(15)	平成16	千葉県立野村浦古墳園地地区 土地区画整理事業	H17.1.6 ~H17.2.28	(財)千葉県 文化財センター	調査係長 矢野一宏 調査係長 田坂 浩	367	367/367	-/-	0	0
(16)	平成18	千葉県立上総東部つひえノクス ス地区画整理事業(その2)	H18.6.30 ~H18.12.15	(財)千葉県 教育文化庁	調査係長 矢野一宏 調査係長 田坂 浩	9,591	922/9,591	-/-	1,430	0
(17)	平成24	千葉県立上総東部つひえノクス ス地区画整理事業(その1)	H24.5.7 ~H24.5.11	(財)千葉県 教育文化庁	調査係長 田中幸雄 調査係長 田中幸雄	368	66/368	6/368	0	0
合 計						60,848	6,994/60,832	618/28,427	12,343	0

【整理作業】

調査 回数	年度	事業名	整理 期間	調査体制	担当者	内 容
	平成24	千葉県立上総東部つひえノクス ス地区画整理事業(その2)	H24.6.27 ~H25.5.34	(公財)千葉県 教育文化庁	調査係長 田中幸雄 調査係長 田中幸雄	-
(1)	平成29	千葉県立上総東部 古墳公園園地地区土地区画整理 事業	H29.4.1 ~H30.3.31	千葉県教育行 政庁教育課 文化財課	調査係長 山根 浩一 調査係長 山根 浩一	文化財課 堀 隆博 記録整理・分析の一環
(17)	平成30	千葉県立上総東部 古墳公園園地地区土地区画整理 事業	H30.4.1 ~H31.3.31	千葉県教育行 政庁教育課 文化財課	調査係長 山根 浩一 調査係長 山根 浩一	文化財課 堀 隆博 分析・定量化の一環
	令和6	千葉県立上総東部 古墳公園園地地区土地区画整理 事業	H31.4.1 ~H32.3.31	千葉県教育行 政庁教育課 文化財課	調査係長 大崎(イ)子 調査係長 丸西 正	主任 土佐 文化財課 堀 隆博 調査係長 堀 隆博
	令和7	千葉県立上総東部 古墳公園園地地区土地区画整理 事業	H24.4.1 ~H25.3.31	千葉県教育行 政庁教育課 文化財課	調査係長 田中幸雄 調査係長 丸西 正	主任 土佐 文化財課 堀 隆博 調査係長 堀 隆博

2 調査の方法と調査概要

調査にあたっては、区画整理事業地内の遺跡を網羅するよ
うに、日本測地系に基づくグリッド設定を行った。X = -
14,800m、Y = +7,600mを起点とする40m×40mの方眼を大
グリッドとし、北から南へ1~67、西から東へA~Z及び
AA~ANとし、大グリッドはアルファベットと数字の組み
合わせにより「C2」「K11」のように表示することとした。
今回報告する前平井堀米遺跡(1)~(17)は、大グリッドで示
すとH44を西端とし、R43を東端とする範囲にあたる(第2
図)。大グリッドの中は、更に4m×4mの小グリッドに100
分割し、小グリッドは北西角から東へ00、01、02…、南へ
00、10、20…とし、南東角を99とした。これにより、大グリ
ッドとの組み合わせで、例えば「M43-55」のように座標軸
による小グリッドで地点を表示することとした(第3図)。



第3図 グリッド分割図

遺構番号については、1次調査から概ね遺構の性格に関係なく001から始まる3桁の数字の連番が使用されてきた。遺物への注記は、原則調査回数とともに調査中に付された遺構番号で行ったが、整理作業を進めていく中で報告書に掲載すると遺構番号に重複があることから、基本的に調査時の番号を踏襲するものの、遺構の種別記号を付した上でその前に()で調査回数の番号を付して、本報告書における遺構番号とした。遺構の種別記号は凡例に示したとおりで、調査時と本報告における遺構名の対照表は第3表のとおりである。

調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代石器集中地点2か所、縄文時代陥穴2基、古墳時代竪穴住居跡8軒、奈良・平安時代竪穴住居跡36軒、中・近世地下式坑20基、土坑墓1基、土坑17基、井戸7基、溝状遺構28条、ピット群2か所である(第7～13図)。出土遺物については、検出された遺構に伴う遺物が出土しているほか、縄文時代の土器・石器などが包含層及び後世の遺構内から出土している。

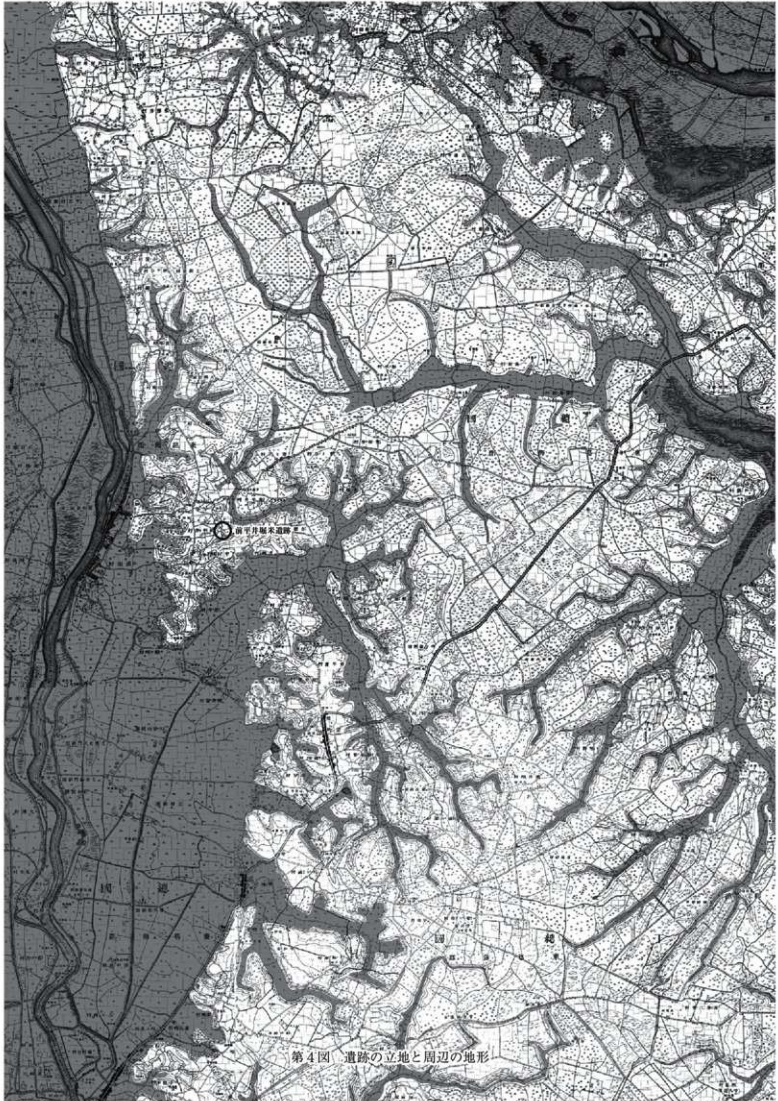
第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の地理的環境

前平井堀米遺跡が所在する流山市は千葉県の北西端に位置し、江戸川の下流域に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接し、江戸川の西側対岸は、埼玉県となっている。市の中部や北部は下総台地の一部を構成して緩やかな高低差の台地となっており、ほぼ全域が住宅街や農地などの土地利用となっている。下総台地とは、千葉県北部一帯にかかる台地を指し、現在は江戸川開削によって切り離されているが一部は埼玉県東部に及んでいる。旧下総国の台地であり北総台地とも呼ばれている。千葉県北東部の成田市や香取市を中心とする台地、千葉県北西部の野田市など江戸川沿いから船橋市にかけての台地、埼玉県東端の幸手市、北葛飾郡杉戸町及び春日部市など江戸川沿いの台地(埼玉県では宝珠花台地、金杉台地などと呼ばれている)に大別され、香取市や香取郡東庄町などの利根川沿いでは標高が50メートルを越える所もあるものの、標高は概ね40m～20mであり、なだらかな起伏が続く台地がほとんどである。本遺跡はこの流山市の南西部、最も標高の高いところで約20mの台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ東京湾へ注いでおり、南側は松戸市との境をなす支流の坂川が流れている。遺跡周辺の台地は、いずれも江戸川に注ぐ支谷が東側の下総台地を樹枝状に開析して形成されたものである。戸川や坂川の流れる古東京湾沿岸に形成された広い低地へと半島状に突出するような形状を呈しており、さらに両河川に注ぐ小支谷によって複雑に開析された舌状台地が連なっている。台地の基盤層は、下総層群と呼ばれる中期洪積世の海成砂層からなり、砂泥層や礫層なども挟んでいる。下総層群はまた、地藏堂層、藪層、清川層、上岩橋層、成田層の5つの累層に区分されている。さらに上層には、下末吉ローム、武蔵野ローム、立川ロームなどの火山灰による風成層が堆積している¹⁰¹⁾。流山市域では、全体に台地の標高が低く、台地によっては後期旧石器群を含む立川ロームが失われている地点も多い。流山市域の台地上は、市域のほぼ全てが後期旧石器時代以降の埋蔵文化財包蔵地であることが確認されている。

前平井堀米遺跡が立地する台地そのものは、坂川から深く入り込んだ東側からの支谷によって開析された東西に長い台地であり、標高は谷部が約12m、台地の最高部が19mを示し、全体として東に向かい緩い傾斜をなしている。

本来なら一つの遺跡としてみてもよい西側の前平井遺跡においても最も高いところの標高は23m程度し



第4図 遺跡の立地と周辺の地形

がなく、江戸川に面する斜面は縄文海進によって形成された海食崖の急崖となっている。遺跡の南側を流れる坂川は、遺跡付近から南西へ約3.5kmの地点で江戸川へと合流する小河川であるが、縄文海進期には古東京湾の支湾となる「古流山湾」が形成されていた⁽¹⁸²⁾。谷奥部は下総台地へと深く入り込み、その谷頭は遺跡の北東側約7.5kmにある手賀沼と、そこに注ぐ大堀川に接するような地点にまで延びている。ちなみに本遺跡から東側そして北側の台地へと入り込む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は分水嶺をなしている。手賀沼はかつての香取海の一部であり、太平洋へと通じる水系にあることから、この分水嶺は太平洋水系と東京湾水系を背景とし、分水嶺を通過して房総半島へ入る場合の唯一の通路となっている点で重要である。

2 周辺の遺跡と歴史的環境

流山市は、1950年代以降に住宅開発がはじまり、高度経済成長期になると首都圏のベッドタウンとして大規模な土地区画整理事業による開発などが加速し、数多くの遺跡が調査されている。ここでは本事業地内周辺を中心に、代表的な調査成果を示してこの地域の歴史的環境を俯瞰したい(第5図、第2表)。

流山市内の旧石器時代の遺跡は近年、当区画整理事業地及び北東部に隣接する流山新市街地地区土地区画整理事業地内(以下、新市街地地区と略す)において著しく、資料が増加している。思井堀ノ内遺跡(5)⁽¹⁸³⁾、思井上ノ内遺跡(16)⁽¹⁸⁴⁾、三輪野山北浦(旧三輪野山第Ⅱ)遺跡(56)⁽¹⁸⁵⁻⁶⁾、西初石五丁目遺跡(63)⁽¹⁸⁷⁻⁸⁻⁹⁾、市野谷入台遺跡(61)⁽¹⁸⁸⁻¹⁰⁾、市野谷二反田遺跡(58)⁽¹⁸¹⁾、大久保遺跡(60)⁽¹⁸¹²⁾、市野谷向山遺跡(52)⁽¹⁸⁸⁻¹²⁾、東初石六丁目第Ⅰ遺跡(79)⁽¹⁸¹²⁾、東初石六丁目第Ⅱ遺跡(77)⁽¹⁸¹²⁾、十太夫第Ⅱ遺跡⁽¹⁸¹²⁾、市野谷中島遺跡(51)⁽¹⁸⁶⁾、市野谷芋久保遺跡⁽¹⁸⁹⁾、市野谷立野遺跡⁽¹⁸¹³⁾、地図の外になるが桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡、中野久木遺跡、若葉台遺跡、桐ヶ谷南割(上貝塚)遺跡などで石器群が検出されている。思井堀ノ内遺跡ではⅢ層からⅩ層にかけて11ブロック、思井上ノ内遺跡ではⅣ層からⅩ層にかけて3ブロック、三輪野山北浦遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて6ブロック、市野谷入台遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて26ブロック、市野谷二反田遺跡ではⅣ層からⅩ層にかけて12ブロック、西初石五丁目遺跡ではⅢ層からⅩ層にかけて6ブロック、大久保遺跡ではⅣ層とⅩ層で41ブロック、市野谷向山遺跡ではⅣ層からⅩ層にかけて22ブロック、東初石六丁目第Ⅰ遺跡ではⅣ層からⅦ層にかけて3ブロック、東初石六丁目第Ⅱ遺跡ではⅣ層からⅦ層にかけて5ブロック、十太夫第Ⅱ遺跡ではⅦ層からⅩ層にかけて1ブロック、市野谷中島遺跡ではⅣ層からⅦ層にかけて1ブロック、市野谷芋久保遺跡ではⅢ層からⅩ層にかけて46ブロック、市野谷立野遺跡ではⅣ層中部から下部にかけて4ブロックがそれぞれ調査されている。その他、上層遺構覆土中からの遺物出土事例は数多く報告されている。

縄文時代の遺跡はきわめて多い。草創期は遺構の検出事例はなく、長崎遺跡(116)⁽¹⁸¹⁴⁾で有茎尖頭器の出土が報告されるなどごくわずかな遺物の出土しか確認されていないが、早期になると遺構の検出事例が増え、遺物も多くの遺跡で出土するようになる。思井堀ノ内遺跡では野島式から鶴ヶ島台式期を中心とする堅穴住居跡2軒、炉穴35基などが検出され、思井上ノ内遺跡では鶴ヶ島台式期を中心とする早期後葉の堅穴住居跡2軒、土坑2基、炉穴25基などが検出されている。三輪野山第Ⅲ遺跡(55)⁽¹⁸¹⁵⁾では鶴ヶ島台式期の堅穴住居跡1軒と炉穴10基が調査されている。炉穴の検出率は数多く、三輪野山道六神遺跡(53)⁽¹⁸⁶⁾や大原神社遺跡(12)⁽¹⁸¹⁶⁾、平和台遺跡(11)⁽¹⁸¹⁷⁻¹⁸⁾、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡(42)⁽¹⁸¹⁹⁾、三輪野山八重塚遺跡(43)⁽¹⁸²⁰⁻²¹⁾、加北谷津第Ⅱ遺跡(39)⁽¹⁸²²⁾、西平井二階畑遺跡(3)⁽¹⁸²³⁾、市野谷立野遺跡⁽¹⁸⁹⁾などで報告されている。市野



図5 遺跡の位置と周辺の電跡 (S=1/25,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	西平井堀木遺跡	古墳(後),奈良-平安	71	下倉堀堀木遺跡	縄文中(後),平安,古墳
2	西平井堀木遺跡	縄文,中世	72	上貝塚内遺跡	縄文(前-後),平安
3	西平井二階遺跡	縄文,中世	73	網ヶ谷河原後遺跡	旧石器,縄文(前-後),平安
4	中ノ台遺跡	縄文,中世	74	大野台遺跡	縄文(前),古墳,中世
5	思母原ノ内遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後),古墳(中),奈良-平安,中世	75	西野石仮倉遺跡	縄文(前-中),古墳
6	西平井大崎遺跡	縄文	76	花山東遺跡	旧石器,縄文,奈良-平安
7	思母原の見遺跡	縄文(早-前),古墳,古墳	77	東野石六丁目第1遺跡	旧石器,縄文(前-後),平安
8	榑ヶ塚塚の越遺跡	古墳(後)	78	十六夫第1遺跡	縄文(早-前-中-後),平安,古墳
9	二木谷古墳	古墳(後)	79	東野石六丁目第1遺跡	旧石器,縄文(前-後),平安,古墳
10	榑ヶ塚+城塚+城合遺跡	古墳(後)	80	中ノ台第2遺跡	縄文(早-前-中-後-晩),平安
11	榑ヶ塚+城塚	縄文(早-前),平安	81	強志沖舟遺跡	縄文(中)
11	平船台遺跡	縄文(中),古墳,平安,中-古墳	82	駒木沼田遺跡	縄文(前)
12	大塚野社遺跡	縄文(早),古墳(後),平安	83	宇田川	旧石器,縄文(前-中-後),古墳
13	宮本遺跡	縄文(早),平安	84	中芝遺跡	弥生(後),古墳(前-中-後)
14	西平井遺跡	縄文(前-中),平安	85	高六舟遺跡	縄文(早-前-中-晩),弥生(後),古墳(後),奈良-平安
15	長平山ノ内遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後),古墳,奈良-平安,中-古墳	86	水戸(中)金遺跡	縄文(晩),古墳(中)
16	思母上ノ内遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後),古墳,奈良-平安,中-古墳	87	中谷村台遺跡	縄文(前)
17	吉野山山王第1遺跡	縄文(早),平安	88	原の山遺跡	縄文(早-前),弥生,古墳(中-後),平安
18	吉野山第1塚	古墳	89	殿平貫遺跡	縄文(後)
19	吉野山山王第2遺跡	縄文,古墳(後),奈良-平安	90	殿平貫河原遺跡	縄文(前)
20	芝崎第2分墳遺跡	古墳	91	東平貫遺跡	旧石器,縄文(前-中-後),中世
21	芝崎大岡遺跡	縄文(前-中),古墳,平安	92	殿平貫河原遺跡	旧石器,縄文(早-前),古墳(前-中-後)
22	芝崎第1分墳遺跡	古墳	93	小倉城跡	古墳
23	吉野山方殿第1遺跡	縄文(前-中),平安	94	小倉城跡	古墳,古墳,平安,中世
24	吉野山方殿第2遺跡	縄文(後),平安	95	小倉古墳群	古墳
25	加賀台遺跡	弥生(中),古墳(後),平安,古墳	96	西(小倉)北(小倉)遺跡	縄文(前-中)
26	加賀町遺跡	縄文,古墳,奈良-平安	97	埴原遺跡	旧石器,縄文(前)
27	加賀宮第1遺跡	旧石器,縄文,平安	98	前ノ上(部分)船遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),古墳(前-中-後)
28	加賀東遺跡	縄文(前),中世	99	地外(北小倉駅付近)	縄文(前-後)
29	中ノ原中遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),奈良-平安,中-古墳	100	山王前遺跡	縄文(前-中)
30	野々下西方遺跡	縄文(前-中),平安	101	熊ノ脇遺跡	縄文(早-前-中)
31	野々下大原遺跡	縄文(後),平安	102	宇谷城跡	中世
32	野々下山遺跡	縄文(前),平安	103	観音下遺跡	縄文(後)
33	野々下貝塚	縄文(前-中-後-晩)	104	長田遺跡	縄文(中-後),平安,古墳
34	野々下塚原第1遺跡	平安	105	馬場城跡	中世
35	野々下塚原第2遺跡	縄文(前),平安	106	上野野(二木谷台)遺跡	弥生(後)
36	野々下塚原	縄文(前),古墳	107	二ノ木谷(二ノ木)	二ノ木谷(二ノ木)
37	吉野山栗原分墳遺跡	縄文(早-前-後)	108	勢至前遺跡	縄文(早-前),古墳(後)
38	吉野山流川遺跡	縄文(前)	109	人遺跡	縄文(前)
39	加北谷津第1遺跡	縄文,古墳,平安	110	富士見台(1)遺跡	縄文(中),古墳(中-後)
40	加北谷津第1遺跡	旧石器,縄文,平安	111	長崎大杉原遺跡	縄文(中),古墳(中-後)
41	加賀宮第2遺跡	縄文,平安	112	富士見台(2)遺跡	縄文(中-後)
42	三輪野山人塚第1遺跡	縄文(早),平安	113	長崎五斗遺跡	縄文(中)
43	三輪野山人塚	縄文,古墳,平安	114	長崎塚跡	古墳
44	三輪野山北遺跡	縄文(後-晩)	115	長崎五枚原遺跡	縄文(前-中),平安
45	三輪野山北遺跡	旧石器,縄文(前-中-後-晩)	116	長崎遺跡	縄文(早-前-中-後)
46	三輪野山八幡宮遺跡	古墳,古墳,平安,古墳	117	長崎余兼院遺跡	古墳,平安
47	志野谷地蔵宮遺跡	古墳(後),平安	118	野々下長田遺跡	縄文(早-前-中-後)
48	志野谷河内第1遺跡	縄文	119	野々下末和山遺跡	縄文(中-後),古墳(後),平安
49	志野谷河内第2遺跡	縄文(前-中),古墳(中-後)	120	野々下土手内遺跡	縄文(中)
50	志野谷宮後遺跡	縄文	121	河ノ下遺跡	縄文(中-後),平安
51	志野谷中島遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),奈良-平安,古墳	122	前ヶ崎城跡	中世
52	志野谷山向遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),古墳(中-後),平安,中-古墳	123	前ヶ崎遺跡	縄文(前)
53	三輪野山道六神遺跡	古墳,古墳,平安,中世	124	名都御城跡	中世
54	三輪野山宮前遺跡	縄文(前),古墳(後),平安,古墳	125	清原院前遺跡	縄文(前),平安,古墳
55	三輪野山第1遺跡	縄文,古墳(後),平安,古墳	126	名都(1)遺跡	縄文(中),弥生,古墳
56	三輪野山北遺跡	旧石器,縄文(前-後),古墳,平安,古墳	127	名都御城跡	縄文(前-中),平安
57	志野谷野々久保遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),中-古墳	128	名都御城跡	縄文(前),平安
58	志野谷二見田遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),古墳(前-後),奈良-平安,中-古墳	129	名都宮宮ノ脇遺跡	縄文(中)
59	志野谷分野遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),古墳(後),近世	130	星原(1)遺跡	縄文(中)
60	大久保遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),奈良-古墳	131	榑木内城跡	中世
61	志野谷人内遺跡	旧石器,縄文(前-中-後-晩),古墳(前-中),奈良,中-古墳	132	榑木内遺跡	縄文(前-中-後),中世
62	志野谷宮宮遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),古墳(後),奈良-平安	133	行人台遺跡+行人台城跡	縄文(早-前-中),古墳(中-後),中世
63	西野石五丁目遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後-晩),弥生,古墳(前),奈良-平安,古墳	134	久保平貫(殿平貫河原)遺跡	古墳
64	三輪野山向原古墳	縄文(前),弥生,古墳(前)	135	久保平貫遺跡	古墳
65	大野西側遺跡	縄文(早-中),古墳(後),平安	136	二ノ木台台遺跡	縄文(前)
66	大野中ノ割遺跡	縄文(早-前-中),平安	137	神邊遺跡	旧石器,縄文(前-中),古墳(中)
67	花輪城跡	中世	138	流山南寺遺跡	奈良
68	下倉堀林下遺跡	縄文(後),古墳(後)	139	上貝塚日塚	旧石器,縄文(前-中-後-晩),中-古墳
69	下倉堀堀木前遺跡	旧石器,縄文(早-前-中-後),弥生,古墳,奈良-平安,中世	140	三輪野山野馬土手	古墳
70	下倉堀西山遺跡	縄文,古墳,中世	141	駒木野馬土手	古墳
			142	志野谷駒木野馬土手	古墳
			143	十六夫野馬土手	古墳
			144	大野野馬土手	古墳
			145	志野谷-野々下野馬土手	古墳
			146	長崎一丁野馬土手	古墳
			147	野々下野馬土手	古墳

谷立野遺跡ではこのほか早期と思われる大規模な礎群が検出されている。これらの遺跡は野島式期から鶯ガ島台式期を中心とし、茅山上層式以降の早期末になると遺跡数は急速に減少する。前期は初頭の花積下層式段階では遺跡数の少ない状況が続く。そうした中で坂川を隔てた対岸にあたる松戸市の幸田貝塚(83)⁽¹¹²⁾は、花積下層式期から関山式期を中心とした多数の堅穴住居跡と大規模な貝層が形成されており、当地域における拠点的な集落である。流山市内では同じ時期の遺構は少なく、加町畑遺跡(26)⁽¹¹²⁾、同第Ⅱ遺跡、三輪野山八幡前遺跡(旧下屋敷遺跡)(46)⁽¹¹²⁾、加北谷津第Ⅰ遺跡(40)⁽¹¹²⁾、同第Ⅱ遺跡、三輪野山八重塚遺跡⁽¹¹³⁾、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡、大畔西割遺跡(65)⁽¹¹³⁾、三輪野山宮前遺跡(54)⁽¹¹³⁾などが挙げられる。三輪野山宮前遺跡では黒浜式から諸磯b式ないしは浮島式までの堅穴住居跡のほか、完形に近い土器や玉類を伴う土坑群が検出されており、墓域と推測される。なお、新市街地地区でも同時期の遺構が検出されており、市野谷芋久保遺跡や市野谷立野遺跡などで堅穴住居跡が確認されているが⁽¹¹⁹⁾、内陸部に位置するためか全体に遺構数は少なく密度は希薄である。諸磯・浮島式期ではほかに長崎遺跡で貝層を伴う堅穴住居跡から良好な資料が出土しており、三輪野山宮前遺跡、三輪野山八幡前遺跡では諸磯式期及び浮島式期の堅穴住居跡が検出されている。中期では前半の五領ヶ台式期から阿玉台・勝坂式期までは遺跡が少ないが、中葉から後半にかけて遺跡が増加する。野々下元木戸遺跡(119)⁽¹¹³⁾と向下遺跡(121)⁽¹¹³⁾は包蔵地としては別々に扱われているが本来は同一の集落跡と考えられるもので、中期後半から後期前葉までの堅穴住居跡と土坑群、貝ブロックを伴うピットなどが検出されている。名都借宮ノ脇遺跡(名都借第Ⅱ遺跡)(129)⁽¹¹³⁾では中期中葉の堅穴住居跡とフラスコ状土坑が検出されている。また地図の外になるが、中野久木谷頭遺跡では中峠式期から加曾利E式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。中期末から後期初頭にかけては一時的な遺跡数の減少が認められるが、後期前葉の堀之内1式以降は多くの遺跡が存在する。思井上ノ内遺跡では堀之内1式から加曾利B1式にかけての堅穴住居跡11軒、土坑14基、貝ブロック8か所、埋葬人骨などが検出されている。中屋敷遺跡⁽¹¹³⁾が位置する江戸川と坂川に挟まれた台地の南端(先端)部には鱈ヶ崎(前ヶ崎)貝塚(10)が存在する。1950年代初頭に酒詰伸男氏と岡田茂弘氏に率いられた学習院高等科史学部が調査を実施し、堀之内式期から加曾利B式期にかけての遺構群が濃密に分布することが明らかになっている⁽¹¹⁴⁾。目を北に転じると、市野谷二反田遺跡⁽¹¹¹⁾では後期初頭の称名寺式期を中心とする堅穴住居跡が13軒検出されているほか、大久保遺跡⁽¹¹⁵⁾ではやはり称名寺式の埋設土器を伴う堅穴住居跡が検出されており、後期初頭は内陸部の遺跡で集落が営まれる傾向にある。古間木茶莢木谷遺跡(37)⁽¹¹⁴⁾では部分的な調査ではあるが後期の堅穴住居跡が検出され、集落の存在が想定される。三輪野山貝塚(45)⁽¹¹²⁾では後期から晩期にかけて100軒を超える堅穴住居跡、5か所の貝層、20基あまりの土坑墓群、晩期中葉と考えられる道路状遺構、水場遺構、埋葬人骨などが検出されているほか、環状に構築された堅穴住居跡をはじめとする遺構群に囲まれるようにすり鉢状に削られた窪地が存在する。削られた土砂は周囲に盛り上げられたと考えられ、いわゆる環状盛土と中央窪地の関係をよく示す成果である。三輪野山貝塚に関連すると思われる遺構は周辺遺跡からも検出されており、東側の三輪野山八幡前遺跡では三輪野山貝塚の中央地と一体になっていると思われる窪地が続いていて、それを取り囲むように後期前葉から晩期前葉にかけての堅穴住居跡が多数検出されているほか、窪地から集落東側へ延びる道路状遺構が検出されている。三輪野山宮前遺跡などでも同時期の堅穴住居跡や掘立柱建物も検出され

ている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚のほか、野々下貝塚(33)¹¹⁶⁻¹⁶、上貝塚貝塚(139)¹¹⁵、地図の外になるが上新宿貝塚などは大規模な環状貝塚として知られている。いずれの貝塚も後期前葉の堀之内式期あたりから形成が開始され、晩期中頃まで存続するのが確認されているが、晩期終末頃は遺構・遺物ともほとんどみられなくなる。

弥生時代は遺跡の分布が希薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山北浦遺跡で中期の須和田式土器が出土し、加村台遺跡(25)と下花輪荒井前遺跡で宮の台式期の住居跡が検出されている程度である。その中で加村台遺跡では環濠と推測されるV字溝が検出されている。坂川流域では対岸の松戸市内で中芝遺跡(84)、道六神遺跡(85)、原の山遺跡(88)があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が大きく増加してくる。前期から中期にかけては、江戸川流域では三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡、三輪野山Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡等が、また坂川流域では市野谷地域で市野谷宮尻遺跡(62)¹¹⁶、市野谷入台遺跡、市野谷向山遺跡等が各々集落群を形成している。三輪野山道六神遺跡では北陸系の土器が、三輪野山宮前遺跡では東海系の土器が出土しており、他地域との交流を示すものと言える。市野谷地区は坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。市野谷宮尻遺跡は3世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の竪穴住居跡が90軒検出され、そのうちの1軒から東日本で最も古い墨書土器が出土している。市野谷入台遺跡では前期から中期にかけての竪穴住居跡が35軒検出されているほか、小規模ながら石製模造品の製作跡も検出されており、江戸川流域では最古級に位置づけられる。同じく坂川水系の最奥部に位置する西初石五丁目遺跡では前期の竪穴住居跡が20軒検出されており、そのうち1軒から小形仿製鏡が出土している。野々下元木戸遺跡と向下遺跡からは前期の竪穴住居跡が19軒検出されている。西初石五丁目遺跡や野々下元木戸遺跡・向下遺跡の竪穴住居は比較的短期間の構築にとどまっており、開拓集落的な様相を呈している。中期には遺構数の一時的な減少が認められるものの、後期になると集落規模は拡大し、遺跡も更に増加する。また三輪野山地区や市野谷地区以外にも分布域が広がり、思井上ノ内遺跡に近い江戸川流域の加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡(25)、加町畑遺跡、加北谷津第Ⅰ遺跡、同第Ⅱ遺跡、平和台遺跡等が顕著な集落遺跡群を形成してくる。とりわけ加町畑遺跡は後期の竪穴住居跡74軒のみならず、奈良・平安時代の竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡17棟が検出されており、拠点集落の一つである。一方、古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳(64)が、本遺跡の南約500mには前方後円墳の三本松古墳(鯉ヶ崎塚の越遺跡内)が、そして加地区に終末期古墳の北谷津古墳(加北谷津第Ⅱ遺跡内)が所在している。

奈良時代から平安時代になると遺跡は飛躍的に増大する。思井上ノ内遺跡や思井堀ノ内遺跡の所在する思井地区から前平井遺跡(14)や平和台遺跡、加町畑遺跡、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。思井堀ノ内遺跡からは8世紀後半から10世紀初頭にかけての竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡6棟、土器焼成遺構や鍛造遺構が検出されたほか、「庄」と記された墨書土器40点以上や緑釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、当地における拠点集落であるとともに初期荘園であった可能性が強い。思井上ノ内遺跡からは8世紀前半から10世紀にかけての竪穴住居跡16軒、掘立柱建物10棟、土器焼成遺構4基などが検出され、調査継続中の前平井遺跡は70軒を超える竪穴住居跡が検出されている。前平井地区の北側は加地区となるが、ここは特に集

落の発達が目ましく、既に古墳時代から多数の堅穴住居が作られるが、奈良時代前半に一時的に減少するものの後半になって飛躍的に増大する。本書で報告する前平井堀米遺跡についても、この地域の動静を反映した集落跡が検出されている。特に町畑遺跡では堅穴住居のほか掘立柱建物も多数構築され、武蔵国から多数の土器が搬入されるなど、当地区の中心的な位置を占めていたと推測される。さらに目を北に転じると、三輪野山地区には式内社比定社の茂侶神社が存在するが、神社の南側に広がる三輪野山宮前遺跡では社殿から南へ約150mの地点で9世紀前半以前と考えられる掘立柱建物跡群が検出されたほか、近接する8世紀後半の堅穴住居跡からは巡方やガラス玉、耳環などが、9世紀初頭の堅穴住居跡からは下総国分寺と同范の六葉宝相華文軒丸瓦が出土しており、三輪野山遺跡群の古代集落の中でも中心的な位置にあたると思われる。神社の西側に当たる三輪野山北浦遺跡では、9世紀後半の堅穴住居跡から皇朝十二銭の一つである隆平永寶が出土している。神社の南西側に当たる三輪野山道六神遺跡では、鍛冶遺構を伴う堅穴住居跡が検出されている。平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山庵寺(138)⁽¹⁸⁾が、鱈ヶ崎地区には平安時代創建とされる東福寺(10、鱈ヶ崎貝塚と同位置)が立地しているが、茂侶神社を含めたこれらの3寺社は下総国府と常陸国府を結ぶ古代東海道ないしはその支路沿いに立地していたと考えられており、奈良・平安時代の集落も3寺社の間に集中する。一方で当遺跡が立地する中地区や市野谷地区など、坂川の upstream にあたる地区は遺構の密度も相対的に低くなることから、古道とともに太日川(現江戸川)を利用した水運も重要な役割を果たしていたと考えられる。これらの遺跡群が古代葛飾郡桑原郷の中核をなす集落群であるとする指摘もなされている⁽¹⁸⁾。

鎌倉時代以降の中・近世遺跡は比較的多い。このうち城郭跡は江戸川流域で本遺跡北方2.3kmの花輪城跡(67)、坂川対岸の南1.7kmの小金城跡(94)、同東1.7kmと2.2kmにある名都借城跡(124)、前ヶ崎城跡(122)があるが、これらは中世後期の戦国時代に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。発掘調査された中・近世遺跡の多くが、地下式坑や土坑墓そして屋敷跡と考えられてきている台地整形区画等が検出されている中世後期以降の遺跡であり、鎌倉時代～室町時代前半の中世前期の遺跡は千葉県内の他地域と同様に少ない。

このうち思井堀ノ内遺跡⁽¹⁹⁻²⁰⁾からは13世紀～15世紀にかけての掘立柱建物群、方形周溝区画墓、土坑群、地下式坑群が検出されている。特に方形周溝区画墓からは青磁碗・皿、白磁皿、和鏡、円形木製品、木櫛、菊花形皿などが副葬された成人女性骨が出土している。時期は13世紀後半～14世紀初頭と考えられ、被葬者は13世紀代に当地を支配していた地頭矢木式部太夫胤家の妻である可能性が指摘されている。なお、掘立柱建物群も同時期と考えられ、矢木氏の居館であると推測される。市野谷入台遺跡では13世紀代と考えられる方形堅穴建物群が検出されている。さらに本遺跡周辺をみると前平井遺跡、前平井堀米遺跡(1)、加東割遺跡(28)⁽¹⁸⁾、加町畑遺跡、西平井根郷遺跡(28)⁽¹⁸⁾、西平井二階畑遺跡(3)⁽¹⁸⁾、三輪野山宮前遺跡⁽¹⁸⁾、三輪野山道六神遺跡⁽¹⁸⁾、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が確認されており、思井地区から西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続き拠点的な位置を占めていたことを想定させている。

注

- 1 菊地隆男 1980「古東京湾」『アーバン・クボタ』No.18
- 2 遠藤邦彦・小杉正人・松下まり子・宮地直道・菱田 量・高野 司「千葉県古流山湾周辺域における完新世の

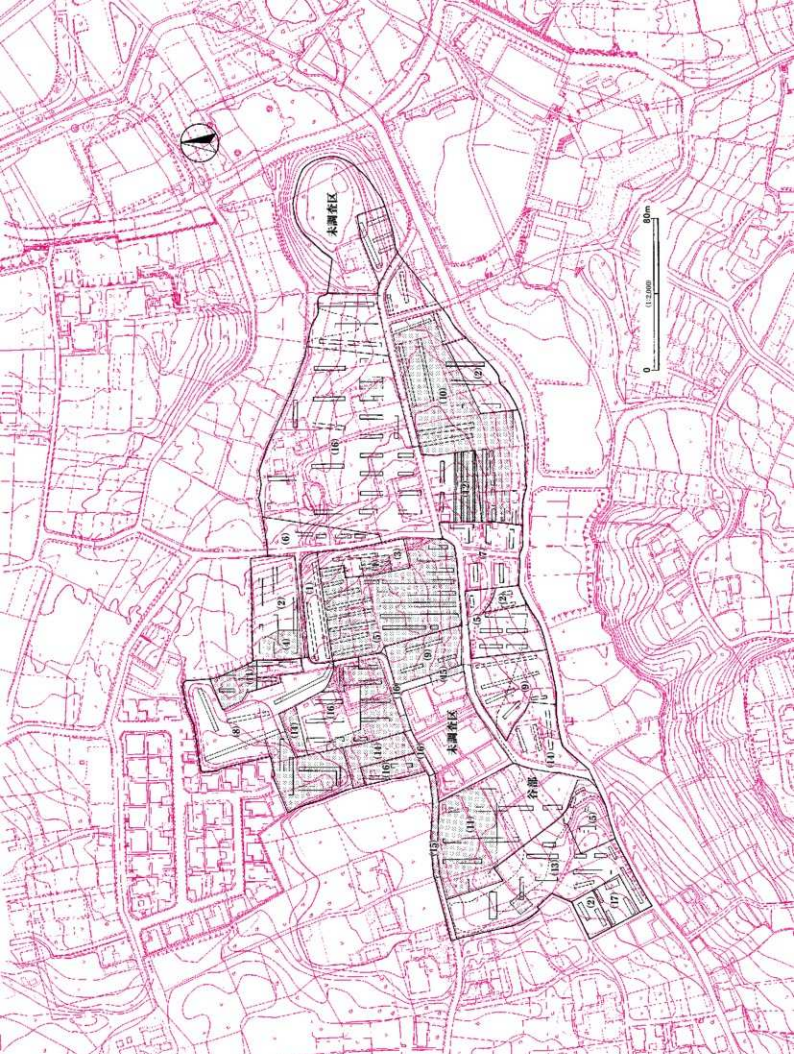
- 3 (財)千葉県教育振興財団 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器-奈良・平安時代編)-』
- 4 千葉県教育委員会 2016『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書3-流山市思井上ノ内遺跡-』
- 5 (財)千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書-流山市南割遺跡・上貝塚第Ⅱ遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡-』

なお、この報告書に掲載されている三輪野山第Ⅱ遺跡の調査範囲は、現在の三輪野山北浦遺跡と三輪野山道六神遺跡の2遺跡にまたがっている。また、下花輪第Ⅲ遺跡は現在桐ヶ谷浅間後遺跡と呼称されている。

- 6 流山市教育委員会 2015『流山市三輪野山遺跡群発掘調査概要報告書』
- 7 (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市西初石五丁目遺跡-』
- 8 (公財)千葉県教育振興財団 2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書6-流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡-旧石器時代編』
- 9 (公財)千葉県教育振興財団 2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7-流山市市野谷茅久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(上層)・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡-』
- 10 (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3-流山市市野谷入台遺跡-』
- 11 (財)千葉県教育振興財団 2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4-流山市市野谷二反田遺跡-』
- 12 (財)千葉県教育振興財団 2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5-流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡-』
- 13 (公財)千葉県教育振興財団 2016『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書8-流山市市野谷茅久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・十太夫第Ⅲ遺跡-』

- 14 流山市遺跡調査会 1985『千葉県流山市長崎遺跡』
- 15 流山市教育委員会 1988『千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡』
- 16 山武考古学研究所 1982『大原神社遺跡』
- 17 流山市教育委員会 1993『千葉県流山市平和台遺跡発掘調査概報』
- 18 流山市教育委員会 2003『Ⅰ、平和台遺跡(2)』『平成13年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 19 流山市教育委員会 1985『千葉県流山市三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡』
- 20 三輪野山八重塚遺跡調査会 1982『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡』
- 21 流山市遺跡調査会 1985『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡B地点』
- 22 流山市教育委員会 1989『加地区遺跡群Ⅰ』
- 23 流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室 2004『流山市西平井・鱈ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』
- 24 古里節夫 2000『幸田貝塚』『千葉県の歴史 資料編 考古Ⅰ(旧石器・縄文時代)』千葉県
なお、ここでは省略したが、この遺跡については主に松戸市教育委員会によって数多くの調査が行われ、概報も多数刊行されている。
- 25 流山市教育委員会 1991『加地区遺跡群Ⅱ』
- 26 流山市教育委員会 1994『加地区遺跡群Ⅲ』

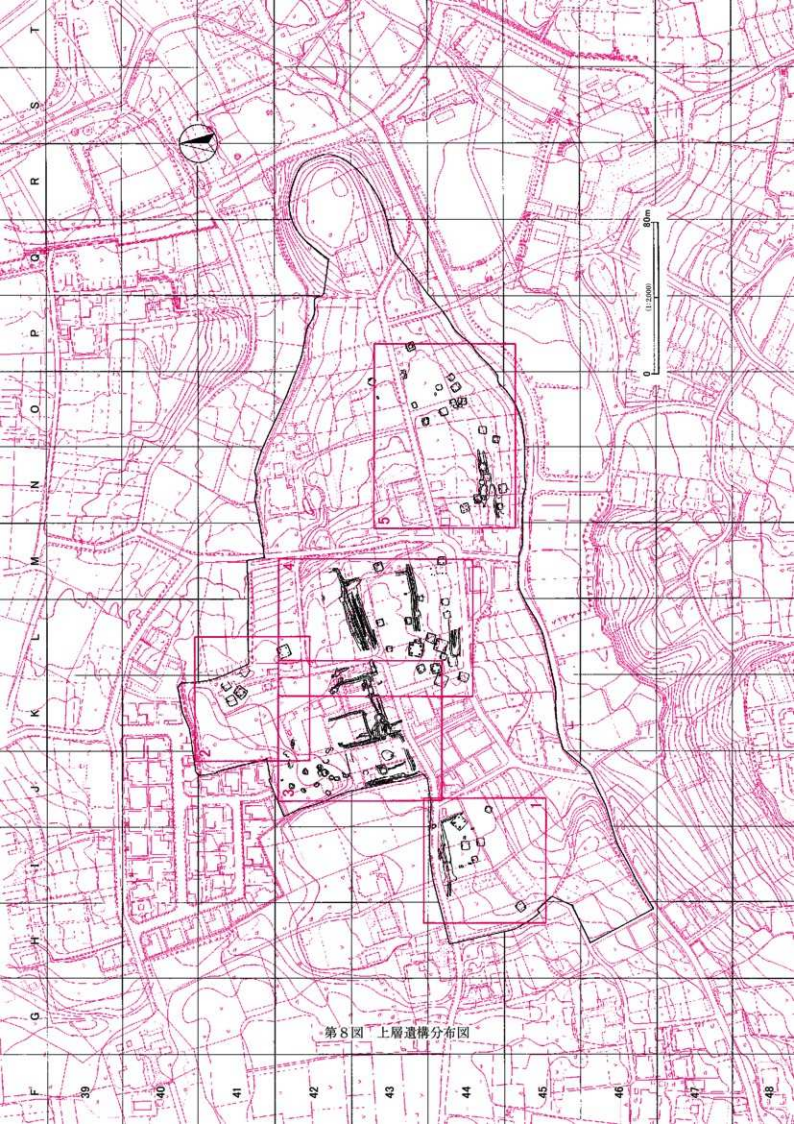
- 27 流山市教育委員会 2000『加地区遺跡群Ⅳ』
- 28 (財)千葉県教育振興財団 2010『流山市下花輪荒井前遺跡－高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 29 下屋敷遺跡調査会・流山市教育委員会 1986『流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書』
- 30 流山市教育委員会 1991『Ⅲ、三輪野山八重塚遺跡F地点』『平成二年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 31 流山市教育委員会 2002『Ⅰ、三輪野山八重塚遺跡Ⅰ・Ⅱ地点』『平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 32 (株)東京航業研究所 2015『流山市三輪野山八重塚遺跡K地点－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
- 33 流山市教育委員会 2003『Ⅰ、大畔西湖遺跡』『平成14年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 34 流山市教育委員会 2010『Ⅱ、三輪野山宮前遺跡A地点8』『平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 35 (株)地域文化財コンサルタント 2009『流山市野々下元木戸遺跡(第3次調査)』
- 36 流山市教育委員会・(株)東京航業研究所 2011『流山市野々下元木戸遺跡(第2次調査)』
- 37 流山市教育委員会・(株)地域文化財研究所 2012『向下遺跡 野々下元木戸遺跡(第4次)』
- 38 流山市教育委員会 1989『千葉県流山市名都借第Ⅱ遺跡発掘調査概要』
- 39 流山市教育委員会 1998『Ⅰ、中中屋敷遺跡』『平成9年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 40 酒詰伸男・岡田茂弘他 刊行年不詳(1952～1953?)『千葉県前ヶ崎貝塚発掘調査報告』学習院高等科史学部
- 41 流山市教育委員会 1997『Ⅱ、古間木菜莢木谷遺跡』『平成8年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 42 (財)千葉県文化財センター 2001『主要地方道松戸野田線住宅宅地間埋蔵文化財調査報告書－流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前－』
- 43 (財)千葉県文化財センター 2004『主要地方道松戸野田線住宅宅地間埋蔵文化財調査報告書(2)－流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡－』
- 44 流山市教育委員会 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』
- 45 (財)千葉県文化財センター 1995『流山市野々下貝塚確認調査報告書』
- 46 流山市教育委員会 2013『Ⅲ、野々下貝塚』『平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 47 (財)千葉県教育振興財団 2006『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書1－流山市市野谷宮尻遺跡－』
- 48 辻 史郎 1998『119 流山廃寺』『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 49 (財)千葉県教育振興財団 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1－流山市思井堀ノ内遺跡(中世編)－』
- 50 流山市教育委員会 2007『Ⅴ、思井堀ノ内遺跡』『平成17年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 51 (財)千葉県文化財センター 1997『流山市若宮第Ⅱ遺跡－都市計画道路3・3・2号線(新川南流山線)埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- なお、調査範囲は若宮第Ⅱ遺跡から加東割遺跡にまたがっており、中世遺構が検出された部分は加東割遺跡の範囲内に当たる。
- 52 (株)地域文化財研究所 2014『加東割遺跡 3次』
- 53 流山市教育委員会 2011『Ⅲ、三輪野山宮前遺跡A地点8-2』『平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
- 54 北澤 滋 1998『三輪野山遺跡群(三輪野山道六神遺跡B地点)』『千葉県の歴史 資料編 中世1(考古資料)』千葉県



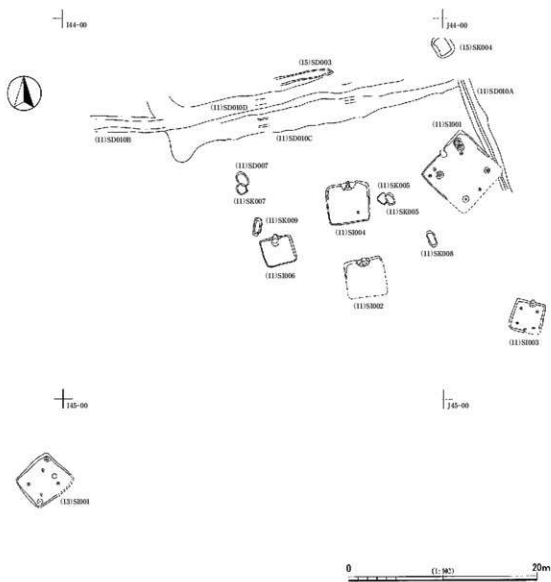
第6図 上層確認調査トレンチ配置



第7図 下層確認調査グリッド配置



第8図 上層遺構分布図

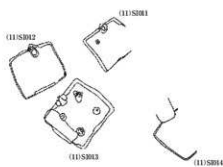


第9図 遺構配置図1

K41-00



L41-00



K42-00

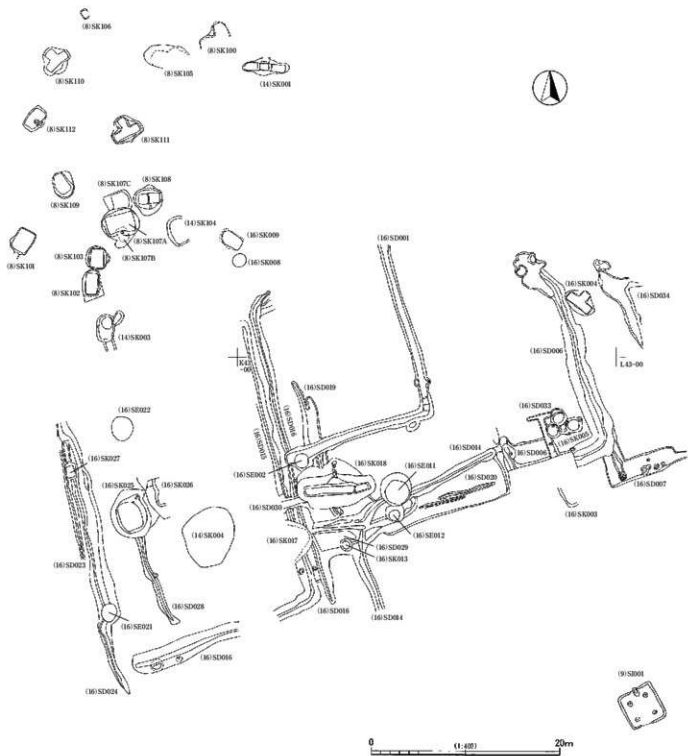


0 10m 20m

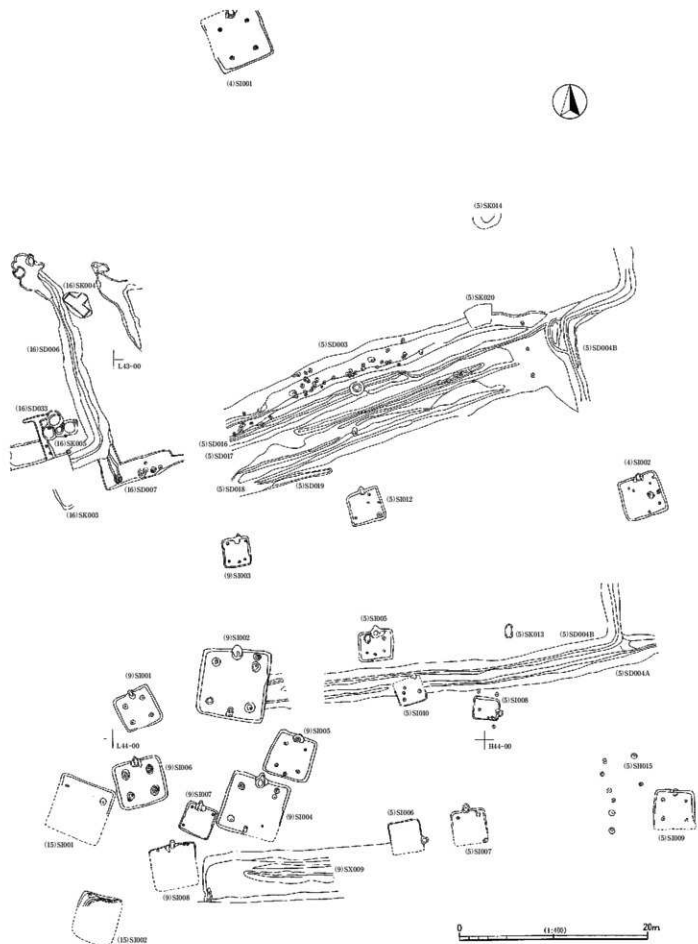
L42-00



第10図 遺構配置図2



第11図 遺構配置図3



第12図 遺構配置図4



第13図 遺構配置図5

第3表 前平井堀米遺跡上層遺構一覽表

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時 代	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	所在グリッド	備 考
(11)	平成15	(11) SK 008	008	陥穴	縄文	1.80	0.80	1.72	I44-59	
(11)	平成15	(11) SK 009	009	陥穴	縄文	1.65	0.87	2.27	I44-55	
(4)	平成12	(4) SI 001	001	竪穴住居跡	8世紀1	6.10	5.90	0.45	L42-13	
(4)	平成12	(4) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀1	4.68	4.40	0.49	M43-34	
(5)	平成13	(5) SI 005	005	竪穴住居跡	9世紀1	3.72	3.28	0.45	L43-79	
(5)	平成13	(5) SI 006	006	竪穴住居跡	9世紀4	3.52	3.30	0.17	L44-28	
(5)	平成13	(5) SI 007	007	竪穴住居跡	8世紀4	3.70	3.60	0.28	L44-29	
(5)	平成13	(5) SI 008	008	竪穴住居跡	8世紀3	2.80	2.40	0.20	M43-90	
(5)	平成13	(5) SI 009	009	竪穴住居跡	8世紀1~2	4.40	4.20	0.30	M44-15	
(5)	平成13	(5) SI 010	010	竪穴住居跡	8世紀3~4	3.06	2.83	0.21	L43-88	
(5)	平成13	(5) SI 011	011	竪穴住居跡	8世紀代	-	-	-	M43-89	
(5)	平成13	(5) SI 012	012	竪穴住居跡	9世紀3	3.72	3.60	0.16	L43-36	
(9)	平成15	(9) SI 001	001	竪穴住居跡	8世紀3~4	4.20	4.10	0.21	L43-90	
(9)	平成15	(9) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀2~3	3.74	3.58	0.52	L43-82	
(9)	平成15	(9) SI 003	003	竪穴住居跡	8世紀4	3.04	2.86	0.30	L43-53	
(9)	平成15	(9) SI 004	004	竪穴住居跡	8世紀1	3.20	3.20	0.57	L44-13	
(9)	平成15	(9) SI 005	005	竪穴住居跡	8世紀1~2	4.88	4.87	0.49	L44-04	
(9)	平成15	(9) SI 006	006	竪穴住居跡	7世紀4	5.20	4.96	0.35	L44-10	
(9)	平成15	(9) SI 007	007	竪穴住居跡	8世紀4	3.35	3.30	0.47	L44-22	
(9)	平成15	(9) SI 008	008	竪穴住居跡	9世紀3	-	4.87	0.04	L44-31	
(10)	平成15	(10) SI 001	001	竪穴住居跡	7世紀4	3.22	3.05	0.21	O44-17	
(10)	平成15	(10) SI 002	002	竪穴住居跡	9世紀代	3.24	3.15	0.11	O44-38	
(10)	平成15	(10) SI 003	003	竪穴住居跡	8世紀1	4.80	4.00	0.31	O44-37	
(10)	平成15	(10) SI 005	005	竪穴住居跡	7世紀4	-	4.72	0.23	O43-79	
(10)	平成15	(10) SI 006	006	竪穴住居跡	8世紀2~3	4.34	4.30	0.17	P43-73	
(10)	平成15	(10) SI 007	007	竪穴住居跡	8世紀代	4.00	3.95	0.36	O44-71	
(10)	平成15	(10) SI 008	008	竪穴住居跡	8世紀2	3.65	3.57	0.44	O44-80	
(10)	平成15	(10) SI 010	010	竪穴住居跡	7世紀4	3.06	2.76	0.35	O43-85	
(10)	平成15	(10) SI 011	011	竪穴住居跡	8世紀1	4.00	3.40	0.65	O43-93	
(10)	平成15	(10) SI 012	012	竪穴住居跡	8世紀2~3	4.05	3.97	0.41	O44-24	
(10)	平成15	(10) SI 013	013	竪穴住居跡	8世紀3	3.64	2.88	0.36	O44-35	
(10)	平成15	(10) SI 014	014(A)	竪穴住居跡	8世紀4	4.26	3.75	0.42	O44-45	
(10)	平成15	(10) SI 017	017	竪穴住居跡	8世紀1	4.21	4.14	0.63	N44-77	
(10)	平成15	(10) SI 018	018	竪穴住居跡	9世紀代	2.97	2.52	0.50	N44-75	
(10)	平成15	(10) SI 019	019	竪穴住居跡	7世紀4	4.50	4.33	0.63	N44-94	
(10)	平成15	(10) SI 020(A)	020(A)	竪穴住居跡	8世紀2	4.56	3.63	0.33	N44-62	
(10)	平成15	(10) SI 020(B)	020(B)	竪穴住居跡	8世紀1~2	3.02	2.97	0.21	N44-62	
(10)	平成15	(10) SI 020(C)	020(C)	竪穴住居跡	8世紀3?	2.54	2.36	0.25	N44-72	
(10)	平成15	(10) SI 021	021	竪穴住居跡	8世紀1~2	3.50	3.00	0.85	N44-91	
(11)	平成15	(11) SI 001	001	竪穴住居跡	7世紀4	6.36	6.32	0.05	J44-40	
(11)	平成15	(11) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀2	-	4.05	0.18	I44-68	
(11)	平成15	(11) SI 003	003	竪穴住居跡	8世紀代	3.44	3.30	0.04	J44-72	
(11)	平成15	(11) SI 004	004	竪穴住居跡	8世紀3	4.50	4.15	0.16	I44-48	
(11)	平成15	(11) SI 006	006	竪穴住居跡	8世紀3~4	3.36	3.00	0.19	I44-65	
(11)	平成15	(11) SI 011	011	竪穴住居跡	8世紀代	4.46	4.13	0.29	K41-48	
(11)	平成15	(11) SI 012	012	竪穴住居跡	8世紀代	5.27	4.64	0.31	K41-46	
(11)	平成15	(11) SI 013	013	竪穴住居跡	7世紀3~4	6.05	5.32	0.43	K41-55	
(11)	平成15	(11) SI 014	014	竪穴住居跡	8世紀代	-	4.64	0.24	L41-60	
(12)	平成16	(12) SI 001	001	竪穴住居跡	9世紀代	4.65	4.45	0.69	N44-41	
(13)	平成16	(13) SI 001	001	竪穴住居跡	5世紀2~3	4.98	4.31	0.43	H45-29	
(15)	平成16	(15) SI 001	001	竪穴住居跡	8世紀代	-	6.09	0.27	K44-19	
(15)	平成16	(15) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀4	-	4.00	0.61	L44-40	
(16)	平成18	(16) SI 031	031	竪穴住居跡	8世紀3~4	3.86	3.48	0.11	L30-28	
(9)	平成15	(9) SX 009	009	台地整形区画	中世	-	-	-	L44-33	
(5)	平成13	(5) SK 020	020	地下式坑	中世	3.00	2.10	0.98	L42-89	
(8)	平成14	(8) SK 100	100	地下式坑	中世	3.12	-	2.83上	J42-19	
(8)	平成14	(8) SK 101	101	地下式坑	中世	2.40	1.89	0.81	J42-74	
(8)	平成14	(8) SK 102	102	地下式坑	中世	2.52	1.28	1.30	J42-76	
(8)	平成14	(8) SK 103	103	地下式坑	中世	1.98	1.41	1.80	J42-76	
(8)	平成14	(8) SK 104	104	地下式坑	中世	2.60	-	0.89	J42-68	
(8)	平成14	(8) SK 105	105	地下式坑	中世	-	1.76	1.93上	J42-18	
(8)	平成14	(8) SK 107(A)	107(A)	地下式坑	中世	2.96	1.80	1.73	J42-66	
(8)	平成14	(8) SK 108	108	地下式坑	中世	1.12	1.00	2.08	J42-57	
(8)	平成14	(8) SK 109	109	地下式坑	中世	2.29	1.50	1.63	J42-55	
(8)	平成14	(8) SK 110	110	地下式坑	中世	1.82	1.72	2.00	J42-15	底面T字状

調査次	調査年度	報告時道構名	調査時道構名	道構種別	時 代	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	所在 グリッド	備 考
(8)	平成14	(8) SK 111	111	地下式坑	中世	2.05	2.80	1.90	J42-47	底面丁字状
(8)	平成14	(8) SK 112	112	地下式坑	中世	2.22	1.38	2.46	J42-34	
(10)	平成15	(10) SK 023A	014(B)	地下式坑	中・近世	3.20	2.22	1.77	O44-35	
(10)	平成15	(10) SK 023B	015(C)	地下式坑	中・近世	1.90	1.72	2.45	O44-35	3基から構成される地下式坑
(10)	平成15	(10) SK 023C	014(D)	地下式坑	中・近世	2.22	1.68	1.67	O44-35	
(14)	平成16	(14) SK 001	001	地下式坑	中・近世	4.35	0.75	1.85	K42-20	
(14)	平成16	(14) SK 004	004	地下式坑	中・近世	5.06	3.72	1.26以上	J43-49	
(16)	平成18	(16) SK 004	004	地下式坑	中・近世	2.80	1.74	1.70	K42-89	
(16)	平成18	(16) SK 009	009	地下式坑	中・近世	2.40	1.46	2.02	J42-69	
(16)	平成18	(16) SK 025	025	地下式坑	中・近世	2.79	1.92	1.2以上	J43-47	
(16)	平成18	(16) SK 026	026	地下式坑	中・近世	3.04	-	0.86	J43-37	
(5)	平成13	(5) SK 013	013	土坑	中・近世	1.47	0.84	0.23	M43-70	
(5)	平成13	(5) SK 014	014	土坑	中・近世	2.98	-	1.15	M42-60	
(8)	平成14	(8) SK 107B	107(B)	土坑	中・近世	1.46	1.06	0.41	J42-66	粘土貼り土坑
(8)	平成14	(8) SK 107C	107(C)	土坑	中・近世	2.62	-	0.24	J42-56	
(10)	平成15	(10) SK 004	004	土坑	中・近世	1.58	0.89	0.28	O44-16	土坑壺か
(11)	平成15	(11) SK 005A	005(A)	土坑	中・近世	1.28	0.82	0.28	I44-48	
(11)	平成15	(11) SK 005B	005(B)	土坑	中・近世	1.07	1.03	0.05	I44-48	
(11)	平成15	(11) SK 007A	007(A)	土坑	中・近世	1.64	1.02	0.32	I44-44	
(11)	平成15	(11) SK 007B	007(B)	土坑	中・近世	1.18	1.00	0.34	I44-44	
(15)	平成16	(15) SK 004	004	土坑	中・近世	2.46	1.92	0.54	J44-00	
(16)	平成18	(16) SK 003	003	土坑	中・近世	-	-	0.49	K43-38	
(16)	平成18	(16) SK 005	005	土坑	中・近世	-	-	0.46	K43-18	
(16)	平成18	(16) SK 013	013	土坑	中・近世	1.35	1.24	1.08	K43-42	
(16)	平成18	(16) SK 017	017	土坑	中・近世	3.70	-	2.3以上	K43-41	地下式坑の可能性あり
(16)	平成18	(16) SK 018	018	土坑	中・近世	6.88	0.65	1.43	K43-32	特殊な土坑
(16)	平成18	(16) SK 027	027	土坑	中・近世	1.78	1.22	0.59	J43-35	
(16)	平成18	(16) SK 032	032	土坑	中・近世	1.88	0.99	0.23	O43-36	
(8)	平成14	(8) SK 106	106	土壇墓	中世	1.02	0.78	0.14	J42-05	土葬人骨、六文銭
(14)	平成16	(14) SE 003	003	井戸	中・近世	1.00	-	2.0以上	J42-96	
(16)	平成18	(16) SE 002	002	井戸	中・近世	1.50	-	1.9以上	K43-21	
(16)	平成18	(16) SE 008	008	井戸	中・近世	0.90	-	1.3以上	K42-70	
(16)	平成18	(16) SE 011	011	井戸	中・近世	1.80	-	1.9以上	K43-34	
(16)	平成18	(16) SE 012	012	井戸	中・近世	0.90	-	1.9以上	K43-44	
(16)	平成18	(16) SE 021	021	井戸	中・近世	1.25	-	1.3以上	J43-66	
(16)	平成18	(16) SE 022	022	井戸	中・近世	1.80	-	1.2以上	J43-26	
(5)	平成13	(5) SH 015	015	ピット群	中・近世	-	-	-	M44-13	ピット8基
(5)	平成13	(5) SH 023	006-P7	ピット群	中・近世	-	-	-	L43-77	ピット4基
(5)	平成13	(5) SD 003	003	溝状遺構	中・近世	L43-13	-	M43-90	総延長約35m	
(5)	平成13	(5) SD 004A	004	溝状遺構	中・近世	L43-84	-	M43-74	総延長約50m	
(5)	平成13	(5) SD 004B	004B	溝状遺構	中・近世	L43-84	-	M43-63(4か)	総延長約90m	
(5)	平成13	(5) SD 016	016	溝状遺構	中・近世	L43-23	-	M42-93	総延長約35m	
(5)	平成13	(5) SD 017	017	溝状遺構	中・近世	L43-23	-	M42-83	総延長約35m	
(5)	平成13	(5) SD 018	018	溝状遺構	中・近世	L43-33	-	M42-93	総延長約35m	
(5)	平成13	(5) SD 019	019	溝状遺構	中・近世	L43-33	-	N43-35	総延長約10m	
(10)	平成15	(10) SD 022	022	溝状遺構	中・近世	N44-63	-	N44-69	総延長約28m	
(11)	平成15	(11) SD 019A	019(A)	溝状遺構	中・近世	J44-10	-	J44-41	総延長約24m	
(11)	平成15	(11) SD 019B	019(B)	溝状遺構	中・近世	I44-20	-	I44-18	総延長約33m	
(11)	平成15	(11) SD 019C	019(C)	溝状遺構	中・近世	I44-33	-	J44-10	総延長約28m	
(11)	平成15	(11) SD 019D	019(D)	溝状遺構	中・近世	I44-22	-	I44-33	総延長約8m	
(15)	平成16	(15) SD 003	003	溝状遺構	中・近世	I44-15	-	I44-16	総延長約7m	
(16)	平成18	(16) SD 001	001	溝状遺構	中・近世	K43-21	-	K42-73	総延長約35m	
(16)	平成18	(16) SD 006	006	溝状遺構	中・近世	K42-77	-	K43-38	総延長約27m	
(16)	平成18	(16) SD 007	007	溝状遺構	中・近世	K43-29	-	K43-21	総延長約10m	
(16)	平成18	(16) SD 014	014	溝状遺構	中・近世	K43-63	-	K43-26	総延長約24m	
(16)	平成18	(16) SD 015	015	溝状遺構	中・近世	J43-87	-	K42-90	総延長約50m	
(16)	平成18	(16) SD 016	016	溝状遺構	中・近世	K42-80	-	K43-62	総延長約34m	
(16)	平成18	(16) SD 019	019	溝状遺構	中・近世	K43-01	-	K43-42	総延長約15m	
(16)	平成18	(16) SD 020	020	溝状遺構	中・近世	K43-43	-	K43-37	総延長約15m	
(16)	平成18	(16) SD 023	023	溝状遺構	中・近世	J43-25	-	J43-55	総延長約12m	
(16)	平成18	(16) SD 024	024	溝状遺構	中・近世	J43-15	-	J43-87	総延長約30m	
(16)	平成18	(16) SD 028	028	溝状遺構	中・近世	J43-47	-	J43-78	総延長約10m	
(16)	平成18	(16) SD 029	029	溝状遺構	中・近世	K43-42	-	K43-43	総延長約6m	
(16)	平成18	(16) SD 030	030	溝状遺構	中・近世	K43-31	-	-	総延長約3m	
(16)	平成18	(16) SD 033	-	溝状遺構	中・近世	K43-17	-	K43-28	総延長約5m	
(16)	平成18	(16) SD 034	-	溝状遺構	中・近世	K42-79	-	L42-90	総延長約12m	

第2章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 概要

前平井堀米遺跡における旧石器時代の調査は、第7図に示したように、ほぼ全域で実施されたものの、立川ロームの堆積は台地中央の標高20m前後から南側緩斜面の標高10m前後の区域に限られていた。また、台地に深く入り込んだ小支谷が確認され、台地の開析が進んでいることも確認された。

石器のブロックが検出されたのは、8次及び10次の調査地区の2地点に限られている。

第2節 遺構と遺物

第1ブロック（第14・16図、図版4・38）

(8)調査区の北から入り込む小支谷の最深部、標高20mの台地縁部に位置する。主に安山岩製の礫と礫片で構成され、J42-06からJ42-16グリッドにかけて2mの範囲に遺物が集中する。出土層位は不明であるが、ローム層中の出土および出土標高から地表面から0.5m程の深度であり、おそらくVI層以下のハードローム層上面の出土であろう。

礫は一樣に被熱し表面は赤化するが、原形を留めている個体が多く、破碎している個体は礫縁部もしくは片端部が欠損しており、敲石のような用法がなされたと考えられる。特に第16図4・7に顕著に認められる。図示した遺物のうち2のみ砂岩製であり、他は安山岩製の礫である。礫片中に石英斑岩製の個体が認められるが極めて希少である。

第2ブロック（第15・16図、図版5・38）

(10)調査区の標高14mの台地縁部に位置する。2点のみの出土であり、出土層位はIX層である。セクション図から理解できるように第2ブロック周辺の台地は著しく削平され、表土層直下は第2黒色帯が検出される状況である。

黒色安山岩製の剥片で構成され、いずれも5cm内外の部厚な不定形剥片である。1・2ともに背面は多方向からの剥離により構成される。

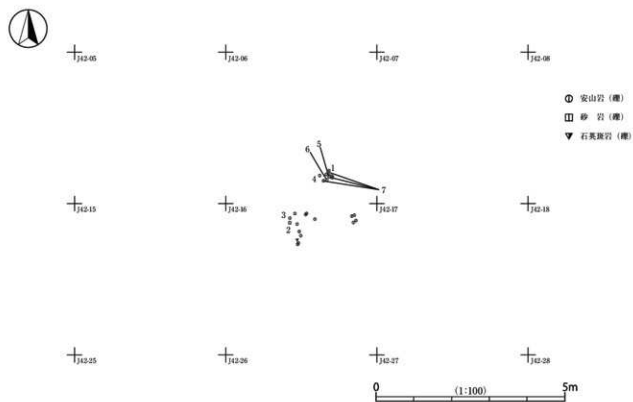
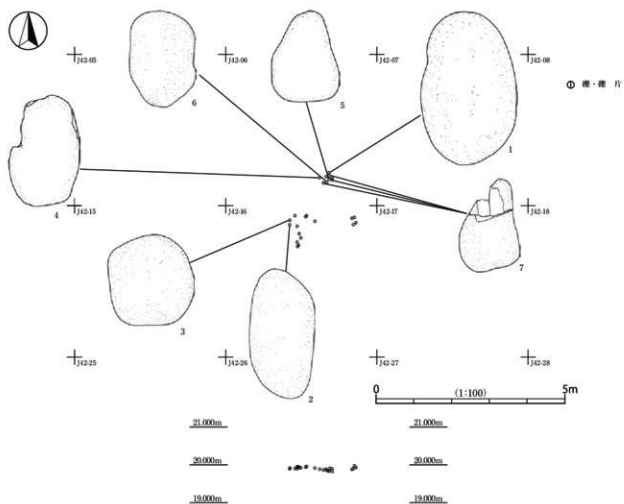
単独出土遺物（第17図、図版38）

本遺跡からはブロックを形成しないが、旧石器時代の遺物が少量出土している。先の第2ブロックのように後世の削平が著しいため、特に黒色安山岩製の石器については、本来はブロックを形成していたと考えられる。

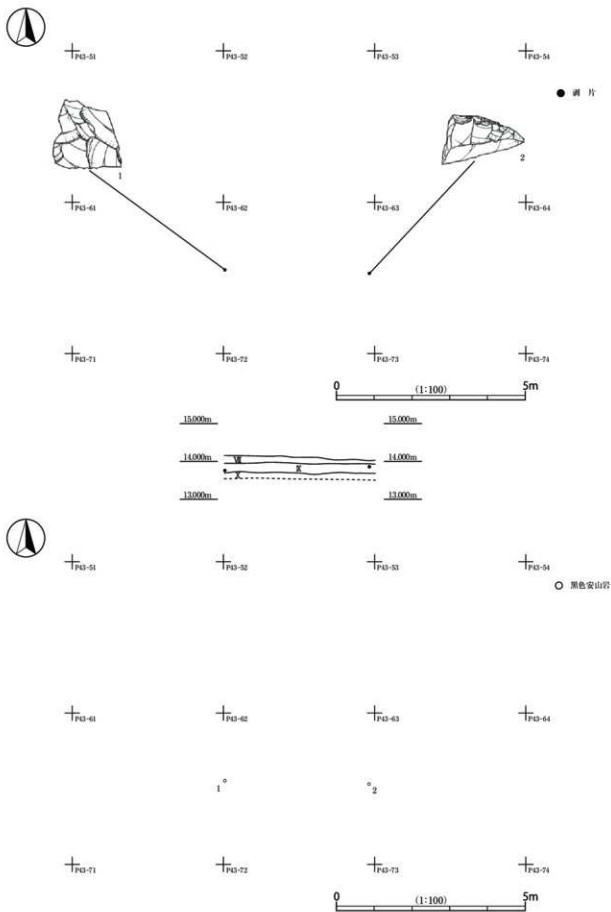
1は黒曜石製のナイフ形石器である。極端な横長剥片を素材とし、素材剥片の打面を除去するように調整が施される。背面を構成する剥離方向は腹面の剥離方向と同一であり、翼状剥片を連続的に作出する瀬戸内技法に類似する。

2は黒曜石製、3は黒色頁岩製の調整痕の認められる剥片である。2は部厚い剥片の腹面側から調整が施される。3は素材剥片の片側縁に調整が認められる。中途から2分する。

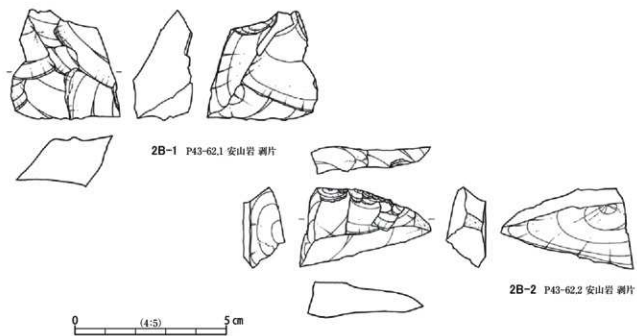
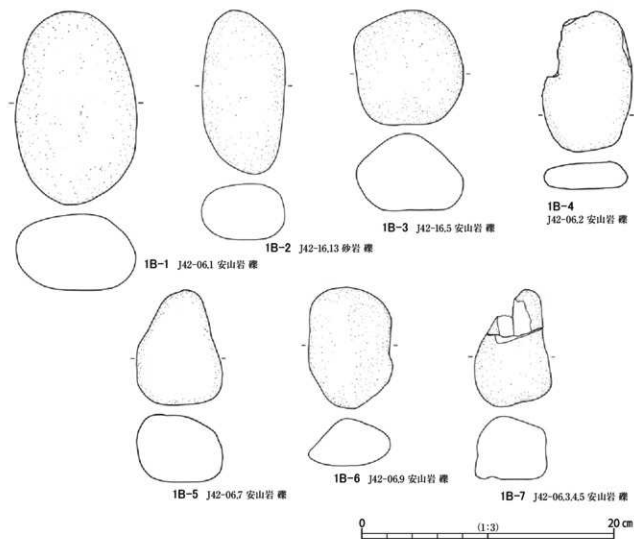
4は黒曜石製の使用痕の認められる剥片である。縦長剥片であり、使用部位は片側縁を主とし、中途から2分した折断面にも微細な使用痕が認められる。



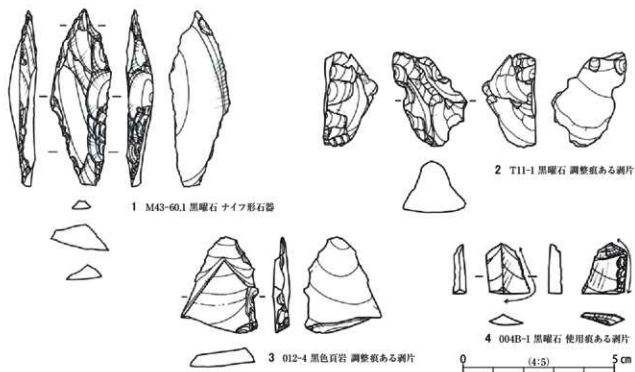
第14図 第1ブロック出土遺物分布



第15図 第2ブロック出土遺物分布



第16図 第1・第2ブロック出土遺物



第17図 単独出土石器

第4表 旧石器時代石器一覧表

No.	挿図番号	調査回数	ブロック	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
1	第16図 1B-1	(8)	第1ブロック	J42-06	1	礫	安山岩	-	-	-	1290.00	被熱
2	第16図 1B-4	(8)	第1ブロック	J42-06	2	礫	安山岩	-	-	-	245.21	被熱
3	第16図 1B-7	(8)	第1ブロック	J42-06	3	礫片	安山岩	-	-	-	9.97	被熱
4	第16図 1B-7	(8)	第1ブロック	J42-06	4	礫片	安山岩	-	-	-	41.59	被熱
5	第16図 1B-7	(8)	第1ブロック	J42-06	5	礫	安山岩	-	-	-	242.92	被熱
6	-	(8)	第1ブロック	J42-06	6	礫	安山岩	-	-	-	235.87	被熱
7	第16図 1B-5	(8)	第1ブロック	J42-06	7	礫	安山岩	-	-	-	444.99	被熱
8	-	(8)	第1ブロック	J42-06	8	礫	安山岩	-	-	-	379.65	被熱
9	第16図 1B-6	(8)	第1ブロック	J42-06	9	礫	安山岩	-	-	-	280.34	被熱
10	-	(8)	第1ブロック	J42-16	1	礫片	安山岩	-	-	-	31.07	被熱
11	-	(8)	第1ブロック	J42-16	2	礫片	安山岩	-	-	-	88.67	被熱
12	-	(8)	第1ブロック	J42-16	3	礫	安山岩	-	-	-	346.68	被熱
13	-	(8)	第1ブロック	J42-16	4	礫片	安山岩	-	-	-	11.87	被熱
14	第16図 1B-3	(8)	第1ブロック	J42-16	5	礫	安山岩	-	-	-	665.00	被熱
15	-	(8)	第1ブロック	J42-16	6	礫片	安山岩	-	-	-	65.38	被熱
16	-	(8)	第1ブロック	J42-16	7	礫片	安山岩	-	-	-	129.89	被熱
17	-	(8)	第1ブロック	J42-16	8	礫片	安山岩	-	-	-	49.54	被熱
18	-	(8)	第1ブロック	J42-16	9	礫	安山岩	-	-	-	194.18	被熱
19	-	(8)	第1ブロック	J42-16	10	礫片	安山岩	-	-	-	109.74	被熱
20	-	(8)	第1ブロック	J42-16	11	礫片	安山岩	-	-	-	45.73	被熱
21	-	(8)	第1ブロック	J42-16	12	礫片	安山岩	-	-	-	61.28	被熱
22	第16図 1B-2	(8)	第1ブロック	J42-16	13	礫	砂岩	-	-	-	610.27	被熱
23	-	(8)	第1ブロック	J42-16	14	礫片	安山岩	-	-	-	26.55	被熱
24	-	(8)	第1ブロック	J42-16	15	礫片	石英斑岩	-	-	-	367.42	被熱
25	-	(8)	第1ブロック	J42-16	16	礫片	安山岩	-	-	-	8.83	被熱
26	第16図 2B-2	(10)	第2ブロック	P43-62	1	剥片	黒色安山岩	354	399	185	17.92	
27	第16図 2B-2	(10)	第2ブロック	P43-62	2	剥片	黒色安山岩	250	444	130	11.76	
28	第17図 1	(5)	単独出土	M43-60	1	ナイフ形石器	黒曜石	5.80	1.99	0.82	7.73	
29	第17図 2	(5)	単独出土	T11	1	調整痕ある剥片	黒曜石	2.94	2.35	1.68	7.24	
30	第17図 3	(5)	単独出土	SD12	4	調整痕ある剥片	黒色頁岩	3.00	2.52	0.46	3.72	
31	第17図 4	(5)	単独出土	SD004B	1	使用痕ある剥片	黒曜石	1.31	1.08	0.33	0.47	

第3章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 概要

調査区内から検出された縄文時代の遺構は、陥穴2基のみである。遺物は縄文時代早期、前期、中期、後期の土器や石器が少量出土しているほか、石棒、珠状耳飾などが出土している。調査区全域で奈良・平安時代などの堅穴住居跡においても遺構の遺存状態が悪かったことから、後世の開墾などの影響が大きく反映されていると考えられる。縄文時代の遺物を包含しているⅡ層の存在もほとんどの地点で確認できないことから、縄文時代の痕跡は、極めて希薄である。

第2節 遺構

概要で記したように、遺構は陥穴2基のみである。形態から中期以降の可能性がある。前期の黒浜式土器の出土量が多かったことから、縄文海進が海退に転じて古流山湾から海が退く中で、黒浜式期にはこの台地にも人々が訪れ、堅穴住居などが営まれた可能性がある。

(11)SK008(第18図、図版18)

J44-59グリッドで検出された。長楕円形を呈する。長軸長1.80m、短軸長0.80m、検出面からの深さ1.72mを測る。底面の長軸長は1.15m、短軸長0.59mである。底面は平らである。出土遺物は皆無であった。

(11)SK009(第18図、図版18)

J44-55グリッドで検出された。長楕円形を呈する。長軸長1.65m、短軸長0.87m、検出面からの深さ2.18mを測る。底面の長軸長は1.30m、短軸長0.54mである。底面はやや起伏がある。覆土は暗茶褐色土を主体とし、中位以下では白色砂質粘土粒の混入が多かった。出土遺物は皆無であった。

第3節 出土遺物

出土した遺物の総量は少なかった。その中で、縄文土器が最も多く、石器は少量である。石製品・土製品は微量である。縄文時代遺物の包含層は各調査区からは確認されておらず、台地全体から散発的な出土にとどまっている。出土した縄文土器の時期は早期から後期に及んでおり、石器もそれらの時期に伴うものと考えられる。

1 縄文土器

出土した早期から後期の縄文土器のうち最も多かったのが、前期の土器である。分類は以下のように行った。

第Ⅰ群土器 早期の土器

第Ⅱ群土器 前期の土器

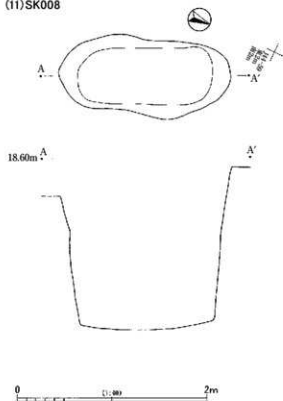
第Ⅲ群土器 中期の土器

第Ⅳ群土器 後期の土器

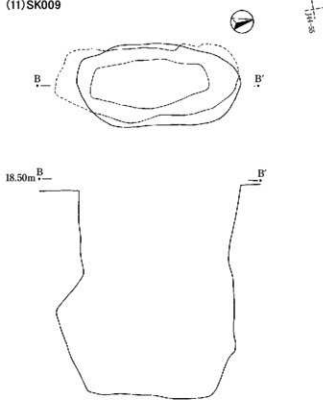
第Ⅰ群土器(第19図、図版39)

早期を本群とする。早期の土器は僅かに1点のみである。茅山上層式と考えられる。胴部上位の屈曲部

(11)SK008



(11)SK009



第18図 (11)SK008・(11)SK009

の破片で、突帯には半載竹管によるキザミが施されている。口縁部は茎束条痕が粗く施され、間隔のあいた斜行沈線が施文されている。胎土に繊維を含む。

第Ⅱ群土器

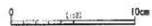
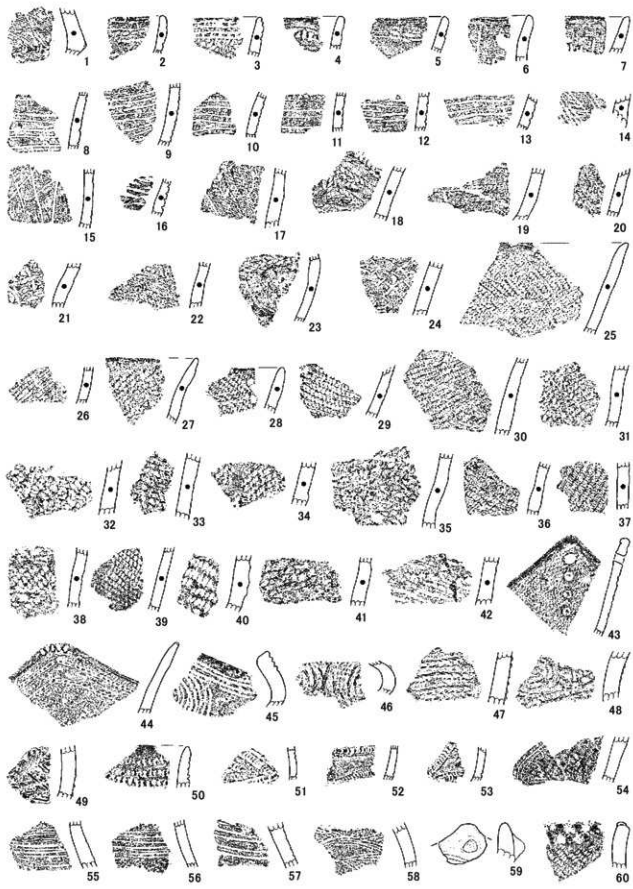
前期を本群とする。黒浜式、諸磯式、浮島式、興津式が出土している。このうち最も多かったのが黒浜式であった。

第1類 (第19図2～42、図版39)

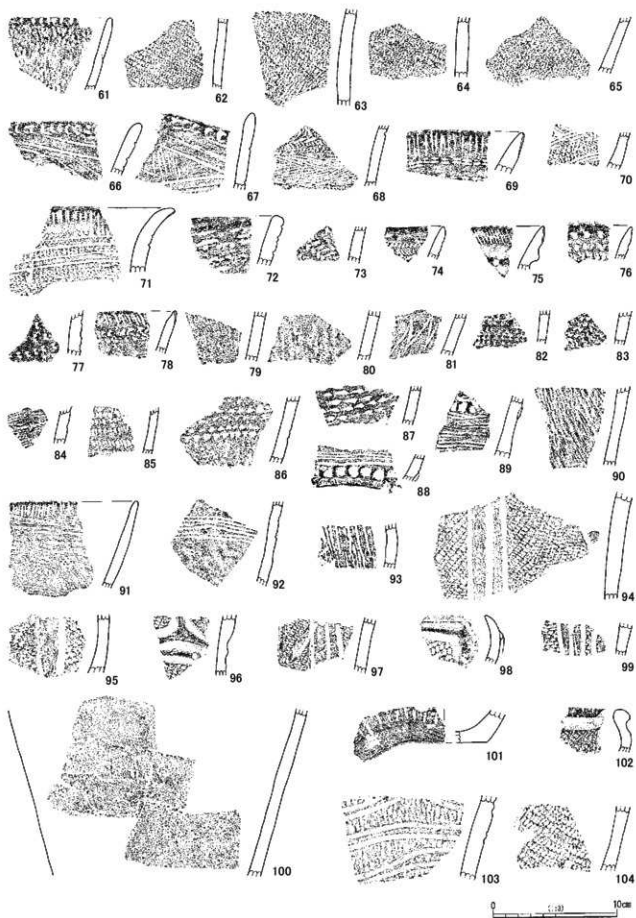
黒浜式を本類とする。全て破片で、器形を復元できるものはなかった。胎土に繊維を多量に含んでいる。2～15は半載竹管ないしは棒状工具による結節沈線文や沈線が施されているもので、縄文を伴うものもある。16は半載竹管による押し状の深い沈線が密に施されている。17～23は燃糸施文である。24は網目状の燃糸文である。25～42は縄文施文のものである。単節縄文や無節縄文が施されるほか、17は多条縄文である。

第2類 (第19図43～60・第20図61～65、図版39)

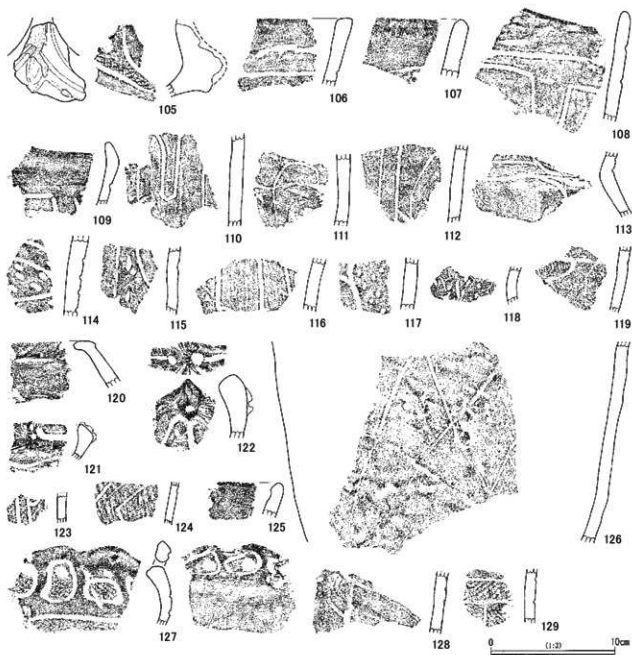
諸磯式を本類とする。焼成がよく、胎土に粗い砂粒が目立つものがある。43・44は縄文地文の大波状口縁深鉢であろう。43は波頂部から竹管による刺突列が垂下する。44は波頂部にキザミが施され、口縁部の凹凸に合わせ2条の結節沈線文が施されている。諸磯a式であろう。45・50～59は半載竹管による並行沈線や結節沈線文が施されるものである。49は強く内湾する口縁部である。47～49は細かいキザミを伴う微隆起線文である。48などは特に焼成が硬く胎土に砂粒が多い。58は細い半載竹管による木葉文か。59



第19図 縄文土器 1



第20図 縄文土器 2



第21図 縄文土器3

は波状縁に突起を伴う。60はRL縄文を地文とし、口唇部には交互に縄文原体を押しつけた蛇行する隆帯が伴っている。45-60は諸磯b式ないしは諸磯c式であろう。61-65は諸磯式に伴う縄文施文のものである。

第3類（第20図66-93・100、図版39・40）

浮島式・興津式を本類とする。量的には微量である。浮島Ⅲ式から興津式にかけての時期に限られ、諸磯式とはやや時期がずれるようである。

66・67は同一個体である。波状縁を呈し口唇部に半截竹管による押し文が施されている。68は変形爪形文の下に矢羽根状の沈線文が施されている。69は口唇部に半截竹管の縦のキザミ、胴部には列点状の半截竹管文が施されている。70・71は別個体である。口縁部が大きく外反し、横位の沈線の間に貝殻腹縁文が

充填されている。72～74・76・78・85～87は変形爪形文である。77は幅を狭く割った貝殻が先がさざくれた半截竹管による刺突文である。79～83は貝殻腹縁による波状文である。75・88・89は凹凸文である。75は口唇部外面に縦のキザミが施され、直下に凹凸文が施されている。90は燃糸地文である。91～93は条線が施されている。100は無文の胴部下半である。粗い砂粒が多く焼成もよいことから、前期後半の時期と考えられる。

第Ⅲ群土器(第20図94～99・101～104、図版40)

中期を本群とする。量的には微量で、図示したものがそのほとんどである。94～99・101・102は磨り消し手法を伴う加曾利E3式の深鉢であろう。いずれもRL単節縄文の地文で太い沈線で文様が施されている。103は燃糸地文で横位波状の沈線文が施されている。連弧文系の土器である。104は太いLR単節縄文が施されている。

第Ⅳ群土器(第21図105～129、図版40)

後期を本群とする。量的には微量で、図示したものがそのほとんどである。時期は称名寺式から堀之内1式の古い段階にかけての時期と思われるものと、加曾利B式が僅かに含まれている。105は波状縁の深鉢であろう。口縁部の突起部分とみられ、しっかりした突起と沈線による区画が施され、LR縄文が充填されている。称名寺I式。106～113は沈線によって文様が施されるものである。106～109は無文帯の口縁部である。114～118は沈線の区画内に列点文が充填されるものである。119は沈線の区画内に櫛歯による刺突が施されている。106～119は称名寺Ⅱ式であろう。

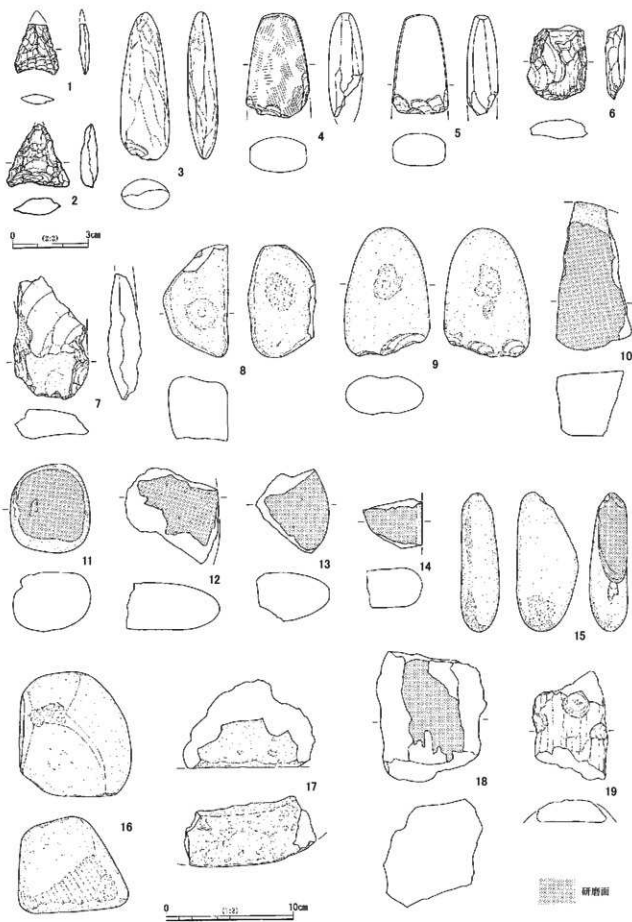
120は深鉢の口縁部であろう。口縁部は受け口状に平らになっている。樽状の器形か。称名寺式と考えられる。121・122は8の字浮文を伴っている。122は一部欠けている。123・124は縄文地文に沈線が施されている。121～124は堀之内1式であろう。125は無文の口縁部である。称名寺式から堀之内1式であろう。126は深鉢の胴部破片である。外面の調整はいたって粗い。斜格子状の沈線が雑に施されている。称名寺式であろう。127は浅鉢である。胴部が影らみ口縁部が外反する。2つの貫通孔に伴う小突起が波状縁を構成している。口縁部には沈線の小区画が並び内部にRL単節縄文が充填されている。胴部は横位の区画線が施され、RL単節縄文が充填されている。口縁内面にも貫通孔の周囲にメガネ状に沈線が施されている。内外面ともに器面の調整がよい。千葉県内では珍しい施文で、浅鉢である点もあまり見ない例である。128は縦位の浅く弱い刺突による列点文が施され、斜方向の楕円状の区画文が繰り返し施されるようである。127・128の時期は称名寺式から堀之内1式であろう。129は幾何学的な帯状の沈線区画文が施され、内部にLR縄文が充填されている。加曾利B1式～B2式の時期であろう。

2 石器(第22・23図、図版40・41)

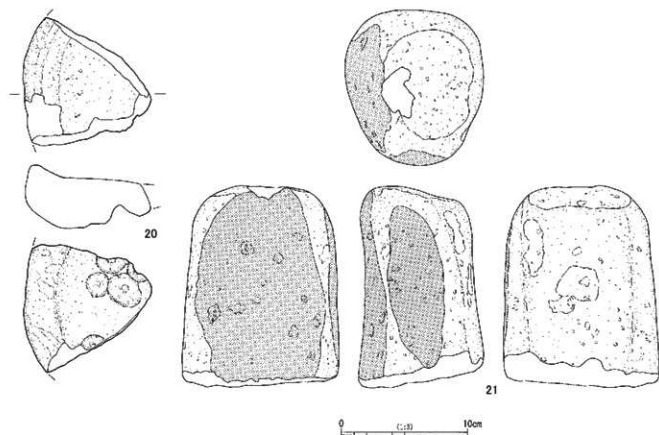
概要でも記したように、縄文時代の遺構が陥穴に限られ、しかも通常、遺物包含層となるⅡ層が無かったことから、各調査区で出土した縄文時代の石器及び土製品は散発的な出土数にとどまっている。

出土した石器の点数は、31点である。器種は石鏃5点、磨製石斧3点、打製石斧3点、凹石2点、磨石4点、敲石2点、石皿8点、石棒2点、両極石核2点である。縄文土器が早期から後期までであることから、石器も同様の時期幅を伴っていると考えられる。

1は石鏃である。凹基式の三角形を呈する。先端が欠損している。両脚外縁端が調整され内側に丸味を帯びている。2は大型の石鏃である。正三角形に近く浅い凹基である。石材としては、珍しいホルンフェルスを使用している。3は前期の乳棒状磨製石斧であろう。刃部は両刃で使用によるとみられる欠損があ



第22図 縄文時代石器 1



第23図 縄文時代石器2

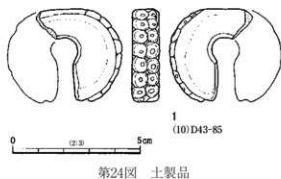
り、研磨し刃部再生している。4・5は定角形の磨製石斧である。共に刃部を欠損しているが、5は刃部がほぼ潰れており、敲石に転用している可能性がある。時期は中期から後期であろう。6・7は打製石斧である。6は撥形、7は分銅形であろう。6は刃部には細かい調整が施され、中央が部分的に研磨されている。7は挟り部分に敲打痕が顕著に残っている。8・9は凹石である。8は2側面中央に凹みと敲打痕を伴う。9は平たい礫の表裏に凹みを伴う。片側に敲打による剥離があり、敲石としても使用されたようである。11~14は磨石である。11は握りやすい大きさの円礫の一面が良く磨れている。12~14はいずれも欠損している。扁平な円礫の両面が磨られている。

15・16は敲石である。15は長細い円礫の一端と側面に敲打痕を伴っている。また、欠損後欠けた面が磨られており、あるいは後世に砥石として使用されたのかもしれない。16はやや大きめの円礫を使用しており、縁辺に敲打痕を伴うほか、一部に線状痕を伴う研磨が行われている。

10・17・18・20は石皿である。10は扁平で、片面に研磨面がある定型的な石皿の可能性がある。17は定型的な石皿で、掻き出し部分の破片であろう。底面には深い凹みが見られる。18は研磨面以外の面は欠損している。中期ないしは後期の石皿であろう。20は周囲に突帯を伴う石皿である。底面には凹みが複数見られる。19は緑泥片岩の石棒の破片と考えられる。3か所に凹みがある。太い径の石棒であったと推測され、時期は中期であろう。21は石棒の先端部と考えられるが、あまり加工された痕跡をとどめていない。側面に凹みが認められる。時期は中期であろう。ただし、2側面に研磨の痕跡があり後世に砥石として転用されたと考えられ、7世紀後半の(10)SI010の竪穴住居跡から出土している。

3 土製品(第24図、図版40)

縄文時代に属すると考えられる土製品は1点のみである。1は球状耳飾である。約3分の1が欠損している。最大長3.60cm、推定幅4.40cm、最大厚1.15cmである。断面は角の張る長方形を呈し、側面には細くした粘土紐を小さな輪にしてタコの吸盤のように2列に貼り付けた装飾が施されている。時期は前期後半と考えられる。



第24図 土製品

第5表 縄文時代石器一覧表

() は現存長

No.	標記番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
1	第22図 1	(13)	SI001	1	石鏃	(19.0)	16.5	3.7	1.08	チャート	
2	第22図 2	(9)	SX009	2	石鏃	24.5	24.8	7.0	3.61	ホルンフェルス	
3	—	(4)	SI002	1	石鏃	14.0	15.0	3.5	0.54	チャート	
4	—	(10)	SI002	4	石鏃	10.9	15.2	4.4	1.01	チャート	
5	—	(9)	SI003	10	石鏃	19.7	14.3	3.5	0.88	チャート	
6	第22図 3	(14)	SI002	1	磨製石斧	116.0	38.5	23.9	153.08	緑泥片岩	
7	第22図 4	(16)	SK018	2	磨製石斧	(81.2)	50.3	28.0	136.40	蛇紋岩	
8	第22図 5	(16)	SE021	2	磨製石斧	(78.2)	44.4	25.4	152.04	緑泥片岩	
9	第22図 6	(13)	H44-89	1	打製石斧	(60.6)	46.1	15.1	55.88	ホルンフェルス	
10	第22図 7	(5)	SD003	25	打製石斧	(93.9)	(60.2)	25.7	145.46	安山岩	
11	—	(2)	9801T	1	打製石斧	(56.5)	(67.8)	13.2	186.24	ホルンフェルス	
12	第22図 8	(16)	SE012	2	凹石	88.3	52.8	51.4	338.51	ハンレイ岩	
13	第22図 9	(16)	T14	2	凹石	102.7	67.8	31.4	309.58	安山岩	
14	第22図 10	(8)	SK102	2	石皿	(112.5)	(59.1)	57.7	460.31	安山岩	
15	第22図 11	(16)	SK003	2	磨石	70.5	62.7	47.4	322.32	石英黒岩	
16	第22図 12	(5)	SD003	11	磨石	(58.9)	(78.1)	38.2	302.88	安山岩	
17	第22図 13	(16)	SE021	2	磨石	(67.6)	(53.1)	36.5	149.62	安山岩	
18	第22図 14	(16)	SK009	1	磨石	(37.5)	(46.5)	(31.1)	86.11	安山岩	
19	第22図 15	(16)	SE021	2	砥石	108.3	48.3	30.0	198.51	砂岩	
20	第22図 16	(13)	SI001	1	砥石	103.6	76.3	88.9	847.56	砂岩	
21	第22図 17	(16)	SK018	2	石皿	(102.0)	(68.4)	49.4	341.73	安山岩	
22	第22図 18	(5)	L44-93	1	石皿	(100.0)	(81.8)	(87.8)	562.75	安山岩	
23	第23図 20	(8)	SK102	2	石皿	(100.3)	(100.1)	48.7	436.11	多孔質安山岩	
24	—	(5)	SD003	35	石皿	(58.3)	(58.0)	33.3	72.22	多孔質安山岩	
25	—	(8)	SK105	1	石皿	(93.1)	(52.7)	(27.4)	186.14	雲母片岩	砥石に転用された可能性あり
26	第22図 19	(16)	SK025	2	石棒	(85.3)	(87.4)	(17.4)	112.30	緑泥片岩	
27	第23図 21	(10)	SI010	10	石棒	(156.0)	119.9	97.9	2881.13	安山岩	後世に砥石に転用
28	—	(16)	SK025	2	石皿	(95.5)	(34.9)	(82.0)	292.21	安山岩	
29	—	(8)	SK102	2	石皿	(107.8)	(44.9)	(98.2)	441.71	多孔質安山岩	
30	—	(5)	SD003	1	両極石核	40.4	35.7	8.6	17.66	頁岩	
31	—	(5)	SI010	5	両極石核	40.4	39.5	16.3	36.16	頁岩	

第4章 古墳時代の遺構と遺物

第1節 概要

5世紀～7世紀の竪穴住居跡が8軒検出されている。このうち5世紀中葉の古墳時代中期の竪穴住居跡はわずかに1軒しかない。残る7軒は古墳時代後期の7世紀後葉と考えられるが、8世紀代に含めた竪穴住居跡の中には、7世紀末～8世紀初頭と考えられるものもあり峻別は難しく、7世紀後葉～8世紀代にかけての集落が継続しているのであろうと推測される。1軒しか検出されなかった中期の竪穴住居跡は、遺跡内の南西端の南緩斜面に位置している。西側の前平井遺跡でも中期の集落群は検出されていない。7世紀後葉の竪穴住居跡群は、散漫な展開を示しており、まとまりがない。8世紀代の竪穴住居跡群と混在しており、各地点で細々と継続していくのではないかと考えられる。竪穴の遺存状態についてはあまり良くない。中・近世の耕作などの影響がその原因と考えられる。竪穴住居跡内のカマドは総じて北西方向に設置されている。遺物の出土量は、中期の竪穴住居跡を除けば少なかった。以下、各竪穴について詳述する。なお、残存するカマドの構築材及び焼土はスクリーントーンで示した。

第2節 遺構

(9) SI006(第25図、図版8・25)

位置・形態 L44-10グリッドを主体に検出された。平面の形態は隅丸の方形を呈し、規模は5.2m×5.0mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-14°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁35cm、西壁29cm、南壁15cm、東壁27cm、遺存状態はよい。

覆土 黒褐色土を主体とし、焼土及び炭化材が全体的に混入していることから、焼失住居の可能性があるが焼土などの混入状況は、量的には少ない。

施設等 ピット5基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、柱穴と考えられる。P2・P3では柱痕が2箇所確認されており、建て替えが行われたと考えられる。床面からの深さはP1が69cm、P2が北側71cm、南側72cm、P3が北側56cm、南側66cm、P4が84cmである。南壁近くのP5は深さ20cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周する。北壁のカマドは、煙道部の突出が大きい。袖部が良好な状態で遺存する。

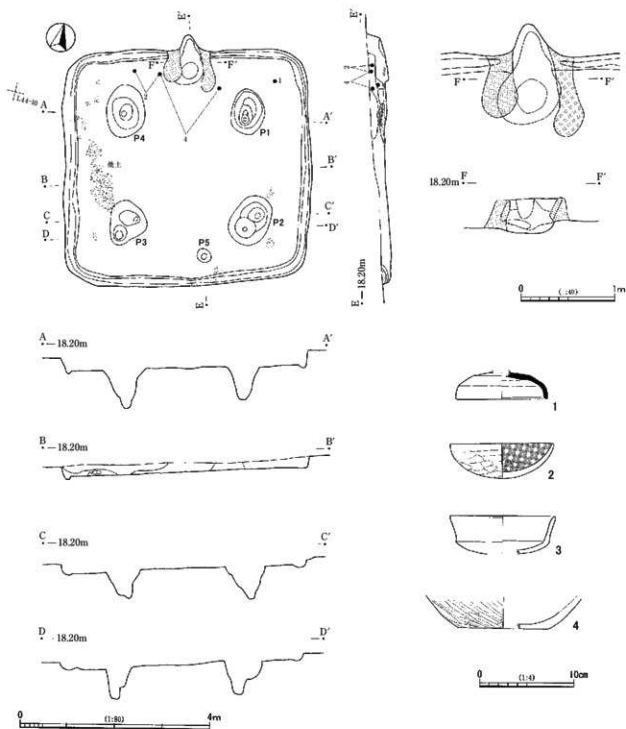
遺物出土状況 出土量はあまり多くない。カマド周辺の覆土中からまとまって出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器蓋1点、土師器坏2点、甕1点である。1は蓋である。宝珠つまみが欠損している。東海系の須恵器と考えられる。2・3は丸底の坏である。2は体部外面は手持ちヘラケズリが施され、内黒である。3は6世紀代の土師器と考えられ、覆土内への混入と考えられる。4は甕の底部である。体部外面にヘラミガキ調整が施される。出土遺物より、本竪穴は7世紀末葉と考えられる。

(10) SI001(第26図、図版9・26)

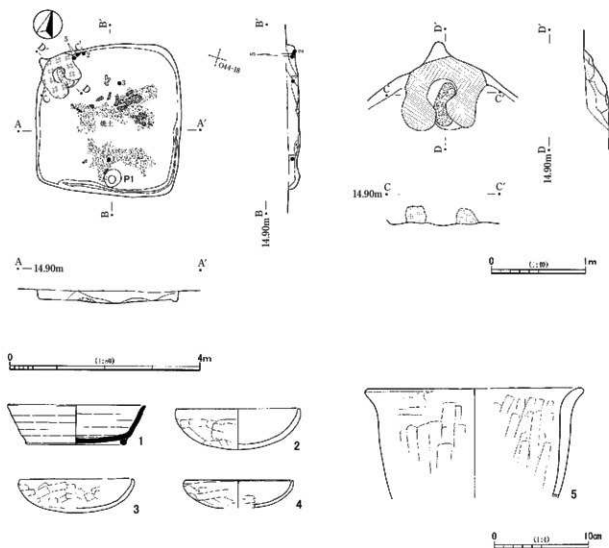
位置・形態 O44-17グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪みのある隅丸の方形を呈し、規模は3.2m×3.1mで小規模である。カマドは北西コーナーの隅カマドである。主軸方位はN-17°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁21cm、西壁21cm、南壁20cm、東壁17cmで、遺存状態は良い方である。

覆土 黒褐色土を主体とし、大きく上下の2層に分かれる。上層では目立った混入物は確認されなかった。



第25図 (9)SI006

中位から床面にかけて焼土が堆積し、中央部には炭化材が集中していた。焼失住居の可能性がある。
施設等 ピット1基と周溝、カマドが検出された。ピットは南壁近くから検出された。床面からの深さが8cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は南壁と東壁の一部で検出された。北西コーナーのカマドは、煙道部が小さく突出する。比較的良好な遺存状態である。天井部は遺存していない。
遺物出土状況 出土量はあまり多くない。中央及びカマド周辺の覆土中からまともに出土している。



第26図 (10)SI001

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏1点、土師器坏3点・甕1点である。1はやや大きめの須恵器高台付坏である。2～4は丸底の土師器坏である。いずれも体部外面に手持ちヘラケズリが施される。5は甕である。体部内外面にヘラケズリ調整が施される。出土遺物より、本堅穴は7世紀末葉と考えられる。

(10)SI005(第27図、図版9・26)

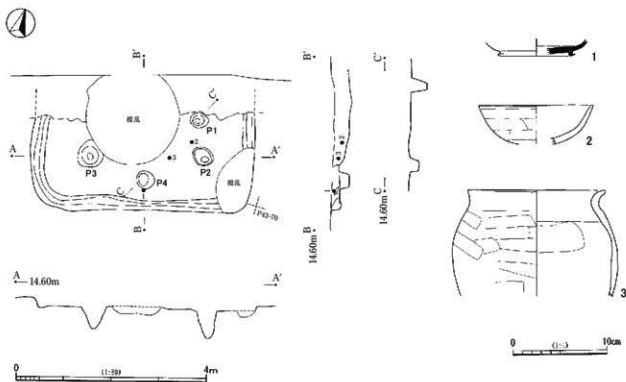
位置・形態 O43-79グリッドを主体に検出された。北側の大半は道路及びその工事で失われ、調査できた範囲も植栽の植え込みによって攪乱されている。平面の形態は隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は遺存している東西方向で4.7mを測る。カマドは北壁に設置されていたと考えられる。主軸方位はN-17°-Wである。検出面から床面までの深さは、西壁23cm、南壁22cm、東壁15cmである。

覆土 暗褐色土を主体とする。

施設等 ピット4基と周溝が検出された。中央東寄りのP1は床面からの深さが37cmあるが、位置的には主柱穴ではなかろう。P2は深さ57cm、P3は41cmあり柱穴と考えられる。P4は深さ18cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周すると考えられる。

遺物出土状況 出土量は少ない。多くが攪乱された中から出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器高台付坏1点、土師器坏1点・甕1点である。1は須恵器高台付坏である。猿投産と考えられる。2は土師器坏である。体部外面に手持ちヘラケズリが施される。3は土師器甕である。体部外面にヘラケズリが施される。出土遺物から、1は8世紀に入る可能性があるが、土師器から本堅穴の時期を7世紀第4四半期としておく。



第27図 (10)SI005

(10) SI010 (第28図、図版10・27)

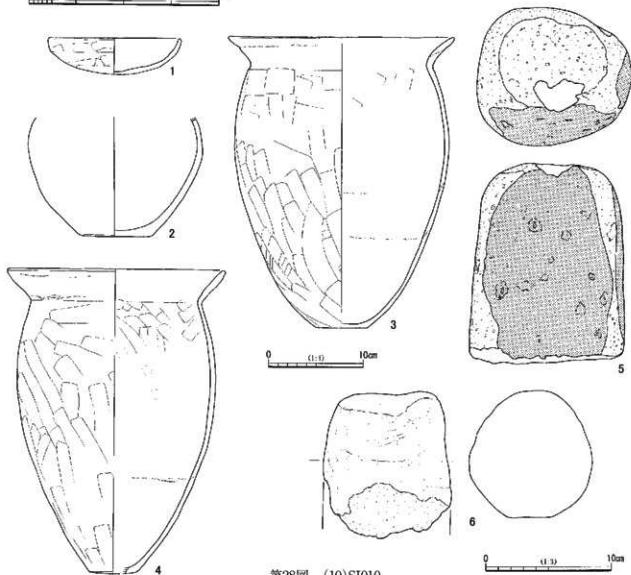
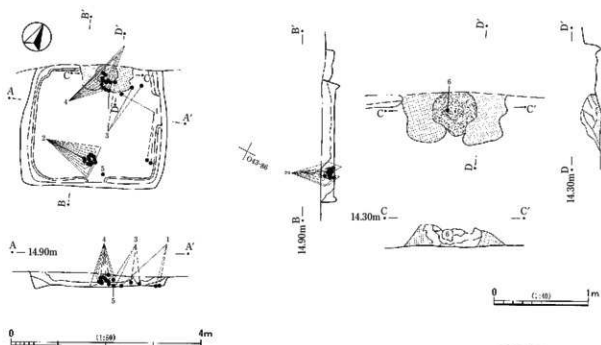
位置・形態 O43-85グリッドを主体に検出された。本堅穴の北側が攪乱を受けている。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は3.1m×2.8mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-27°-Wである。検出面から床面までの深さは北壁20cm、西壁35cm、南壁33cm、東壁19cmである。

覆土 暗褐色土を主体としている。

施設等 周溝とカマドが検出されたが、柱穴等のピットは検出されなかった。周溝は南壁と東壁の中央でそれぞれ途切れる。北壁のカマドの一部は攪乱されているものの遺存状態はよい。火床面はよく焼けており、焼土が顕著に堆積していた。

遺物出土状況 カマド周辺と南壁付近の2か所に集中して遺物が出土している。出土遺物の多くは床面直上から出土している。カマド内からは支脚が出土した。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器坏1点・甕3点、支脚1点、砥石1点である。1は土師器坏である。体部外面には手持ちヘラケズリが施される。2-4は土師器甕である。3・4は体部外面にヘラケズリが



第28图 (10)SI010

施される。4は内面がナデ調整である。5は砥石である。縄文時代中期の大型石棒の頭部を転用したものと考えられる。2側面が研磨面となっている。この砥石については、縄文時代石棒として第24図にも転載している。6はカマド内から出土した大型の支脚である。なお、本堅穴の覆土内から26点合計4.30kgのスラグが出土している。この中には椀形滓も含まれており、本堅穴が鍛冶関連の工場の可能性もある。出土遺物から、本堅穴は7世紀第4四半期と考えられる。

(10) SI019 (第29図、図版12・28)

位置・形態 N44-94グリッドを主体に検出された。本堅穴は西側と南側の攪乱が顕著で、壁の立ち上がりを確認できなかった。平面の形態は、部分的に検出された周溝から、やや歪みのある方形を呈すると考えられる。規模は4.5m×4.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-9°-Wである。検出面から床面までの深さは北壁63cm、東壁44cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、壁際で僅かに焼土が混入する。

施設等 ピット4基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列されており、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が26cm、P2が22cm、P3が69cm、P4が72cmである。周溝は北壁と東壁の全面に巡るが、西壁と南壁では部分的に失われている。北壁のカマドは煙道部の突出が小さい。袖部の遺存は良好である。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況 出土量はあまり多くない。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器杯1点、土師器壺1点・甕1点である。1は小型の須恵器杯である。緻密な胎土で、混入物がほとんどない。底部には回転ヘラケズリが施される。湖西産と考えられる。2は壺である。内外面が著しく摩耗し、時期的には古墳時代中期の可能性もあり、混入の可能性が高い。出土遺物から、本堅穴の時期は、7世紀第4四半期と考えられる。

(11) SI001 (第30図、図版12・29)

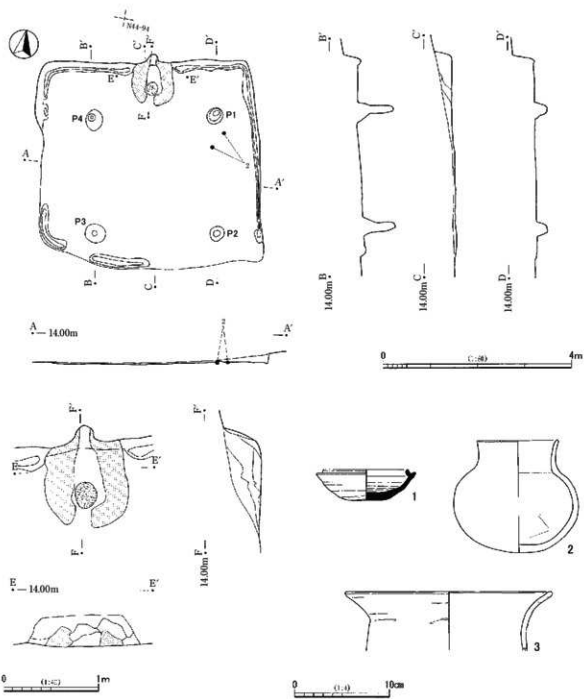
位置・形態 J44-40グリッドを主体に検出された大型の堅穴である。遺存状態が非常に悪い。南側約半分は、床面も失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は他の堅穴と比較して大きく、遺存する東西方向で6.4mを測る。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN-49°-Wである。検出面から床面までの深さは非常に浅く、北西壁5cm、南西壁5cm、北東壁5cmである。

覆土 覆土はほとんど検出できていない。

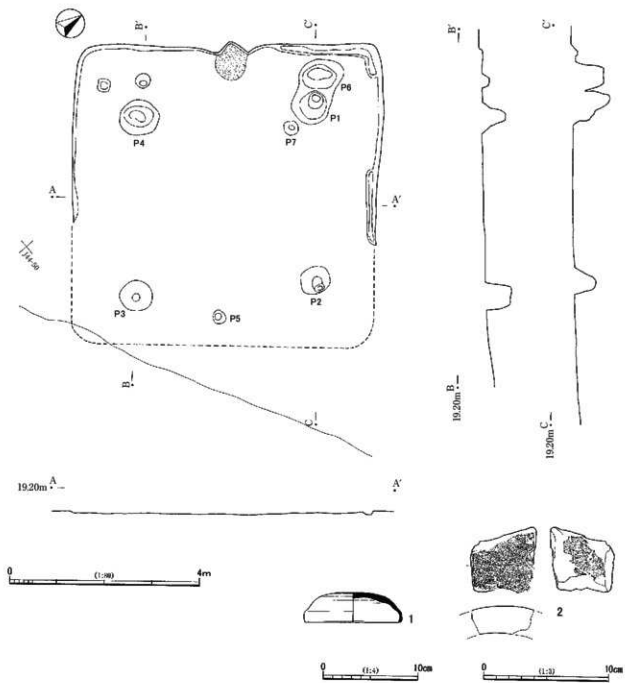
施設等 ピット6基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列され、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が77cm、P2が51cm、P3が55cm、P4が51cmである。南東壁近くのP5は深さ7cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。北コーナー近くのP6はP1と連結しているようにも見えるが、深さが61cmあり、貯蔵穴と考えられる。検出面の形態は不整楕円形を呈し、底面は平らである。P7は極端に浅いことから、柱穴ではなかろう。周溝は北西壁と北東壁で部分的に検出された。北西壁のカマドは火床面が僅かに検出された程度で、袖部の構築材などはほとんど失われていた。

遺物出土状況 出土量はほとんどない。P4の内部から須恵器の坏蓋が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏蓋1点、丸瓦1点である。1は小型の坏蓋である。上部は回転ヘラケズリが施される。胎土は緻密で混入物が少ないことから湖西産と考えられる。2は丸瓦の破片で、布目が見られない。この他にスラグの小片が合計132g出土している。出土遺物から、本堅穴は7世紀第4四半期と考えられる。



第29图 (10)SI019



第30圖 (11)SI001

(11) SI013 (第31図、図版13・14・29)

位置・形態 K41-55グリッドを主体に検出された。西側の壁などが攪乱されている。平面の形態は方形を呈する。規模は他の堅穴と比較して大きく、6.1m×5.3mである。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN-53°-Wである。検出面から床面までの深さは、北西壁43cm、南東壁15cm、北東壁37cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、粘性が強く、良く締まっている。焼土粒が多く混入していた。

施設等 ビット4基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列し、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が46cm、P2が51cm、P3が51cm、P4が65cmである。P1は3つのビットからなり、西側のビットは深さ30cm、北側のビットは深さ51cmを測る。他の主柱穴では複数のビットが確認されていないが、堅穴が建て替えられた可能性を示唆している。周溝はほぼ全周していたと考えられる。西壁のカマドは大部分が崩落しており、遺存状態はあまり良くないが、袖部の内側が顕著に被熱していた。

遺物出土状況 出土量は微量である。P4の内部から土師器の甕が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕1点である。頸部が比較的に長い。体部外面はヘラケズリ調整が施される。内面は摩耗が著しい。この他にスラグ小片合計79gが出土している。出土遺物から本堅穴は7世紀第3~第4四半期であろう。

(13) SI001 (第32・33図、図版14・29・30)

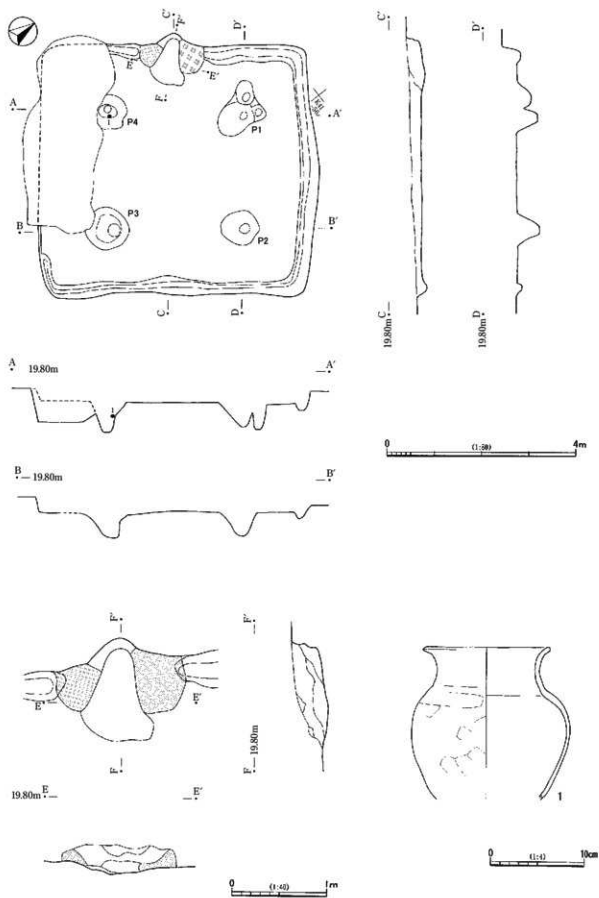
位置・形態 H45-29グリッドを主体に検出された。南面する緩斜面に位置する堅穴である。南東コーナーでは壁の立ち上がりが見出されなかった。平面の形態は南北方向にやや長い長方形を呈し、5.0m×4.3mである。堅穴の中央からやや北西側に寄った位置で炬が検出された。主軸方位はN-48°-Eである。検出面から床面までの深さは、北東壁36cm、北西壁25cm、南西壁43cm、南東壁38cmである。

覆土 黒色土を主体とし、混入物はほとんど無い。床面近くでは焼土やロームが僅かに混入していた。

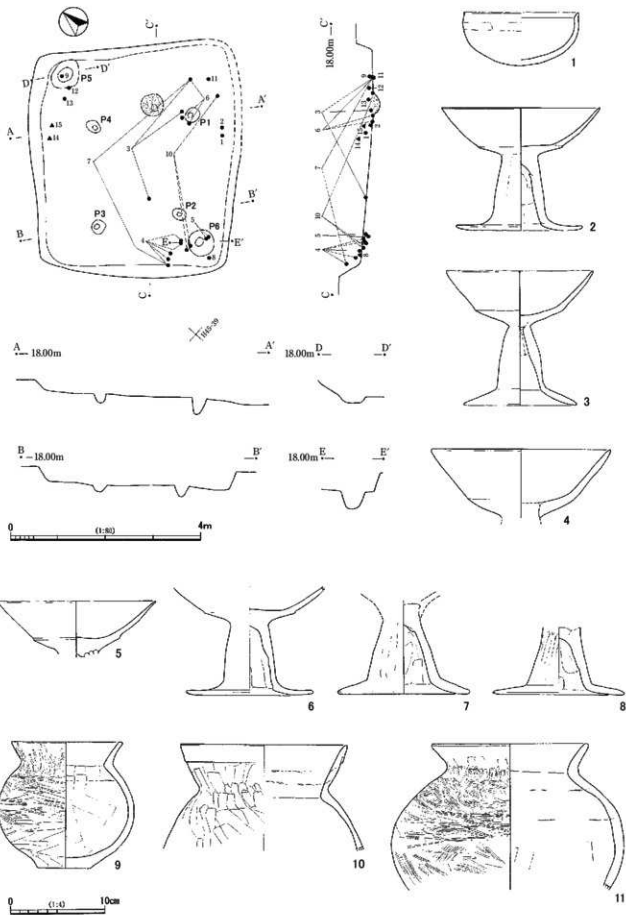
施設等 ビット6基と炬跡が検出された。P1~P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が32cm、P2が22cm、P3が15cm、P4が18cmで、いずれも小さく浅めである。南北のコーナーで検出された2つのビットは貯蔵穴と考えられる。深さは北貯蔵穴が20cm、南貯蔵穴が34cmを測る。炬跡は小さく、焼土が充填していた。

遺物出土状況 出土量は多かった。西コーナーを除いて各コーナーで遺物がまとまって出土している。出土遺物のほとんどは床面からの出土である。高坏が多いのはこの時期の特徴といえる。

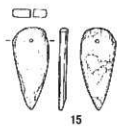
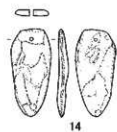
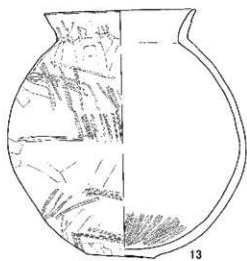
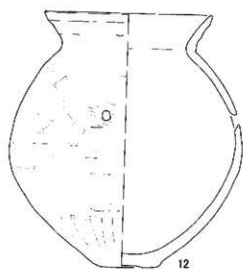
出土遺物 図示できた遺物は、土師器坏1点・高坏7点・甕5点、剣形石製模造品2点である。1は土師器坏である。体部内外面の摩耗が著しい。2~8は高坏である。総じて丁寧なヘラケズリ調整が施される。7・8はヘラケズリ調整が残る。9~13は土師器甕で、9の小型の甕は体部外面にヘラケズリ調整後、ヘラミガキが施される。10は口縁部が折り返される。体部外面はヘラケズリ調整が施される。11は厚手の作りである。口縁部のヨコナデ、体部外面はハケ目調整を施した後ヘラケズリが僅かに施される。12は胎土に砂粒を多く含む。体部外面はナデ調整が施される。胴部中段に1か所、内面からの敲打による穿孔がある。13は口唇部にヨコナデが施され、体部外面にヘラケズリ後、ヘラミガキが施される。ヘラミガキは若干粗くヘラケズリ調整痕が残る。14・15は剣形石製模造品である。本遺跡から北側2kmの地点にある市野谷入台遺跡では集落の18軒から石製模造品が出土しており、このうちの4軒が工房跡とされている。本堅穴は5世紀中頃と考えられ、市野谷入台遺跡のⅢ期に相当する時期である。完成品しか出土していないことから、本堅穴が工房跡である可能性は低いだろう。



第31图 (11)SI013



第32图 (13)SI001(1)



第33图 (13)SI001(2)

第5章 奈良・平安時代の遺構と遺物

第1節 概要

8世紀から9世紀にかけての竪穴住居跡が43軒検出されている。遺物を伴い時期が決定できた竪穴住居跡は30軒、遺物が伴出しなかったため、時期を特定できない竪穴住居跡が10軒となっている。この10軒については、規模や施設、カマドの設置位置などから8世紀から9世紀代の竪穴住居跡と考えられる。

本時期の軒数は台地の大きさからすれば、少なくともばらな分布を示している。7世紀後葉の古墳時代後半から集落が継続的に営まれたと考えられる。地形的な集落の展開状況は、東西に長い台地の中央が最も標高の高い20m前後を示しており、その平らな部分に展開するグループと南緩斜面に展開するグループからなっている。わずかに数軒重複する竪穴住居跡もあるが、概ね、まばらな集落展開を示している。ただし、本来一遺跡と見なしてもよい西側に隣接する前平井遺跡でも同時期の集落が展開しており、さらに広い範囲で集落の展開状況を捉える必要があるだろう。

検出された竪穴住居跡は、総じて遺存状態はよくない。中世以降の開墾等の影響によるものと考えられる。竪穴の規模は、一辺が6mを越える大型の竪穴住居跡はほとんどなく、一辺4m前後の小規模な竪穴住居跡が主体となっている。カマドは、概ね北側の壁に設置されている。時期的な変遷を詳しくみると、8世紀前半期の竪穴住居跡が14軒、8世紀後半期が最も多い15軒で、9世紀代は4軒と少なくなる。8世紀後半がピークとなり、9世紀に入ると集落は急速に規模を小さくしていくようである。以下、各竪穴住居跡について詳述する。

第2節 遺構

(4)SI001(第34図、図版6・22)

位置・形態 L42-13グリッドを主体に検出された。西側の大部分は床面に達する攪乱を受けている。平面の形態は方形を呈し、規模は大きく6.1m×5.9mである。カマドは北壁やや東寄りにあり、主軸方位はN-22°-Wである。検出面から床面までの深さは北壁32cm、西壁22cm、南壁27cm、東壁45cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、2層に分かれる。下層にはロームブロックが混入する。

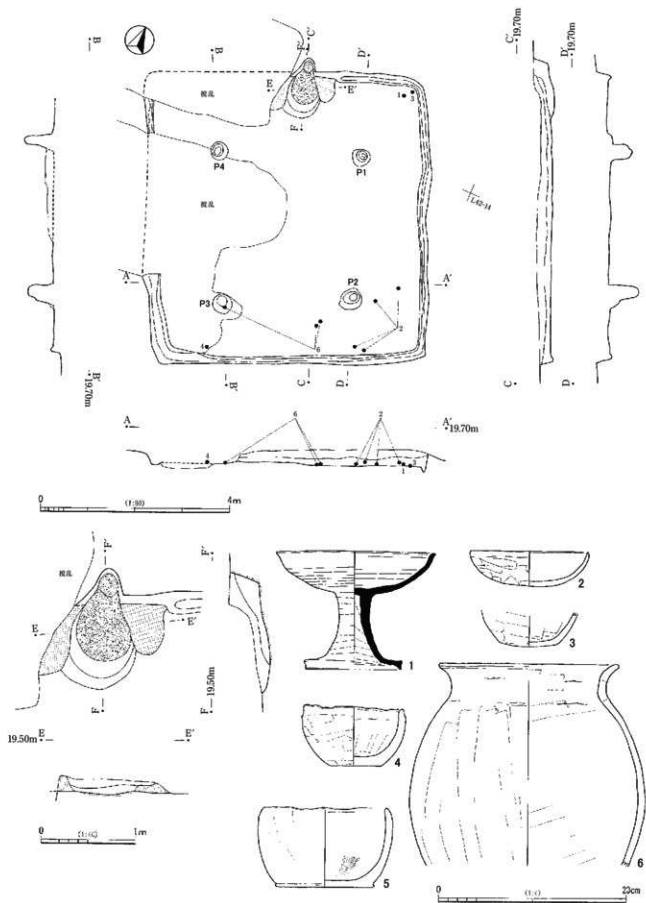
施設等 ピット4基と周溝、カマドが検出された。P1-P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が49cm、P2が22cm、P3が34cm、P4が50cmである。周溝は全周する。カマド内部の覆土には山砂が混入しており、天井部が崩落したと考えられる。また、西側の袖は攪乱を受けている。

遺物出土状況 出土量は少ない。南壁の近くでまとまっており、ほとんどが床面直上から出土している。

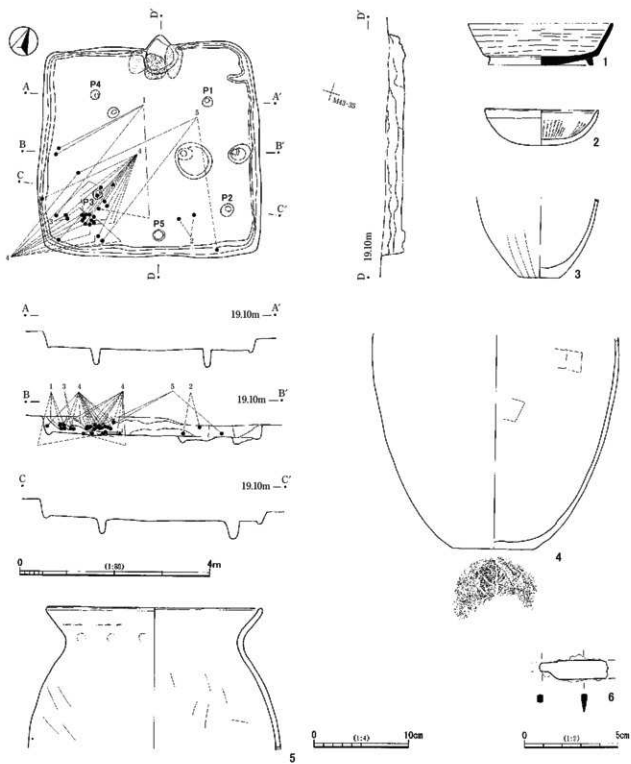
出土遺物 図示できた遺物は、須恵器高坏1点、土師器坏4点・甕1点である。1は湖西産須恵器の高坏である。2・3は土師器坏である。2点とも外面にヘラケズリが施される。4・5は深めの土師器坏である。4は器厚が厚く、外面に横方向のヘラケズリが施される。5は底部の径が大きく、特異な器形である。木葉痕が残っている。6は甕である。胴部外面に縦方向のヘラナデが施される。出土遺物から本竪穴は7世紀末～8世紀第1四半期と考えられる。

(4)SI002(第35図、図版6・22・31)

位置・形態 M43-34グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は4.7m×4.4mである。



第34图 (4)SI001



第35图 (4)SI002

カマドは北壁にあり、主軸方位はN-18°-Wである。検出面から床面までの深さはやや深めで、北壁23cm、西壁33cm、南壁49cm、東壁31cmである。

覆土 大きく3層に分層された。上層は暗褐色土を主体とし、ローム粒と焼土粒が混入する。壁際の三角堆積土は黒褐色土を主体とする。下層は黄褐色土が主体となりロームブロックが多く混入する。

施設等 ビット5基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が35cm、P2が34cm、P3が30cm、P4が34cmである。南壁付近のP5は深さが6cmで、入口の梯子ビットと考えられる。周溝は全周し、東壁の北側には間仕切り溝が確認されている。北壁のカマドは袖部の遺存があまりよくない。カマド内にもロームブロックが多く堆積していたことから、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

遺物出土状況 出土量はあまり多くない。南西コーナーを主体に遺物が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器高台付坏1点、土師器坏1点・甕3点、鉄製刀子1点である。1は須恵器高台付坏である。2は土師器坏である。内面に暗文状の間隔の開いたヘラミガキが施されている。3・4・5は甕である。3は小型の甕で、外面には縦方向のヘラケズリが施される。4は胴部~底部にかけて遺存しており、底部には木葉痕が残る。5の外面はヘラナデが施され、頸部にヘラの痕跡が残る。6は刀子である。基部と刃部の半分を欠損している。

出土遺物から、本堅穴は8世紀第1四半期と考えられる。

(5) S1005(第36・37図、図版6・22・23・31)

位置・形態 L43-79グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや東西に大きい長方形を呈し、規模は3.7m×3.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-4°-Wである。堅穴の遺存はよく、検出面から床面までの深さは、北壁40cm、西壁45cm、南壁36cm、東壁37cmである。

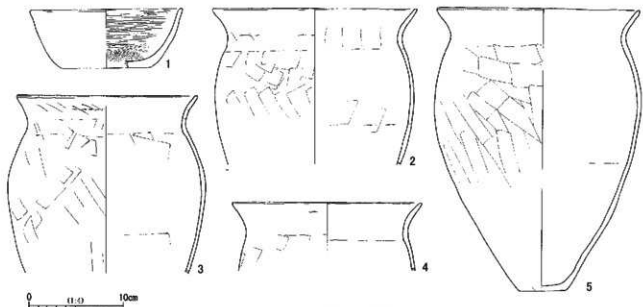
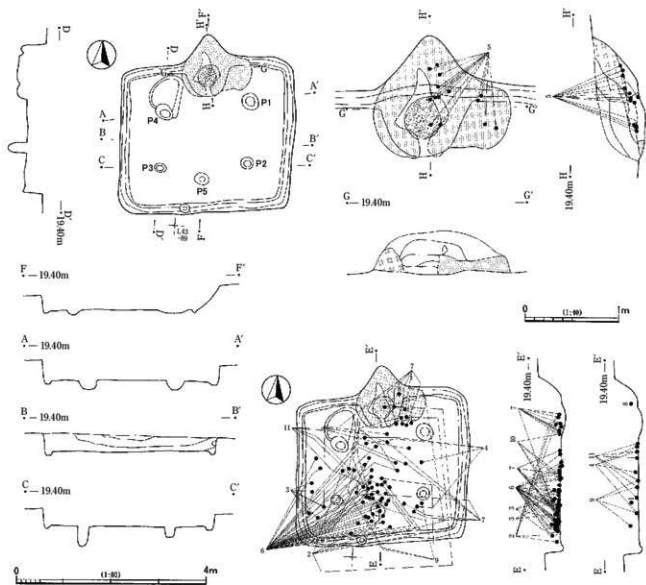
覆土 暗黒褐色土を主体とする。大きく3層に分かれ、上層はレンズ状に堆積する。覆土全体に焼土粒が混入する。上層ではカマドの構築材と考えられる山砂がブロック状に混入していた。

施設等 ビット5基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が18cm、P2が22cm、P3が40cm、P4が26cmである。南壁近くのP5は深さ10cmの梯子ビットと考えられる。周溝は全周する。北壁のカマドは遺存状態が良好で、煙道まで構築材が残っていた。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

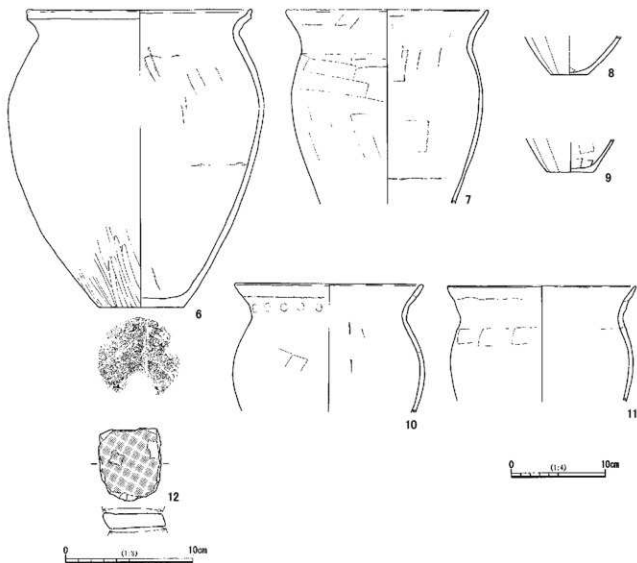
遺物出土状況 出土量は多く、中央やや南寄りの床面直上からまともに出土した。カマドからは甕が1点出土している。甕の出土量が多いという特徴がある。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器坏1点・甕8点・甕2点、砥石1点である。1は内面にヘラミガキが施される内黒処理された大型坏である。2~11は甕である。多くは在地産の甕であるが、他地域の資料が2点出土している。5は武蔵産の甕と考えられる。外面はヘラナデが施される。6は常陸産の甕と考えられる。胎土に金雲母及び砂粒を多く含み、胴下半部~底部にかけてヘラミガキが施される。また、底部には木葉痕が残る。10は頸部に指による押さえの痕跡が残る。また、その頸部には輪積み痕を若干残している。12の砥石は、粗めの砂岩製で、表裏を使用している。縁辺を打ち欠いて整形している。この他に図示しなかったが、覆土内からスラグ1.05kgが出土している。堅穴の攪乱が顕著であることから、中世以降のスラグの可能性もある。

出土遺物から、本堅穴は9世紀第1四半期と考えられる。



第36图 (5)SI005(1)



第37図 (5)SI005(2)

(5)SI006(第38図、図版6・23)

位置・形態 L44-28グリッドを主体に検出された。南側の大部分が溝状遺構によって攪乱されており、全体に遺存状況はよくない。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で3.3mを測る。カマドは南東コーナーの近くにある。主軸方位はN-80°-Eである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁17cmである。

覆土 黒色土を主体とし2層に分かれる。全体的に硬くしまり、下層にはハードローム塊が混入する。

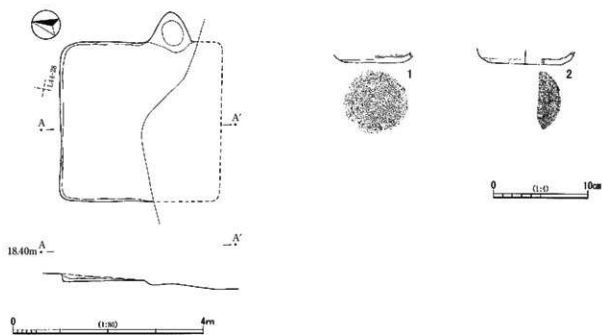
施設等 東壁にカマドが確認できたが遺存状態が極めて悪い。火床部と考えられる面が僅かに凹む。

遺物出土状況 出土量は少ない。攪乱の影響もあり、北側に限られている。

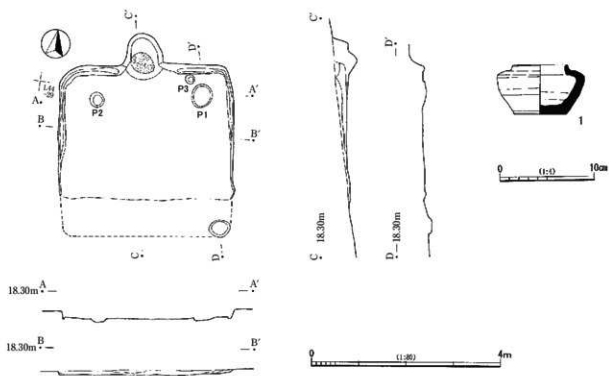
出土遺物 図示できた遺物は、土師器片2点である。1は内面にヘラミガキが施される。2は底部付近にヘラケズリが施される。2点とも底部は、回転糸切りである。出土遺物から本堅穴9世紀第3～第4四半期と考えられる。

(5)SI007(第39図、図版6・23)

位置・形態 L44-29グリッドを主体に検出された。南側約4分の1は攪乱を受け、失われている。平面



第38图 (5)SI006



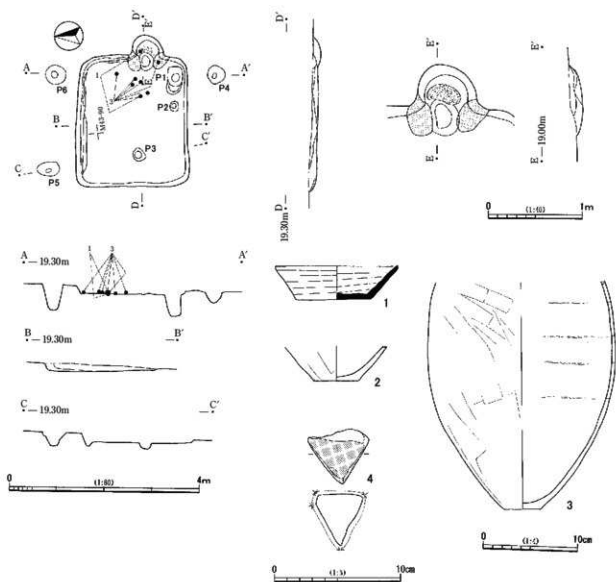
第39图 (5)SI007

の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で3.7mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-18°-Wである。検出面から床面までの深さは北壁28cm、西壁16cm、東壁16cmである。
覆土 大きく2層に分かれ、上層は黒色土、下層は暗黒褐色土からなっている。ローム粒が少量混入する。また、カマド近くでは焼土粒が少量混入する。

施設等 ビット3基と周溝、カマドが検出された。P1・P2は浅すぎるため、柱穴の可能性は低い。床面からの深さは、P1が6cm、P2が6cmである。北壁付近のP3は性格が不明である。周溝はカマドを除く北壁と東西の壁に巡り、本来全周していたものと考えられる。北壁のカマドは煙道部が大きく突出する。袖部のカマド構築材はほとんど失われている。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況 出土量は微量である。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器短頸壺1点である。常陸産と考えられる。外面胴部下半は回転ヘラケズリが施される。出土遺物から、本竪穴は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期と考えられる。



第40図 (5)SI008

(5) SIO08(第40図、図版7・23・31)

位置・形態 M43-90グリッドを主体に検出された。平面の形態は長方形を呈し、規模は小さく28m×24mである。カマドは東壁やや南寄りにあり、主軸方位はN-95°-Eである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁20cm、西壁16cm、南壁3cm、東壁13cmである。

覆土 黒色土を主体とし、壁際ではローム粒が混入する。

施設等 ビット6基と周溝、カマドが検出された。堅穴の外縁にもビットが検出されており、関連施設の可能性がある。堅穴内のビットは、規則性がなく、浅いものについては柱穴の可能性は低いと考えられる。P1は床面からの深さが46cmあることから、貯蔵穴と推測される。P2は深さ23cm、P3は深さ12cmである。P3は入口の梯子ビットの可能性もある。周溝は北壁の西端から東壁のカマドまでの一部である。カマドの煙道部の突出は大きく、袖部はほとんど残存していない。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況 出土量は少なかった。カマド周辺部の床面直上にまとまって出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器杯1点、土師器甕2点、砥石1点である。1は新治産の須恵器杯と考えられる。底部はヘラ切り後にヘラケズリが施される。3は武蔵産の土師器甕である。体部外面にヘラケズリが施される。4は多面が使用された砥石である。出土遺物から、本堅穴は8世紀第3四半期と考えられる。

(5) SIO09(第41図、図版7・23)

位置・形態 M44-15グリッドを主体に検出された。南側の壁は失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で、4.4mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-4°-Eである。検出面から床面までの深さは、北壁30cm、西壁18cm、東壁19cmである。

覆土 黒褐色土を主体とし焼土粒が僅かに混入する。

施設等 ビット4基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配置されており、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が48cm、P2が37cm、P3が52cm、P4が34cmである。周溝は全周していたと推測される。北壁のカマドの遺存は悪く、袖部の構築材はほとんど残存していない。

遺物出土状況 出土量は少ない。カマド付近に限られている。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器杯1点・甕1点である。1は土師器杯である。体部外面にヘラケズリ調整が施される。2は土師器甕である。体部表面にはヘラケズリ調整が施される。頸部には輪積痕が僅かに見られる。出土遺物から、本堅穴は8世紀第1~第2四半期と考えられる。

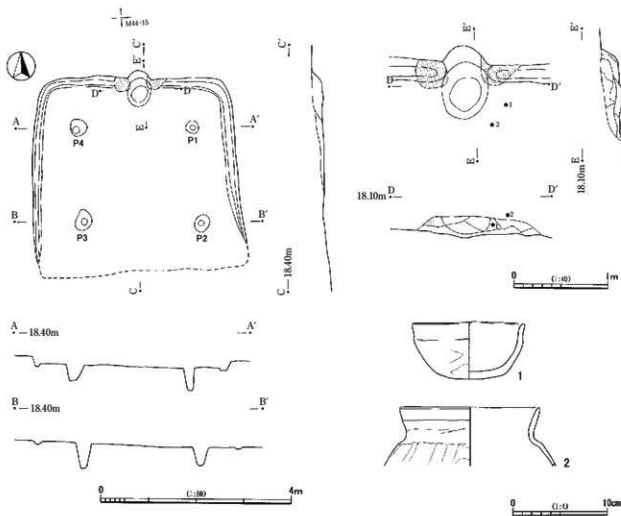
(5) SIO10(第42図・図版7・23)

位置・形態 L43-88グリッドを主体に検出された。北側の約半分が中・近世の溝状遺構によって攪乱されている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で3.1mを測る。カマドは北壁の東寄りにあり、主軸方位はN-19°-Wである。検出面から床面までの深さは、南壁21cmである。

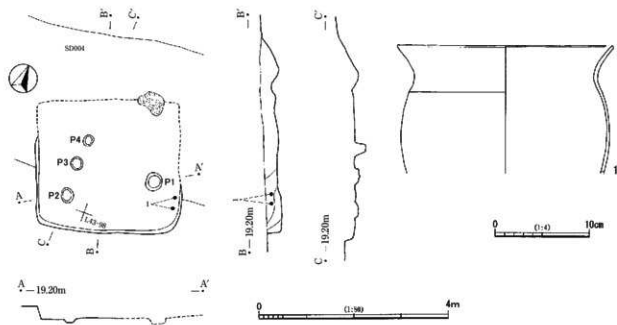
覆土 暗褐色土を主体とし、ロームの混入量が多い。焼土が少量混入する。

施設等 ビット4基と周溝、カマドが検出された。いずれのビットも浅く、床面からの深さはP1が9cm、P2が6cm、P3が8cm、P4が23cmで、柱穴の可能性は低い。カマドは北壁ないしは北東コーナーに位置していたものと推測される。火床部がかりうじて確認できた。

遺物出土状況 出土量は攪乱の影響もあり、微量である。



第41图 (5)SI009



第42图 (5)SI010

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕1点である。武蔵産と考えられる。器面の摩滅が顕著であるが、体部表面にはヘラケズリが施され、上部は横方向、下部は縦方向に施されている。出土遺物から、本堅穴は8世紀第3～第4四半期と考えられる。

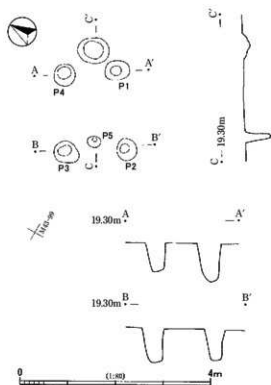
(5)SI011(第43図)

位置・形態 M43-89グリッドを主体に検出された。堅穴の掘り込みは失われており、柱穴などが確認されたにとどまる。一辺3m以内の小規模な堅穴と考えられる。カマドは北東部と考えられる。主軸方位はN-60°-Eである。

覆土 削平されており、覆土は失われている。

施設等 ビット5基とカマドの痕跡が検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。検出面からの深さはP1が75cm、P2が66cm、P3が50cm、P4が42cmである。P5は深さ53cmある。入口の梯子ビットの可能性がある。カマドの痕跡とみられるビットからは焼土は検出されていない。

出土遺物がないことから時期は不明だが、柱穴がしっかり配置されているほか、隣接する堅穴住居群のあり方から8世紀代の堅穴の可能性が高いと考えられる。



第43図 (5)SI011

(5)SI012(第44図、図版7・23)

位置・形態 L43-36グリッドを主体に検出された。

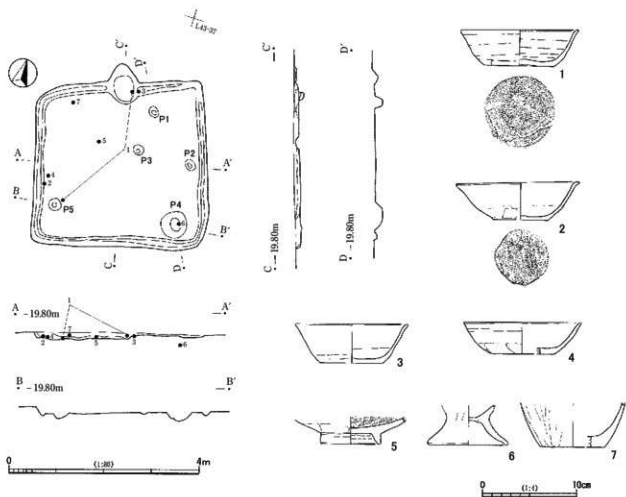
平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は3.7m×3.6mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-16°-Wである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁9cm、西壁16cm、南壁8cm、東壁8cmである。

覆土 黒褐色土を主体とし、大きく上下2層に分かれる。上層は焼土粒が僅かに混入する。壁際ではロームブロックが少量混入する。

施設等 ビット5基と周溝、カマドが検出された。ビットはいずれも定型的な柱穴の配置とは異なることや浅いことなどから、柱穴と考えるのは難しい。床面からの深さはP1が18cm、P2が6cm、P3が11cm、P4が18cm、P5が12cmである。P4はいわゆる貯蔵穴かもしれない。周溝はほぼ全周する。北壁のカマドは遺存状態が悪く、カマドの構築材はほとんど残存していない。火床面は若干の焼土が堆積していた。

遺物出土状況 出土量はあまり多くない。床面から出土しているものが主である。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器杯4点・高台付皿1点・台付甕1点・甕1点である。1～4は土師器杯である。1は口ロク成形の杯である。底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリを施している。2の底部は回転糸切り後、周縁に手持ちヘラケズリを施す。3は回転糸切り後、全面に手持ちヘラケズリを施す。5は土師器高台付皿である。内黒でヘラミガキが施される。6は小型の土師器台付甕か。1・3のような8世紀後半～9世紀初頭の遺物も含まれるが、2・4・5などは9世紀第3四半期の遺物であることから、本堅穴の時期は、9世紀後半と考えられる。



第44図 (5)SI012

(9)SI001(第45図、図版7・23・31)

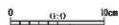
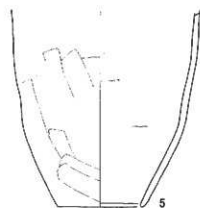
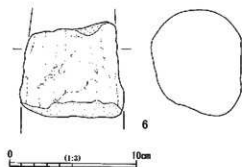
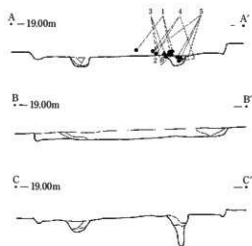
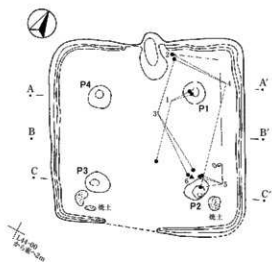
位置・形態 L43-90グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は4.2m×4.1mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-27°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁21cm、西壁14cm、東壁16cmである。南壁はほぼ失われている。

覆土 暗褐色土を主体とし少量の焼土が混入する。

施設等 ピット4基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は主柱穴と考えられ、床面からの深さはP1が26cm、P2が62cm、P3が25cm、P4が25cmである。周溝は全周していたと考えられる。カマドの構築材はほとんど残存していない。

遺物出土状況 出土量は多くない。P2付近の床面近くに集中して出土している。甎や支脚もこの集中地点に含まれている。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕4点・甎1点、支脚1点である。1~4は土師器甕である。1は体部外面にヘラケズリ調整が施される。2~4は胎土に雲母や砂粒を多く含んでおり、常陸産の甕と考えられる。4は胴下半部にヘラミガキ調整が施される。5の甎は胴部径がやや小さく、長胴な感じである。6の支脚は先端と基部に欠損している。出土遺物から、本竪穴は8世紀第3~第4四半期と考えられる。



第45图 (9)SI001

(9) S1002(第46・47図、図版7・24・31)

位置・形態 L43-82グリッドを主体に検出された大型の堅穴である。東西に走る中・近世の溝によって攪乱を受けている。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は7.4m×7.2mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-7°-Eである。検出面から床面までの深さは他の堅穴と比べて深く、北壁52cm、西壁46cm、南壁22cm、東壁33cmである。

覆土 色調によって大きく上下に分かれる。下層は黒褐色土を主体とし、混入物がほとんどない。上層は明褐色土を主体とし、少量の焼土が混入する。

施設等 ビット6基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列され主柱穴と考えられ、総じて深かった。床面からの深さはP1が75cm、P2が91cm、P3が78cm、P4が101cmである。南壁近くのP5は深さ54cmあり、入口の梯子ビットと考えられる。北東コーナーのP6は深さ22cmある。小規模だが貯蔵穴と考えられる。周溝は攪乱を受けているが全周していると考えられる。カマドは遺存状態がよく、ほぼ全形を残している。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況 出土量は多かった。カマドの東側に遺物が集中して出土している。また、出土層位が大きく2つに分かれる。須恵器類は床面からの出土量が多く、土師器類は覆土中位から多く出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器蓋3点・高台付坏4点・小型坏2点・長頸壺1点、土師器高台付坏1点・坏1点・甕5点・甌1点、土玉1点、支脚1点、鉄製品1点である。1は胎土に白色の砂粒を多く含む須恵器蓋で、新治産と考えられる。2・3は湖西産の須恵器蓋と考えられる。蓋の上面には自然軸がかかる。4~7は湖西産の須恵器高台付坏である。7は内面に自然軸がかかる。8・9の小型の須恵器坏は胎土に白色の砂粒を多く含む、新治産と考えられる。8は底部に人為的な穿孔が施されている。10は湖西産と考えられる丸底の須恵器長頸壺である。頸部に自然軸がかかっている。11は土師器高台付坏である。内外面に赤彩が施され、口縁部内面に2段の矢羽根状の暗文が施されている。畿内系の土器を在地で製作したものと思われ、平城京2期に相当すると考えられる。12は土師器坏である。器面が著しく摩滅している。13~17は土師器甕である。13・17は胎土に雲母及び砂粒を多く含む常陸産と考えられる。17は表面にヘラミガキ調整が施される。18は土師器甕である。体部表面にはヘラケズリ調整が施されている。19の土玉は、貫通孔を伴わない。20は支脚の頭部である。21の鉄製品は、門(かんぬき)の通し金と思われる。出土遺物から、本堅穴は8世紀第2~第3四半期と考えられる。

(9) S1003(第48図、図版7・24・25)

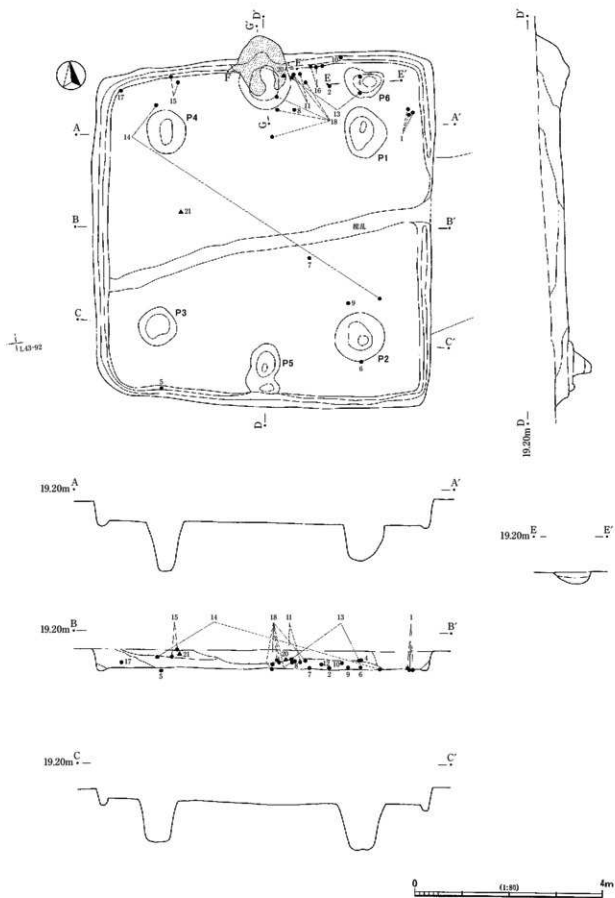
位置・形態 L43-53グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は3.0m×2.9mで小規模である。カマドは北壁のやや東寄りに位置し、主軸方位はN-9°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁23cm、西壁22cm、南壁22cm、東壁30cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、混入物は少ない。

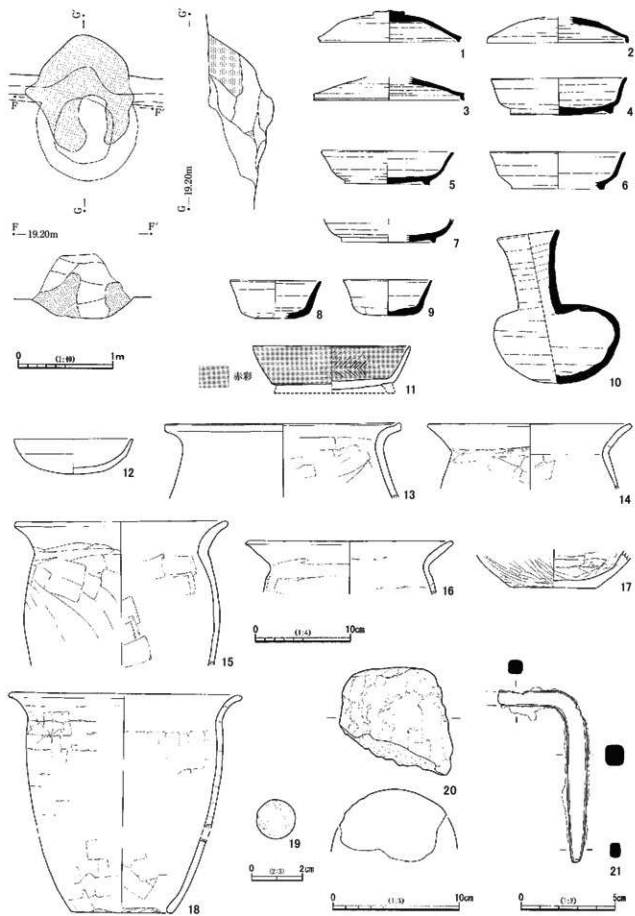
施設等 ビット5基が検出された。P1~P4は各コーナー寄りで検出されている。やや浅いが主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が5cm、P2が53cm、P3が9cm、P4が8cmである。南壁近くのP5は深さ21cmあり、入口の梯子ビットと考えられる。周溝は部分的に途切れている。カマドの遺存状況は悪く、辛うじて袖部の構築材が残存していた。床面は中央部から北西方向にかけて硬化面が確認された。

遺物出土状況 出土量はあまり多くない。概ね北側から出土している。

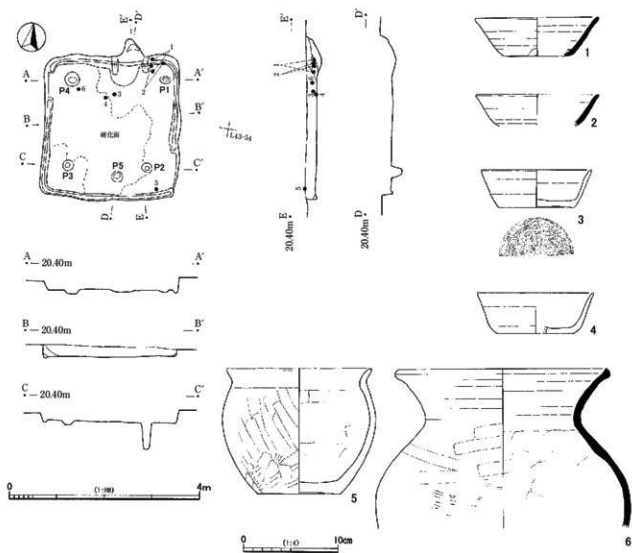
出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏2点・甕1点、土師器坏2点・甕1点である。1・2は須恵器坏、



第46图 (9)SI002(1)



第47图 (9)SI002(2)



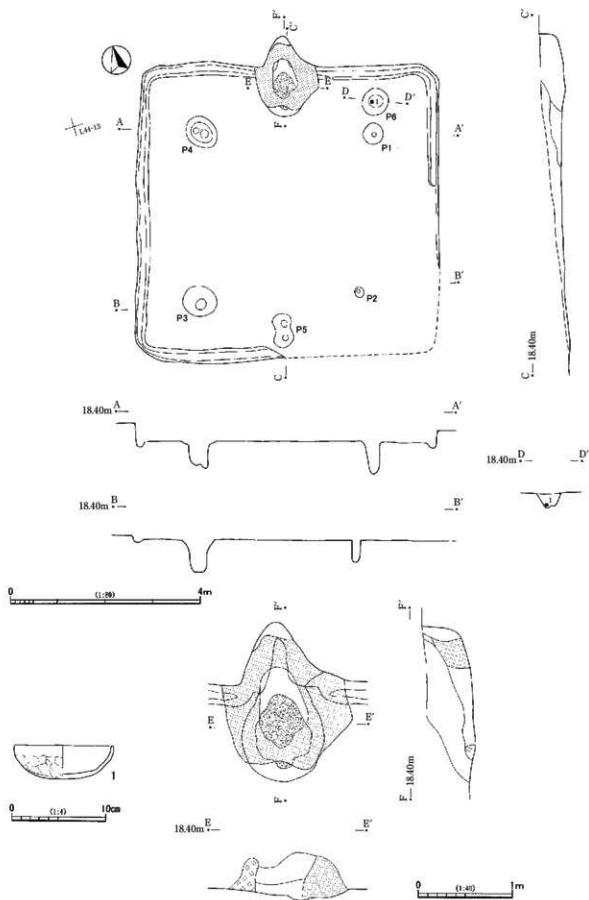
第48図 (9)SI003

3・4は土師器坏である。1は胎土に白色の砂粒を多く含み、新治産と考えられる。2は胎土に雲母及び砂粒を多く含むことから常陸産と考えられる。3は底部に回転ヘラケズリが施される。5は小型の甕である。タタキを施した後、ヘラケズリ調整を施している。6は須恵器の甕である。胎土に雲母及び砂粒を多く含み、常陸産と考えられる。出土遺物から、本堅穴は8世紀第4四半期と考えられる。

(9)SI004(第49図、図版8・25)

位置・形態 L44-13グリッドを主体に検出された大型の堅穴である。平面の形態は方形を呈し、規模は6.4m×6.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-18°-Eである。検出面から床面までの深さは、北壁57cm、西壁34cm、南壁5cm、東壁32cmである。斜面に構築された堅穴で、南東側は壁が失われている。覆土 暗褐色土を主体とし、ローム粒と焼土粒が少量混入する。

施設等 ピット6基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列されており、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が66cm、P2が46cm、P3が69cm、P4が58cmである。南壁近くのP5は深さ25cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。北東隅のP6は深さ32cmあり、貯蔵穴と考えられる。周溝は南東側が失



第49图 (9)SI004

われている。カマドの遺存状態はよい。天井部が崩落した構築材が、内部に堆積していた。カマド内部の壁は被熱が著しい。

遺物出土状況 出土量は微量である。北東コーナーのP6の底から坏が1点出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器坏1点である。1は体部外面にヘラケズリ調整が施される。出土遺物から、本堅穴は8世紀第1四半期と考えられる。

(9)S1005(第50図、図版8・25)

位置・形態 L44-04グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや台形様の方角を呈し、規模は4.9m×4.9mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-21°-Eである。検出面から床面までの深さは、北壁49cm、西壁20cm、南壁5cm、東壁30cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、ローム粒及び焼土粒が少量混入する。

施設等 ビット5基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が56cm、P2が49cm、P3が81cm、P4が46cmである。南壁近くのP5は深さ20cmあり、入口の梯子ビットと考えられる。周溝は全周する。カマドは、煙道部の突出が小さい。袖部の遺存はよい。床面は全体が硬化していた。

遺物出土状況 出土量はあまり多くない。北東隅に集中し、床面直上から完形の個体が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏蓋1点・高台付坏2点、土師器甕3点である。2・3は須恵器高台付坏である。3は湖西産であろう。4~6は土師器甕である。いずれも口縁部が最大径となっている。4・6は床面から完形で出土している。出土遺物から、本堅穴は8世紀第1~第2四半期と考えられる。

(9)S1007(第51・52図、図版8・25・26・31)

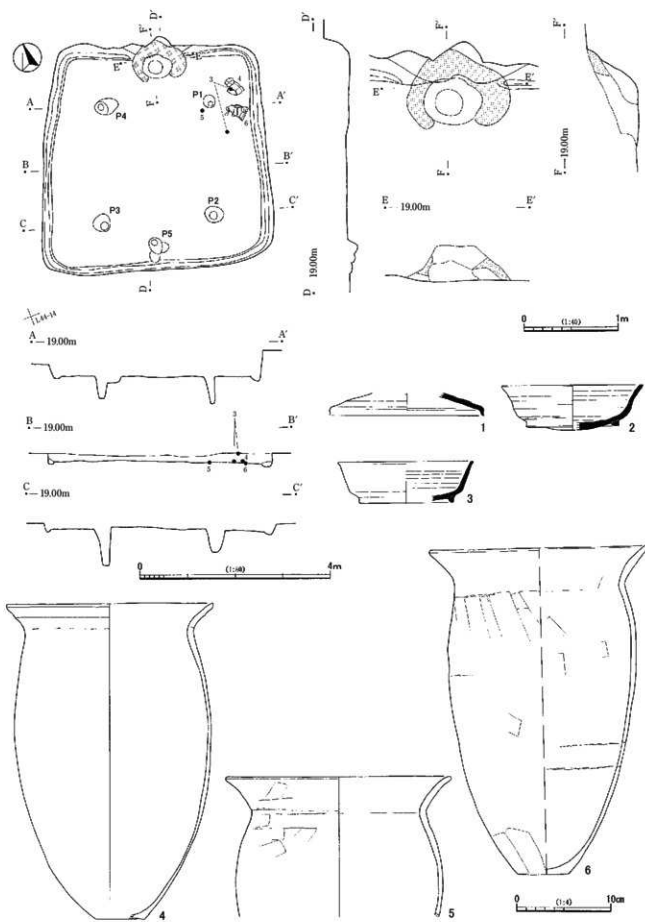
位置・形態 L44-22グリッドを主体に検出された。平面の形態は方角を呈し、規模は3.4m×3.3mである。カマドは北壁のやや西寄りにあり、主軸方位はN-21°-Eである。検出面から床面までの深さは、堅穴の遺存はよく、北壁47cm、西壁40cm、南壁22cm、東壁31cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、焼土及び炭化材が少量混入する。壁際ではローム粒が多く混入する。

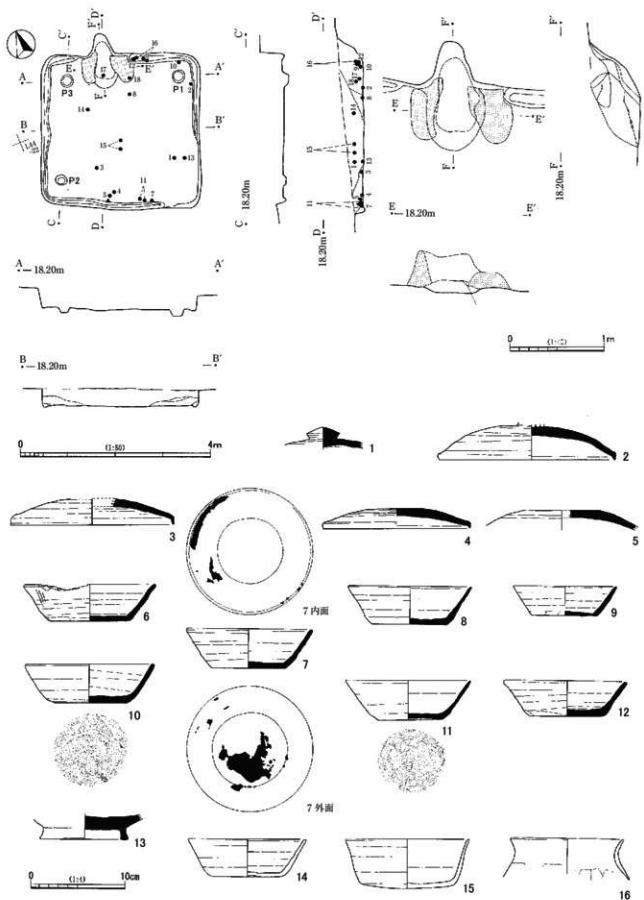
施設等 ビット3基と周溝、カマドが検出された。ビットは南東を除く3コーナー近くで検出されている。いずれも浅いが、柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が12cm、P2が5cm、P3が11cmである。周溝は南東コーナーで一部途切れている。カマドは煙道部が大きく突出する。袖部の遺存状態は良好である。火床面は良く焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況 出土量は多い。他の堅穴住居跡と比べ、須恵器の量が際立って多い。南北壁際でまとまって出土している。床面から覆土中位にかけて出土している。

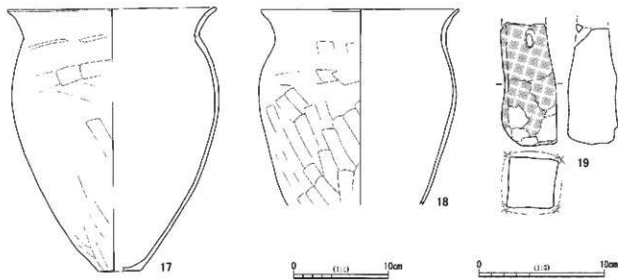
出土遺物 図示できた遺物は、須恵器蓋5点・坏7点・高台付坏1点、土師器坏2点・甕3点、砥石1点である。1~5は須恵器の蓋である。1は宝珠つまみ部分に自然軸がかかる。湖西産と考えられる。2は宝珠つまみが欠けている。胎土に砂粒を多く含む。3は東海系の須恵器と考えられる。4は宝珠つまみが失われている。4・5は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。6~12は須恵器坏である。6~9・12は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。6は、口唇部に意図的打ち欠きが認められる。7は内外面に黒い漆膜が付着している。特に体部内面にやや厚い付着がある。13は須恵器高台付坏ないしは盤である。14・15は箱形坏である。14は胎土に雲母及び砂粒を含む。16~18は甕である。16は小型の甕である。17・18は体部外面にヘラケズリ調整が施される。19は方柱状の砥石である。上部が欠損している。紐通しの穿孔が斜めに施さ



第50图 (9)SI005



第51图 (9)SI007(1)



第52図 (9)SI007(2)

れている。出土遺物から、本堅穴は8世紀第4四半期と考えられる。

(9)SI008(第53図、図版9・26)

位置・形態 L44-31グリッドを主体に検出された。南側の大部分が攪乱を受け、失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられ、遺存する東西方向で4.9mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-10°-Wである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁4cmである。

覆土 黒褐色土を主体とし、焼土粒が全体的に多量に混入する。

施設等 ビット3基とカマドが検出された。壁際にビットが3基検出された。最も西側のビットは床面からの深さが28cmあるが、柱穴とは言いがたい。カマドも遺存状態が悪く、構築材が僅かに残り、袖部がかるうじて想定できる。

遺物出土状況 出土量は微量である。北東の床面から出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器杯1点・台付甕1点である。1は坏である。底部は回転糸切り後、手持ちヘラケズリが施される。2は武蔵産の台付甕と考えられる。出土遺物から、本堅穴は9世紀第3四半期と考えられる。

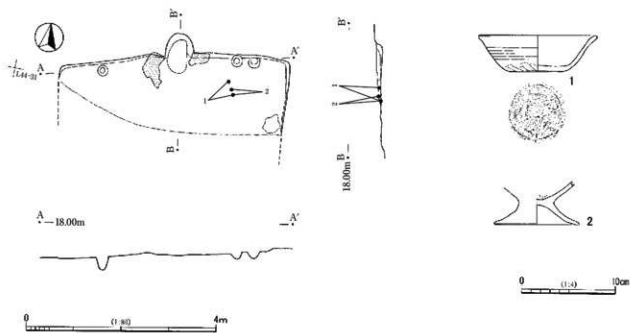
(10)SI002(第54図、図版9・26・31)

位置・形態 O44-38グリッドを主体に検出された。カマドから北側コーナーにかけてが、中・近世の溝状遺構によって攪乱を受け、失われている。平面の形態は方形を呈し、規模は3.2m×3.2mである。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN-43°-Wである。検出面から床面までの深さはほとんどなく、北西壁11cm、南西壁9cm、北東壁8cmである。

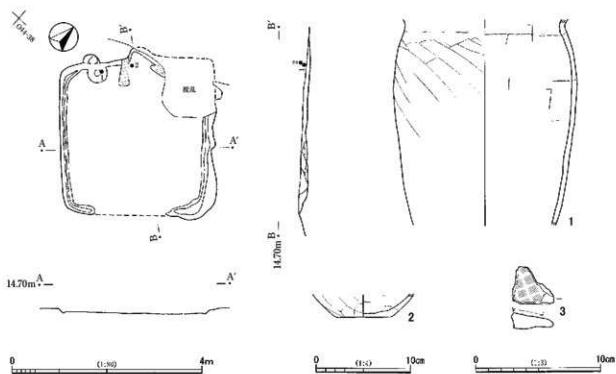
覆土 黒褐色土を主体とし、少量の焼土が混入する。

施設等 ビット1基と周溝、カマドが検出された。ビットはカマドの西側から検出された。床面からの深さが11cmである。周溝は南東の中央部分で途切れている。カマドの遺存状態は悪く、袖部の痕跡をわずかに残す程度である。床面は攪乱の影響で、凹凸が著しい。

遺物出土状況 出土量は微量である。カマド西側のビット付近と南東壁付近の覆土内で出土している。ま



第53图 (9)SI008



第54图 (10)SI002

た、カマドの前面で炭化材が集中して出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕2点、砥石1点である。1・2は甕である。ともに体部外面はヘラケズリが施される。出土遺物から、本堅穴は9世紀代と考えられる。

(10)SI003(第55図、図版9・26・31)

位置・形態 O44-37グリッドを主体に検出された。床面を剥がしたところ、一回り小さな堅穴住居跡の痕跡が確認された。主軸線を同じくしていることから、規模を大きくする建て替えが行われたものと考えられる。ただし、全面的な建て替えである点で、別々の堅穴として取り扱う方が妥当かもしれない。新堅穴の平面形態は長方形を呈し、規模は4.8m×4.0mである。カマドは北壁やや西寄りにある。主軸方位はN-36°-Wである。検出面から床面までの深さは南東方向で浅くなり、北壁22cm、西壁31cm、南壁4cm、東壁19cmである。旧堅穴の平面の形態は、やや歪みのある方形を呈すると考えられる。カマドの火床面と考えられる焼土が確認された。旧堅穴の規模は、一辺約3.6mの方形を呈すると推測される。

覆土 黒褐色土を主体とし、少量の焼土が混入する。建て替えにより旧堅穴を取り壊した後、貼り床を施して新たな堅穴を構築している。

施設等 新堅穴ではピット5基と周溝、カマドが検出された。規則的に配列された4基のピットは主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が44cm、P2が31cm、P3が33cm、P4が47cmである。南壁近くのP5は深さ6cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は北壁から西壁にかけて巡っている。カマドは、袖部が良く残っている。カマドの中央から支脚が出土している。旧堅穴では、ピット4基と周溝、カマドの火床面が検出された。ピットの深さは、P6が31cm、P7が28cm、P8が46cm、P9が46cmであり、いずれも主柱穴と考えられる。周溝は東壁から南壁の一部にかけて検出された。

遺物出土状況 出土量はあまり多くない。カマド周辺の覆土中からまとまって出土している。カマドからは支脚が立った状態で出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器蓋2点、土師器杯1点・甕1点、支脚1点である。3の土師器杯は、器面の摩耗が著しいがヘラケズリされている。4の甕は、口縁部が最大径となり、体部外面はヘラナデ調整が施される。出土遺物から、本堅穴は8世紀第1四半期と考えられる。

(10)SI006(第56図、図版10・26・31)

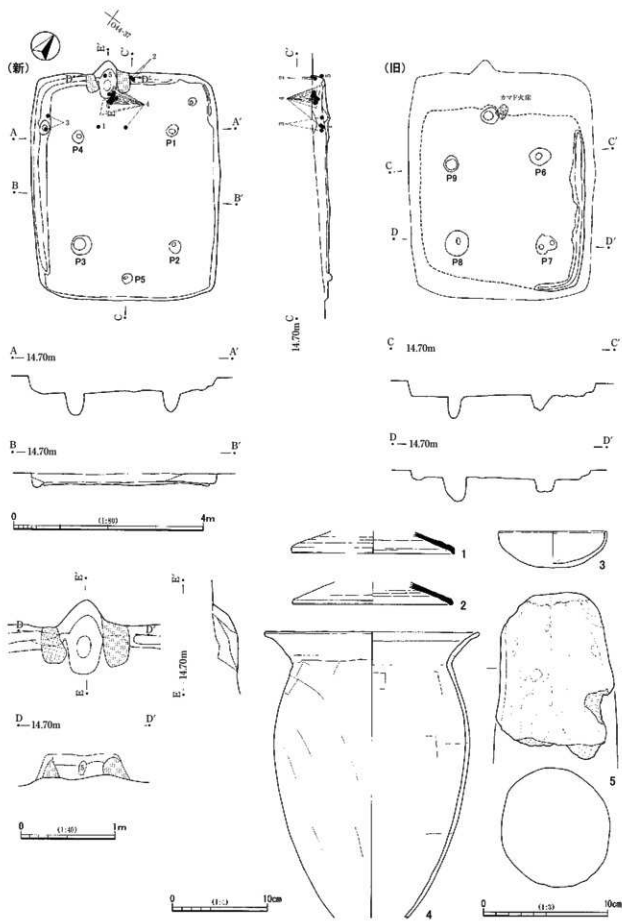
位置・形態 P43-73グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は4.3m×4.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-21°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁12cm、西壁15cm、南壁17cm、東壁6cmである。堅穴の中央が円形に攪乱されている。

覆土 暗褐色土を主体とする。

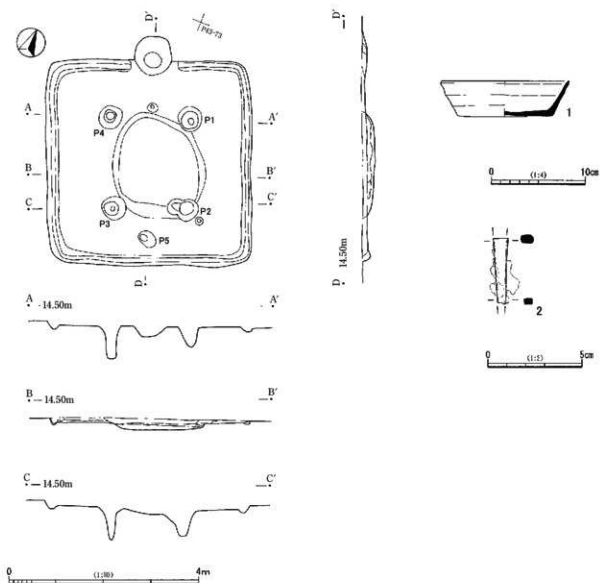
施設等 ピット5基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が42cm、P2が56cm、P3が70cm、P4が68cmである。南壁近くのP5は深さ16cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周する。北壁のカマドは袖部のごく一部を残し失われていた。煙道部は大きく突出する。

遺物出土状況 出土量は微量である。鉄鏃が周溝内から出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器杯1点、鉄鏃1点のみである。1の須恵器杯は、底部はヘラ切り後ヘラケズリ調整が施される。2は鉄鏃の茎である。出土遺物から、本堅穴は8世紀第2四半期~第3四半期と考えられる。



第55图 (10)SI003



第56図 (10)SI006

(10)SI007(第57図、図版10・26)

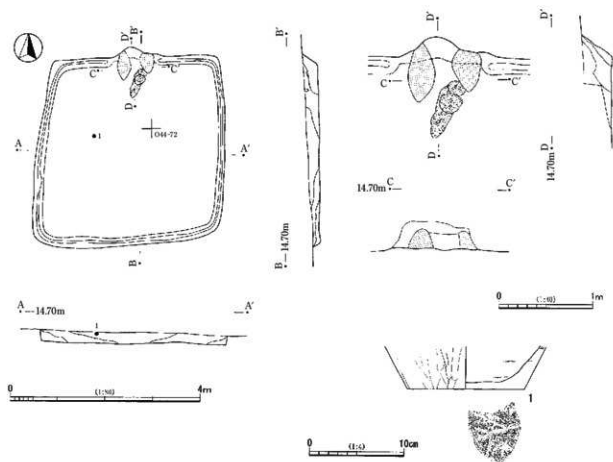
位置・形態 O44-71グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は4.0m×4.0mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-1°-Eとほぼ真北を向いている。検出面から床面までの深さは北壁36cm、西壁31cm、南壁15cm、東壁19cmである。

覆土 黒褐色土を主体とする。

施設等 周溝とカマドが検出された。周溝は全周する。北壁のカマドは煙道部の突出があまりない。袖部の遺存状態は良好である。

遺物出土状況 出土量は微量である。中央部の覆土中から甕の底部が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕1点である。1は胎土に雲母及び砂粒を多く混入する。常陸産の甕と考えられる。体部外面はヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。底部には木葉痕が残る。出土遺物から、本堅穴は8世紀代と考えられる。



第57図 (10)SI007

(10)SI008(第58図、図版10・27・31)

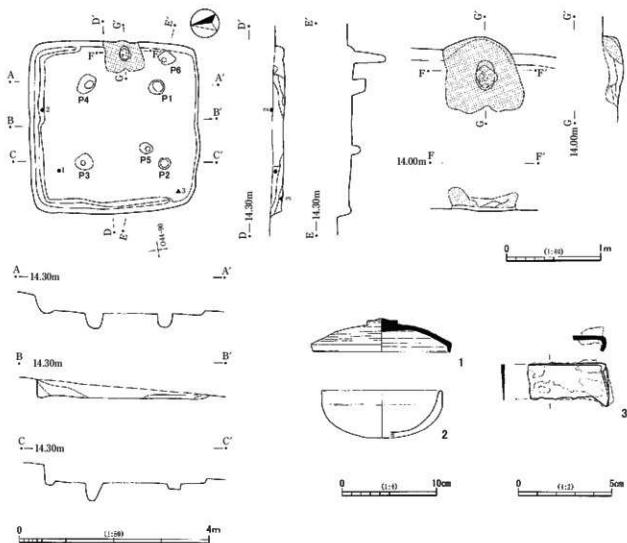
位置・形態 O44-80グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は3.7m×3.6mである。カマドは東壁にあり、主軸方位はN-97°-Eである。検出面から床面までの深さは北壁44cm、西壁29cm、南壁7cm、東壁17cmである。

覆土 黒褐色土を主体とし、焼土が僅かに混入する。下層ではローム粒が少量混入する。

施設等 ビット6基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列されており、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が29cm、P2が11cm、P3が37cm、P4が30cmである。P5は位置が内側に寄りすぎており、入口のビットではなかろう。深さは17cmを測る。P2が浅いことからあるいは支柱穴かもしれない。カマド脇のP6は小規模だが貯蔵穴と考えられる。深さは68cmを測る。周溝はカマドの北側から北壁を通り、西壁まで巡っている。東壁のカマドは煙道部の突出はほとんどない。カマドの構築材が良く残っているが、天井部は崩落している。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況 出土量は微量である。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器蓋1点、土師器坏1点、刀子1点である。いずれも覆土中から出土している。1は須恵器蓋である。胎土は混入物が少なく、僅かに白色粒が混じる。完形で出土している。2は土師器坏である。胎土には雲母や砂粒を多く含む。7世紀代の可能性が高く、覆土上面からの出土であることから、混入であろう。3は刀子である。出土遺物から、本堅穴は8世紀第2四半期と考えられる。



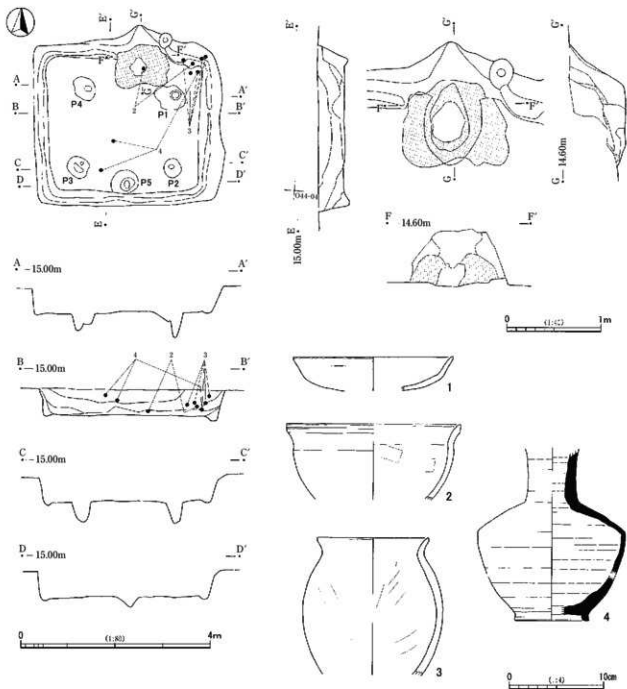
第58図 (10)SI008

(10)SI011 (第59図、図版10・11・27)

位置・形態 O43-93グリッドを主体に検出された。堅穴は、深く遺存状態はよかった。平面の形態は若干長方形を呈する。規模は4.0m×3.4mである。カマドは北壁のやや東寄りにあり、主軸方位はN-4°-Wである。検出面から床面までの深さは他の堅穴に比べて深く、北壁60cm、西壁63cm、南壁65cm、東壁63cmである。

覆土 暗黒褐色土を主体とし、レンズ状に堆積する。全体的に焼土が少量混入する。下層ではロームが混入する。

施設等 ビット5基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列されており、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が53cm、P2が45cm、P3が42cm、P4が22cmである。南壁近くのP5は深さ20cmあり、入口の梯子ビットと考えられる。周溝はほぼ全周する。カマドの遺存はよく、袖部のカマド構築材も良く残っている。煙道部は緩やかに突出する。火床面はよく焼けていた。



第59図 (10)SI011

遺物出土状況 出土量は少ない。カマド東脇、北東コーナーに集中し、その他は散発的である。カマド内からも遺物が出土しているが、ほとんどが覆土中からの出土である。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器長頸壺1点、土師器坏1点・鉢1点・甕1点である。1の土師器坏は、体部外面の摩滅が著しい。2の鉢は口縁部が幅のあるヨコナデが施されている。3の甕は器面の摩滅が顕著である。体部外面はヘラケズリが施されている。4は東海産と考えられる須恵器長頸壺である。肩がやや張る器形で、頸部から肩部にかけて自然釉がかかっている。出土遺物から、本堅穴は8世紀第1四半期と考えられる。

(10)SI012(第60図、図版11・27)

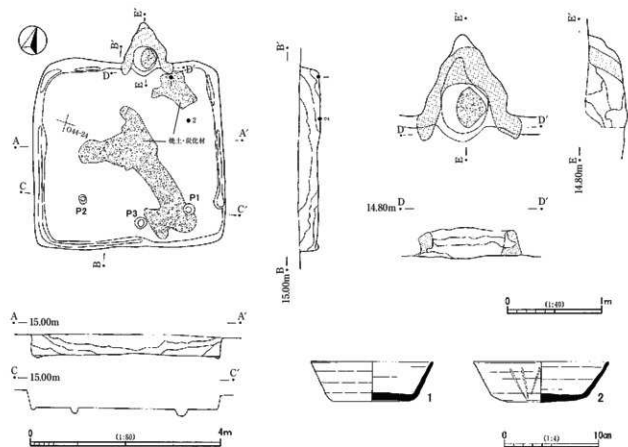
位置・形態 O44-24グリッドを主体に検出された。堅穴の遺存はよかつた。平面の形態は方形を呈する。規模は4.1m×4.0mである。カマドは北壁のやや東寄りにあり、主軸方位はN-17°-Wである。検出面から床面までの深さは他の堅穴に比べて深い。北壁41cm、西壁40cm、南壁38cm、東壁41cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、レンズ状に堆積する。底面には焼土と炭化材が図示した範囲で検出されており、焼失住居跡の可能性はある。

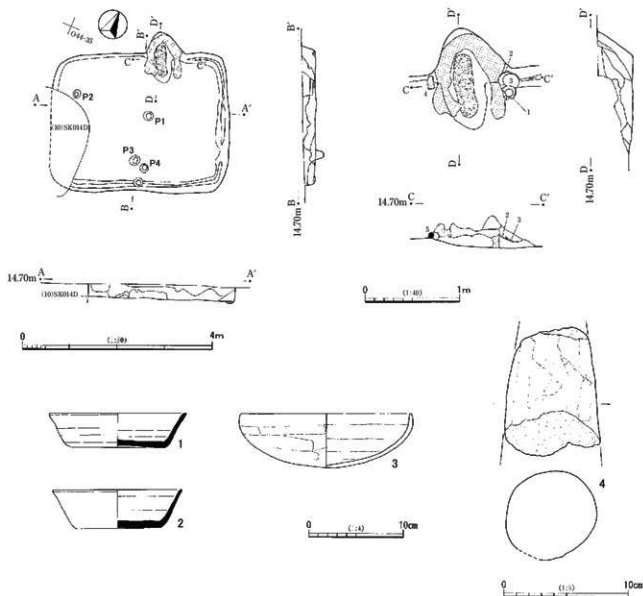
施設等 ビット3基と周溝、カマドが検出された。P1・P2は浅いが柱穴の可能性はある。深さは、P1が13cm、P2が10cmである。南壁近くのP3は深さ19cmあり、入口の梯子ビットと考えられる。周溝は部分的に確認された。カマドは規模が大きく、外側へ強く張り出して設けられている。袖部は堅穴内に僅かに出る程度のものである。火床面はよく焼けており、焼土が堆積していた。

遺物出土状況 出土量は少ない。北東コーナーの近くで、床面から出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器杯2点である。2は焼成前に施された記号が体部外面に施されている。出土遺物から、本堅穴は8世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。



第60図 (10)SI012



第61図 (10)SI013

(10)SI013(第61図、図版11・27・31)

位置・形態 O44-35グリッドを主体に検出された。平面の形態は東西方向に長い長方形を呈する。西側の一部が中世の地下式坑に壊されている。規模は3.6m×2.9mである。カマドは北壁のやや東寄りにあり、主軸方位はN-23'-Wである。検出面から床面までの深さは北壁31cm、南壁26cm、東壁36cmである。

覆土 褐色土を主体としロームの混入量が多い。上層には僅かな焼土粒が混入する。

施設等 ピット4基と周溝、カマドが検出された。P1は床面からの深さ12cm、P2は深さ14cmである。P3は深さ14cm、P4は深さ18cmあり、どちらも入口の梯子ピットであろう。周溝はカマドの東側から南壁にかけて設けられ、南東の一部で途切れている。カマドは外側に強く張り出しており、遺存状態は比較的良い。火床面はよく焼けており、焼土が薄く堆積していた。

遺物出土状況 出土量は少ない。カマド袖部の右脇では坏が3点、口縁部を上にして接して出土し、袖部左脇では、支脚が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器環2点、土師器環1点、支脚1点である。1・2は須恵器環で胎土に雲母及び砂粒を多量に含み、常陸産であろう。2は体部外面のロクロ目が見えない。3は土師器環で体部外面にヘラケズリ調整が施されている。本堅穴は出土した須恵器環から8世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。ただし、3の土師器環の時期は7世紀後半の可能性がある。

(10)SI014(第62図、図版11・27・28・31)

位置・形態 O44-45グリッドを主体に検出された。平面の形態は南北方向に長い長方形を呈する。北側の床面は中世の地下式坑によって壊されている。規模は4.3m×3.8mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-5°-Wである。検出面から床面までの深さは北壁38cm、西壁42cm、南壁31cm、東壁38cmである。
覆土 暗褐色土を主体とし、下層には少量の焼土が混入する。

施設等 ビット2基と周溝、カマドが検出された。堅穴の中央やや南寄りと南壁近くにビットが検出された。P1は床面からの深さが28cm、P2は深さ10cmある。P2は入口の梯子ビットと考えられる。周溝は北壁を除いて巡っている。カマドの遺存状態はあまり良くない。煙道部の張り出しが大きい。袖部に僅かにカマド構築材が認められる程度である。

遺物出土状況 出土量は後世の攪乱を受けているにもかかわらず比較的多かった。床面から出土しているものが多い。中世土坑内の覆土から出土しているものがあるが、本堅穴に伴う可能性があるものは掲載した。北東と南西コーナーに焼土の堆積がある。

出土遺物 図示した遺物は、須恵器高台付環2点・環3点・甕1点、土師器環5点である。1・2は高台付環である。1は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。3～5は環である。3・4は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。1～4は常陸産と考えられる。5は胎土に砂粒を多く含む。底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリが施される。6～10は土師器環である。6・7・9・10はロクロ整形土師器である。11は須恵器甕である。体部外面はタタキ、内面は指頭による押さえが全面に残る。胎土には雲母を多く含む。12～16は鉄製品である。12・13は鉄鏝である。同一個体かどうかはわからない。13は基部の木質が残っている。14は刀子である。15は鎌の可能性ある。16は釘であろう。このほか図示しなかったが31点合計200gのスラグが出土している。いずれも小片である。本堅穴は8世紀第4四半期と考えられ、縦長の長方形の特異な堅穴であり、鉄製品、スラグの出土があったことから鍛冶関連の工房の可能性もあるかもしれない。

(11)SI017(第63図、図版11・28)

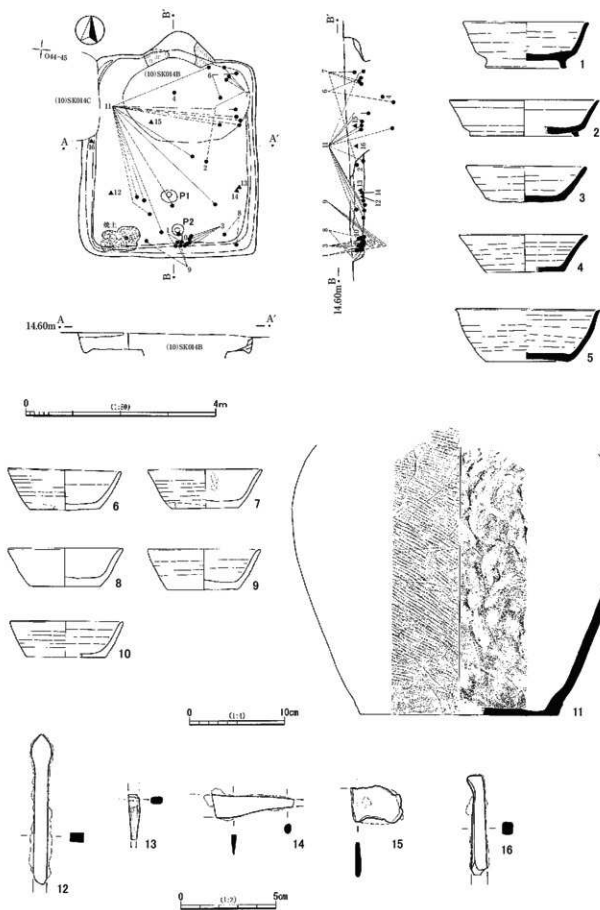
位置・形態 N44-77グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈する。規模は4.2m×4.1mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-11°-Wである。検出面から床面までの深さは北壁63cm、西壁51cm、南壁37cm、東壁48cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、少量のロームが混入する。下層には少量の焼土粒が混入する。

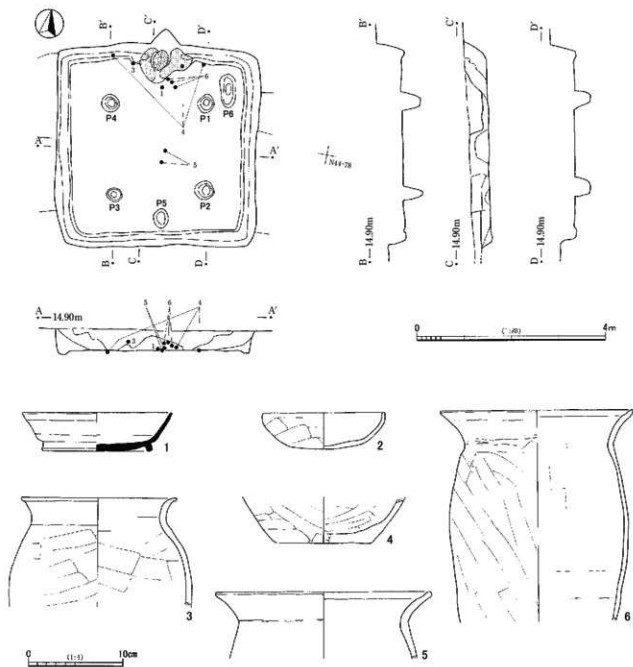
施設等 6基のビットと周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が36cm、P2が34cm、P3が40cm、P4が39cmである。南壁近くのP5は深さが14cmあり、入口の梯子ビットと考えられる。北東コーナーのP6は深さ27cmあり、貯蔵穴と考えられる。周溝は全周する。カマドの遺存状態はあまり良くない。煙道部は山形に突出する。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況 出土量はあまり多くない。遺物はカマド周辺の床面からややまとまって出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器高台付環1点、土師器環1点・甕4点である。1は須恵器高台付環である。胎土に雲母と砂粒を含む。常陸産であろう。2の土師器環は、体部外面がヘラケズリされている。



第62図 (10)SI014



第63図 (10)SI017

3～6は甕である。3・4・6は体部外面にヘラケズリが施される。4・6は胎土に砂粒を多く含む。出土遺物から、本堅穴は8世紀第1四半期と考えられる。

(10)SI018(第64図、図版11・28)

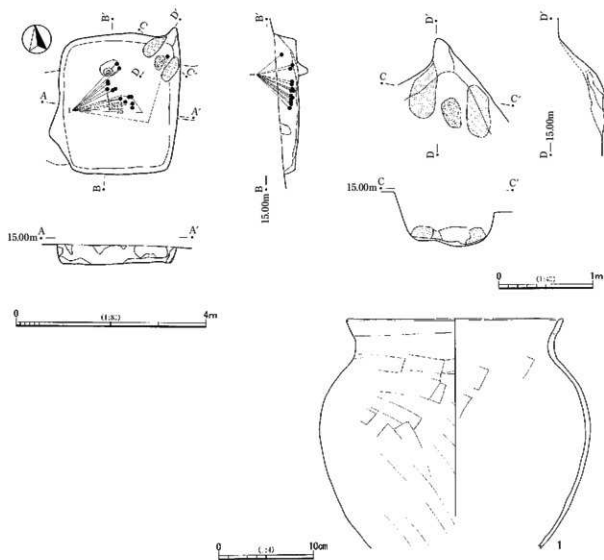
位置・形態 N44-75グリッドを主体に検出された。平面の形態は南北方向にやや長い長方形を呈する。規模は3.0m×2.5mで、小規模である。カマドは北東コーナーにあり、長軸方向を主軸とすれば方位はN-10°-Eである。検出面から床面までの深さは北壁50cm、西壁43cm、南壁26cm、東壁22cmで、堅穴の遺存状態はよかった。

覆土 黒色土を主体とし、焼土粒が僅かに混入する。

施設等 ビットはなく、北東コーナーのカマドのみである。遺存状態は袖部が辛うじて残る。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況 出土量は微量である。土師器甕1点が、床面の近くから出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕1点である。薄手の作りで、器面は摩滅している。体部外面にはヘラケズリが施される。甕のみのため時期を特定することは難しいが、堅穴の規模などを含め本堅穴は9世紀代と考えられる。



第64図 (10)SI018

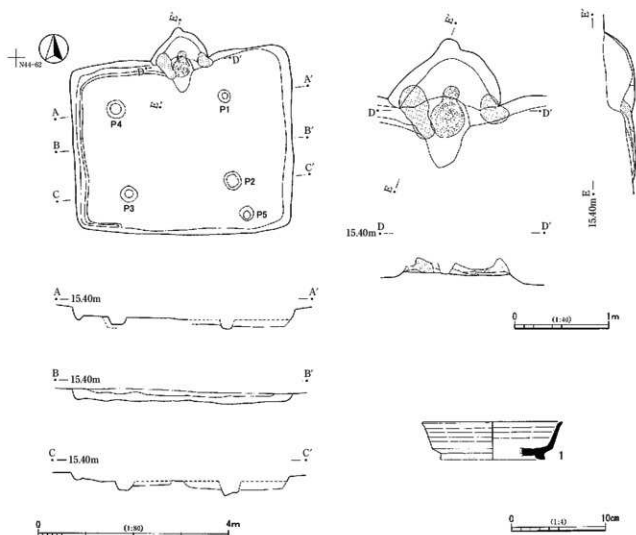
(10) SI020A (第65図、図版12・28)

位置・形態 N44-62グリッドを主体に検出された。本竪穴の平面の形態は東西方向に長い長方形を呈する。規模は4.6m×3.6mである。カマドは北壁にあり、主軸方位は真北を向く。検出面から床面までの深さは北壁31cm、西壁22cm、南壁22cm、東壁33cmである。本竪穴の床剥がし作業後に、もう一軒主軸方位の異なる竪穴が検出された。主軸が異なることから、建て替えなどではなく時期を異にする竪穴住居跡と考えられ、SI020Bという別番号とした。

覆土 黒褐色土を主体とし、少量の焼土粒が混入する。

施設等 5基のピットと周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が14cm、P2が26cm、P3が10cm、P4が19cmでいずれも浅い。P5は深さ14cmあり、入口の梯子ピット考えられる。周溝はカマドから南壁の一部まで巡っている。カマドの遺存状態はあまり良くない。袖部が僅かに残る程度である。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況 出土量は微量である。



第65図 (10)SI020A

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器高台付坏1点である。1は緻密な胎土で、混入物がほとんどない。東海産と考えられる。出土遺物から、本堅穴は8世紀第2四半期と考えられる。

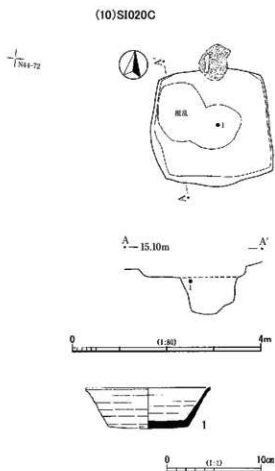
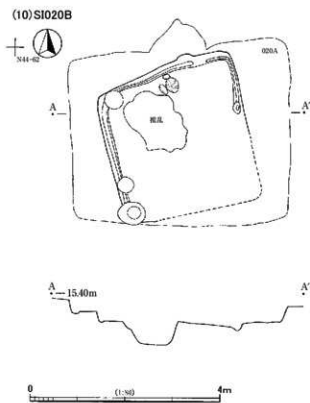
(10)SI020B(第66図、図版12)

位置・形態 N44-62グリッドを主体に検出された。本堅穴は(10)SI020Aの床面下で検出された。検出された周溝から、本堅穴の平面の形態は方形を呈すると考えられ、規模は遺存している東西方向で3.0mを測る。カマドは火床面が検出されたことから北壁にあり、主軸方位はN-16°-Wと考えられる。検出面から床面までの深さは北壁21cm、西壁19cm、東壁8cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし粘質で硬く締まっていた。

施設等 周溝とカマドが検出された。周溝は北側と西側及び東側の一部に巡っている。カマドは火床面に焼土粒及び構築材に用いられたと考えられる山砂が僅かに残っていた程度である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。本堅穴の時期は、本堅穴を壊しているSI020Aが8世紀第II四半期であること、堅穴の規模が小規模であることから8世紀第I四半期～第II四半期の堅穴の可能性が高いと考えられる。



第66図 (10)SI020B・(10)SI020C

(10)SI020C(第66図、図版28)

位置・形態 N44-72グリッドを主体に検出された。SI020Aの南側に隣接して検出された。中近世の溝状遺構などに壊されており、堅穴の遺存状態は悪く、北壁はほとんど検出されなかった。平面の形態は方形を呈する。規模は2.5m×2.4mで小規模である。カマドは北壁中央で火床面のみが検出された。主軸方位はN-6°-Wである。検出面から床面までの深さは西壁17cm、南壁18cm、東壁25cmである。

覆土 黒褐色土を主体とし僅かに焼土粒が混入する。下層は暗黄褐色土を主体とし、少量の焼土粒及びローム粒が混入する。

施設等 カマドの火床面のみが検出された。カマド煙道部の張り出しは大きかったようである。

遺物出土状況 出土量は微量である。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏1点である。大きな攪乱の中から出土しており、本堅穴に伴うとは断定しきれない。1は胎土に雲母及び砂粒を多く含む新治産と考えられる。底部は回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリが施される。1を本堅穴に伴うものとするれば、本堅穴は8世紀第3四半期と考えられる。

(10)SI021(第67図、図版12・28・29)

位置・形態 N44-91グリッドを主体に検出された。南壁は溝状遺構によって約3分の1が攪乱されている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存している東西方向で3.5mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-2°-Wである。検出面から床面までの深さは他の堅穴と比較して深く、北壁85cm、西壁56cm、東壁41cmである。

覆土 黒色土を主体とし、僅かに焼土粒が混入する。

施設等 ビット5基とカマドが検出された。P1~P4は規則的に配列され、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が25cm、P2が12cm、P3が26cm、P4が26cmある。東壁近くのP5は深さ26cmあり、入口の梯子ビットの可能性がある。P6は床面からの深さが26cmあり、貯蔵穴の可能性がある。北西コーナーのビットは、不定形であり、攪乱の可能性が高い。周溝は検出されなかった。北壁のカマドは煙道部が大きく張り出している。袖部の遺存は良い。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

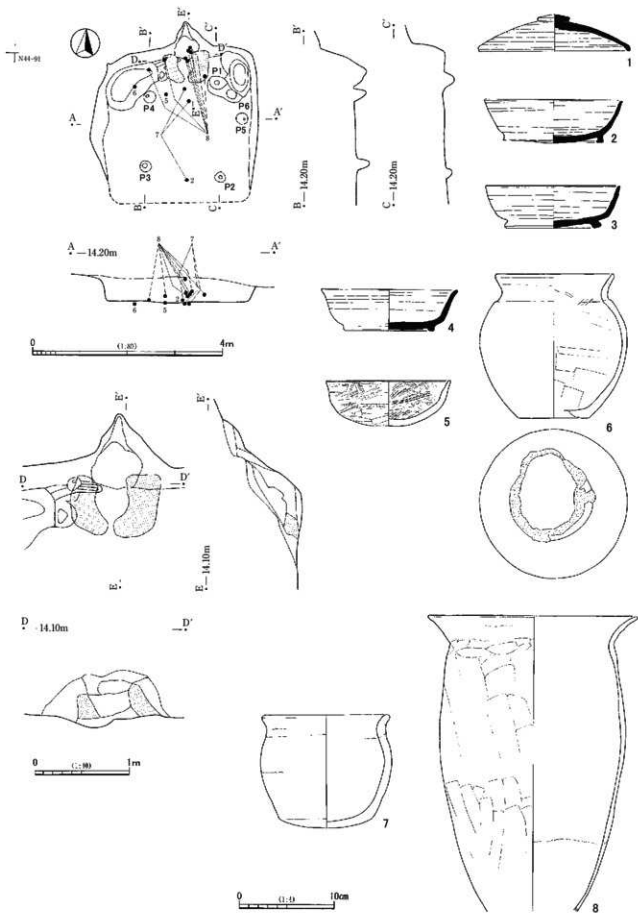
遺物出土状況 出土量は他の堅穴と比較して多い。出土遺物は概ねカマドの周辺に集中しており、カマドからは長胴甕が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器蓋1点・高台付坏3点・土師器坏1点・小型の甕2点・長胴甕1点である。1の須恵器蓋は胎土が比較的粗い。2~4は須恵器高台付坏である。いずれも胎土に若干の砂粒が混ざる。5は大きめの土師器坏である。体部外面はハケ目が施された後、ヘラケズリが施される。内面はハケ目調整の後、ヘラミガキ調整が施される。6・7は土師器小型甕である。6の底部は焼成後に内面からの敲打で打ち欠かされている。胎土は砂粒などを多く含む。器面は摩滅が著しい。7は体部外面にヘラケズリ調整が施される。底部は丸味があり不安定である。8は土師器長胴甕である。薄手の作りで、体部外面はヘラケズリ調整が施される。出土遺物から、本堅穴は8世紀第1四半期~第2四半期と考えられる。

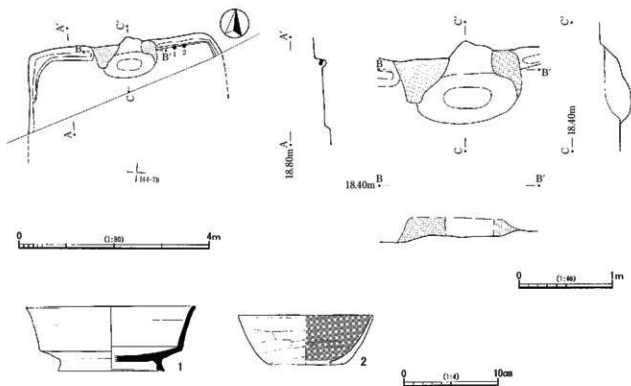
(11)SI002(第68図、図版12)

位置・形態 I44-68グリッドを主体に検出された。北側の一部を残して、大部分は失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で4.1mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-4°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁18cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、粘性が強い。ソフトローム粒が少量混入する。



第67图 (10)SI021



第68図 (11)SI002

施設等 周溝とカマドが検出された。カマドの煙道部は張り出しがほとんどない。

遺物出土状況 出土量は微量である。カマド右袖脇から出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器高台付坏1点、土師器坏1点である。1は須恵器高台付坏である。胎土に雲母及び砂粒を多く含む。新治産と考えられる。2は土師器坏である。体部内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。出土遺物から、本堅穴は8世紀第2四半期と考えられる。

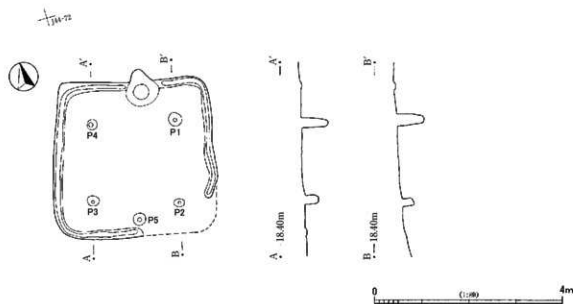
(11)SI003(第69図、図版13)

位置・形態 J44-72グリッドを主体に検出された。堅穴の遺存状態は良くないが、辛うじて堅穴の全体形を検出することができた。覆土はほとんど残されていない。平面の形態は方形を呈する。規模は3.4m×3.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-11°-Eである。検出面から床面までの深さは、残存している北壁4cm、西壁3cmである。

覆土 覆土はほとんど失われている。

施設等 ピット5基と周溝、カマドの火床面のみが検出された。P1~P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が55cm、P2が25cm、P3が31cm、P4が53cmである。南壁近くのP5は深さ17cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周していたと考えられる。カマドもほとんど遺存しておらず、火床面が僅かに残っていた程度である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかったことから、時期を特定することは難しいが、堅穴の規模と周辺の堅穴の状況から8世紀代の堅穴と推測される。



第69図 (11)SI003

(11)SI004(第70図、図版13・29・31)

位置・形態 I 44-48グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪んだ方形を呈する。規模は4.5m×4.2mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-5°-Eである。検出面から床面までの深さは、北壁16cm、西壁7cm、南壁2cm、東壁13cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、粘性が強い。焼土粒が少量混入する。

施設等 ピット1基と周溝、カマドが検出された。1基だがP1は柱穴の可能性がある。床面からの深さは28cmである。周溝は北東と北西コーナーに一部分巡っている。カマドの遺存状態は比較的良かった。煙道部の張り出しは小さい。

遺物出土状況 出土量は少ない。ほとんどが床面から出土している。

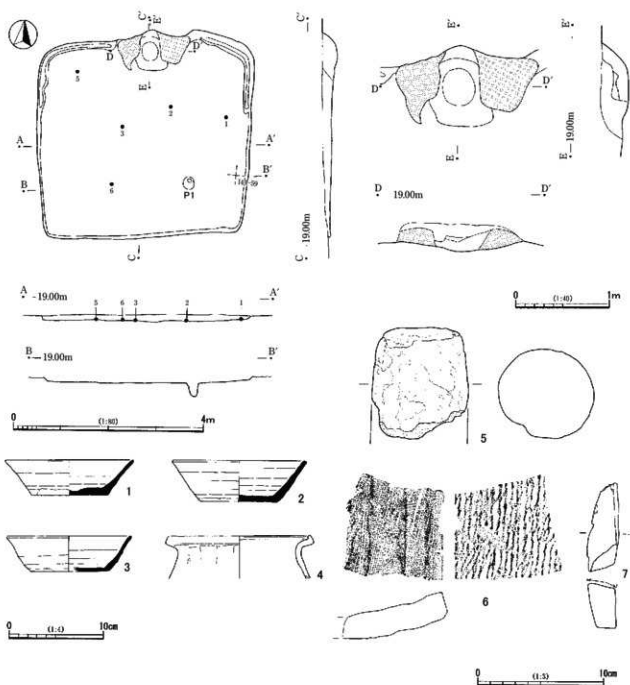
出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏3点、土師器甕1点、支脚1点、平瓦1点である。1～3は須恵器坏である。胎土に雲母及び砂粒を多く含み、新治産と考えられる。4は甕である。胎土に雲母及び砂粒を多く含み、常陸産と考えられる。口縁部の外反が顕著で、受け口縁状である。5は大きな支脚の頭部である。床面から出土している。6は平瓦の破片である。床面から出土している。7は柱状の砥石である。出土遺物から本堅穴は8世紀第3四半期と考えられる。

(11)SI006(第71図、図版13・29)

位置・形態 I 44-65グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈する。規模は3.4m×3.0mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-15°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁19cm、西壁7cm、南壁2cm、東壁19cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、粘性が強い。焼土粒及びローム粒が少量混入する。

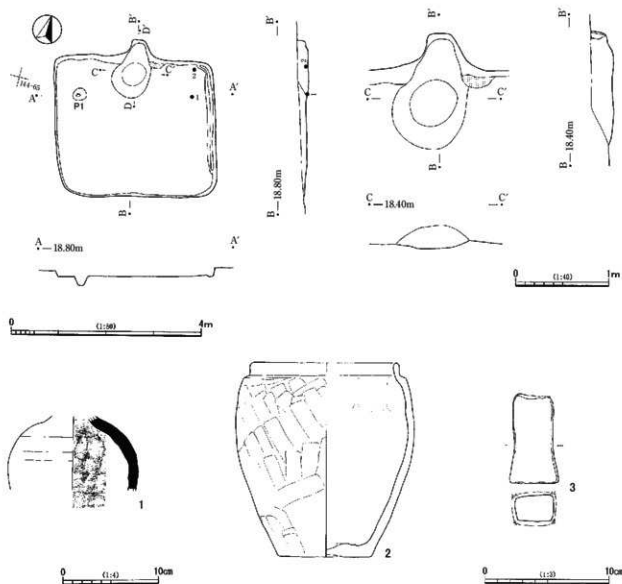
施設等 ピット1基と周溝、カマドが検出された。P1の床面からの深さは18cmである。柱穴の可能性は低い。周溝は東壁の一部で確認された。北壁のカマドはほとんど遺存していない。煙道部の張り出しが大きい。火床面には焼土が薄く堆積していた。



第70図 (11)SI004

遺物出土状況 出土量は微量である。北東コーナーから出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器長頸壺1点、土師器甕1点、砥石1点である。1は小型品である。体部内面には指の押さえが残る。胎土には白色の砂粒が多く含まれる。2は甕としたが、蔵骨器というべき器形である。一般的には竈穴住居跡からの出土は珍しい。口縁部は、受け口縁状で、体部外面はヘラケズリである。3は砥石である。四面すべてを使用している。出土遺物から、本竈穴は8世紀第3～第4四半期と考えられる。



第71図 (11)SI006

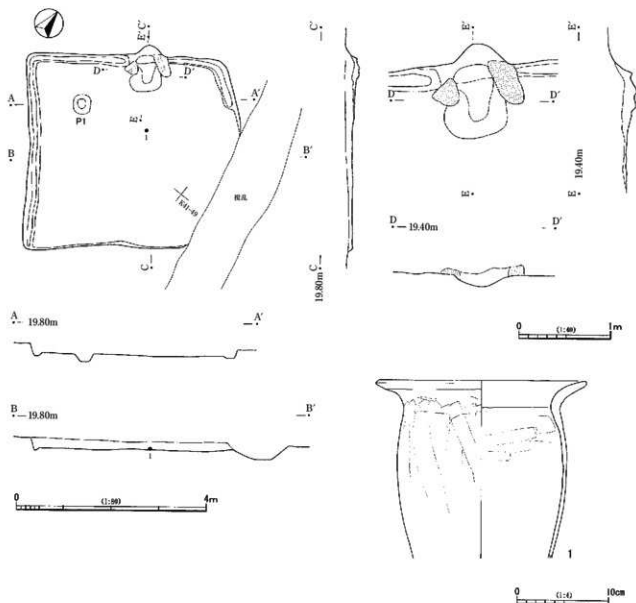
(11)SI011(第72図、図版13・29)

位置・形態 K41-48グリッドを主体に検出された。東側の一部が溝状遺構によって壊されている。平面の形態はやや歪んだ方形を呈する。規模は4.5m×4.1mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-37°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁22cm、西壁29cm、南壁12cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、粘性が強く良く締まっている。焼土粒が少量混入する。

施設等 ピット1基と溝溝、カマドが検出された。P1は定型的な柱穴の位置にあり柱穴の可能性がある。床面からの深さは12cmである。溝溝は東壁の北側から西壁にかけて巡っている。カマドの遺存状態はあまり良くない。袖部の構築材が僅かに残っていた程度である。

遺物出土状況 出土量は微量である。中央の床面から土師器甕が1点出土している。



第72図 (11)SI011

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕1点である。胎土には砂粒を多く含み、薄手の作りである。体部外面はヘラケズリが施される。甕のみのため時期を特定することが難しいが、本堅穴は8世紀代中葉あたりであろう。

(11)SI012(第73図、図版13・31)

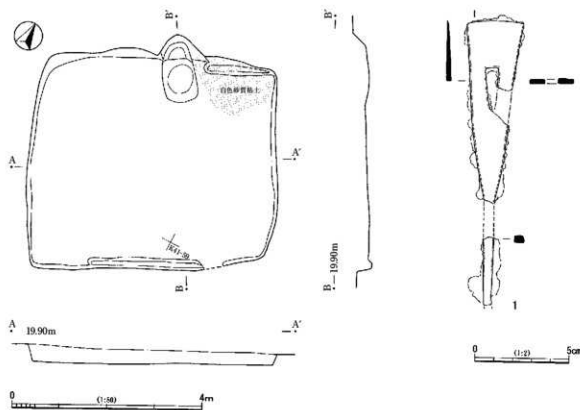
位置・形態 K41-48グリッドを主体に検出された。北東コーナーが攪乱されている。平面の形態は東西方向に若干長い長方形を呈する。規模は5.3m×4.6mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-26°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁29cm、西壁31cm、南壁19cm、東壁26cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、粘性が強く、良く締まっている。焼土粒が少量混入する。

施設等 周溝、カマドが検出された。周溝は南壁中央部の一部に限られている。カマドは遺存状態が悪く、カマド構築材はほとんど残っていなかった。カマド右袖から北東コーナーにかけてのトーンで示した範囲には、最高7cmの厚さで白色砂質粘土が検出された。

遺物出土状況 堅穴の遺存の悪さもあり、微量であった。鉄鏝が1点覆土から出土している。

出土遺物 1は大型の鉄鏝で、有茎平根式の方頭を呈する鏝である。二等辺三角形を呈し先端はほぼ直刃である。鏝身の中央に外形と同じ逆三角形の透かしがある。茎は末端と中間に欠損している。全長は17cm程度と推測される。時期を特定できる土器の出土がないが、堅穴の規模と周辺の堅穴住居跡の配置状況などから、8世紀代と考えられる。



第73図 (11)SI012

(11)SI014(第74図、図版14・29)

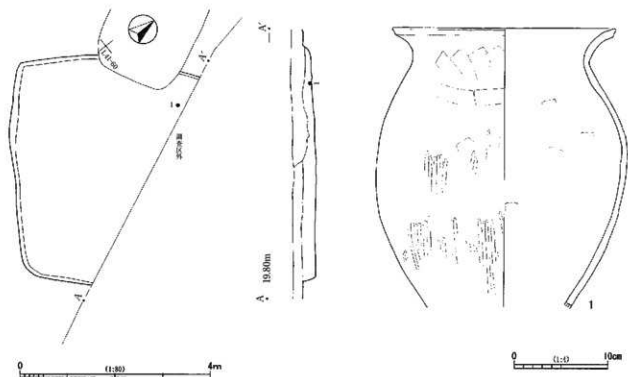
位置・形態 L41-60グリッドを主体に検出された。東側の大部分は調査区外で、堅穴の約半分が検出された。また、カマドが位置するとみられる北壁の中央部分も攪乱されている。平面の形態は方形を呈すると思われる。規模は遺存している部分で4.6mを測る。主軸方位はN-51°-Wと推定される。検出面から床面までの深さは、北西壁24cm、南西壁18cm、南東壁21cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、粘性が強く、良く締まっている。少量の焼土粒が混入する。

施設等 ピット、周溝などは検出されなかった。カマドは、北壁に設置されていたと考えられる。

遺物出土状況 出土量は微量である。北東床面から甕が出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器甕1点である。胎土に雲母及び砂粒を多量に含んでおり、常陸型甕である。体部外面はヘラケズリ後ハラミガキが施される。甕のみのため時期を特定するのは難しいが、本堅穴は8世紀代と考えられる。



第74図 (11)SI014

(12)SI001(第75図、図版14)

位置・形態 N44-41グリッドを主体に検出された。南側の大部分と東壁の一部が攪乱を受けているほか、全体に堅穴の遺存状態は悪い。平面の形態は方形を呈し、4.7m×4.5mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-20°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁16cm、西壁8cm、南壁6cm、東壁9cmである。

覆土 覆土の堆積は浅い。暗褐色土を主体とし、粘性が強い。

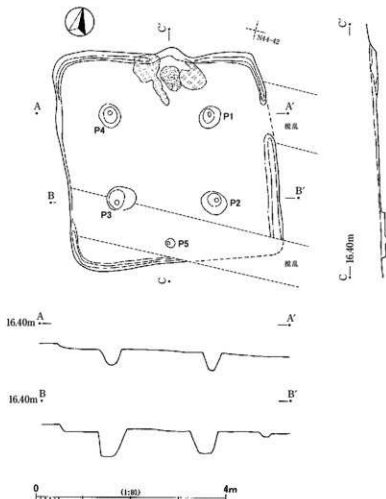
施設等 ビット5基と周溝、カマドが検出された。P1~P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が36cm、P2が48cm、P3が56cm、P4が33cmである。南壁近くのP5は深さが10cmあり、入口の梯子ビット考えられる。周溝は西壁の中央部分を除いて巡っている。カマドの遺存状態は悪く、カマド構築材の粘土が周囲に散らばっている。煙道部の張り出しは小さい。火床部は良く焼けていた。

遺物出土状況 出土量は少なく、図示できる遺物はなかった。堅穴の形態や他の堅穴の配置状況から9世紀代の可能性が高いと考えられる。

(15)SI001(第76図、図版14)

位置・形態 K44-19グリッドを主体に検出された。南側の大半と南北方向に走る水道管の敷設工事によって攪乱を受けている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は他の堅穴住居跡と比較して大きく、遺存している東西方向で6.1mを測る。主軸方位はN-18°-Eと推定される。検出面から床面までの深さは、北壁18cm、西壁27cm、東壁14cmである。

覆土 覆土はほとんど失われていた。



第75図 (12)SI001

施設等 ビット2基と周溝が検出され、北側のカマドは攪乱により失われていると推測される。P1・P2は規則的に配列され、柱穴の可能性が高いと考えられる。床面からの深さはP1が32cm、P2が84cmである。遺存した範囲では周溝は確認された。

遺物出土状況 遺物が出土しなかったため、時期は特定できないが、8世紀前半の周辺堅穴群の主軸方位と類似することから、本堅穴の時期は8世紀代の可能性が高い。

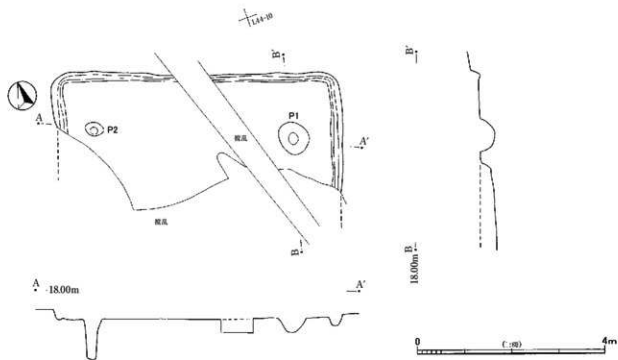
(15)SI002(第77図、図版14・30)

位置・形態 L44-40グリッドを主体に検出された。南側の大半は調査区外となり、堅穴の北西コーナー部分が僅かに検出された程度である。平面の形態は方形であろう。規模は検出している東西方向ではおよそ4.0m程度であろう。主軸方位はN-13°-Eである。検出面から床面までの深さは他の堅穴と比較して深く、北壁61cmである。

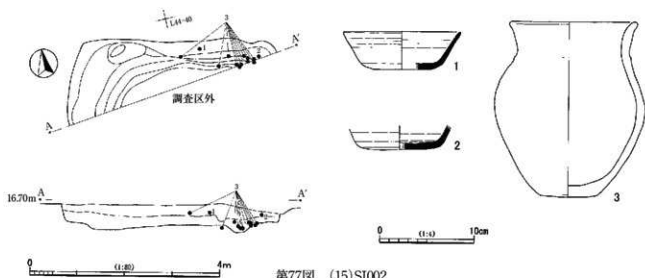
覆土 暗褐色土を主体とし、炭化材及び焼土を少量混入する。良く締まっている。

施設等 周溝が検出された。カマドの痕跡が確認できなかったことから、隅カマドの可能性もあるだろう。

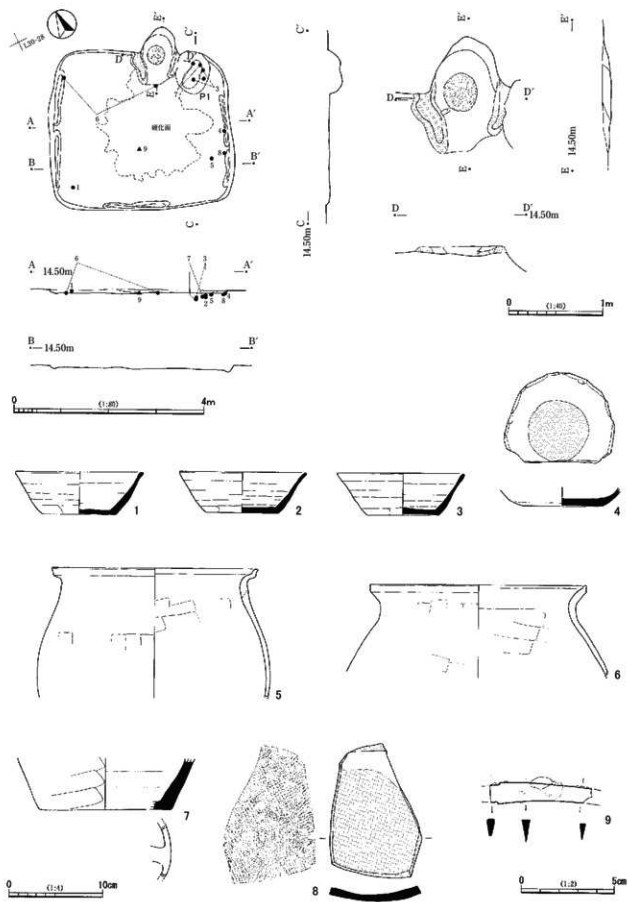
遺物出土状況 出土量は少ない。北東コーナーの周溝上でまとも出土している。遺物のほとんどは覆土中から出土している。



第76图 (15)SI001



第77图 (15)SI002



第78图 (16)SI031

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏2点、土師器甕1点である。1・2は須恵器坏である。2は厚手の作りである。3の土師器甕は、口縁部ヨコナデされ、胴部調整との境が明瞭な稜線となっている。器面は摩滅が著しく、胴部の調整は不明瞭である。本堅穴の時期は8世紀第4四半期と考えられる。

(16)SIO31(第78図、図版14・30・31)

位置・形態 L30-28 グリッドを主体に検出された。堅穴は小規模で、平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、3.9m×3.5mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-28°-Eである。堅穴の掘り込みが辛うじて残っており、検出面から床面までの深さは北壁6cm、西壁7cm、南壁11cm、東壁8cmである。

覆土 覆土が非常に浅く、記録を取れなかった。

施設等 ビット1基と周溝、カマドが検出された。P1はカマドの側に位置し、貯蔵穴と考えられる。床面からの深さは20cmである。周溝は東西と南壁の中央部分で検出された。カマドは大部分が失われており、遺存状態は悪い。袖部は確認できた。煙道部の張り出しは大きく、火床部は良く焼けていた。堅穴の床面中央が硬化していた。

遺物出土状況 出土量はやや多かった。北東の貯蔵穴周辺及び貯蔵穴内からまとまって出土している。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏4点・甕1点、土師器甕2点、甕の破片を利用した転用硯1点、刀子1点である。1～3は須恵器坏である。いずれも胎土に砂粒と雲母を多く含み、新治産と考えられる。底部はヘラ切り後、手持ちヘラケズリが施される。4は須恵器坏で1～3の坏とは趣を異にし産地が異なるようである。内面に明瞭な研磨面があり、縁辺は形態を整えるための打ち欠きが行われており、転用硯と考えられる。底部は回転ヘラケズリが施される。5・6は甕である。いずれも胎土に砂粒と雲母を多く含み、常陸産と考えられる。7は須恵器甕である。胎土に砂粒と雲母を多く含む。体部外面はヘラケズリ調整が施される。8は須恵器甕の胴部破片で内面が平滑になっていることから転用硯と考えられる。9は鉄製刀子である。出土遺物から、本堅穴は8世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。

第6章 中・近世の遺構と遺物

第1節 概要

検出された遺構のほとんどは、中世後半期以降と考えられる。一部には、近世前期の可能性が高い遺構が含まれている。遺構の種類としては、地下式坑20基、土坑墓1基、土坑17基、井戸7基、溝状遺構28条などが検出されている。このほか、ピット群が2か所検出されているが、詳細な時期が不明のため本節に含めることとした。また、中世の台地整形区画とみられる遺構が1か所発見されている。遺構の性格は異なるものの、調査地点ごとに遺構群としてのまとまりがあることから、各調査次順で詳述する。

主な中・近世遺構群のまとまりは、台地の最も標高が高く平地となった(8)や(16)などの調査地点のほか、(11)の南緩斜面などから限定した範囲で中世遺構群が検出されている。溝状遺構は、屋敷地の区画溝とみられるものが主で、地境溝や道路の側溝とみられるものの方が少ない。地下式坑なども屋敷地などの居住域内の遺構群として捉えることができるであろう。

第2節 地下式坑・土坑・井戸・その他

(5)SK013(第79図、図版15)

M43-70グリッドに位置する。周辺に中世遺構はなく単独の検出である。平面形は隅丸長楕円形を呈する。検出面の規模は長軸長1.47 m、短軸長0.84 m、検出面からの深さは0.24 mである。覆土は黒褐色土を主体としている。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SK014(第79図、図版15)

M42-60グリッドに位置する。平面形は円形を呈すると考えられる。検出面の規模は直径2.98 mで、検出面からの深さは1.15 mと深い。底面は平らである。覆土は暗褐色土を主体としている。底面近くでは焼土が若干堆積していた。出土遺物が微量あったものの、詳細な時期を特定することは難しい。

(5)SK020(第79図、図版15)

L42-89グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、底面もほぼ相似形を呈している。(5)SD003が表層を壊しており、本土坑の方が古い。底面の規模は長辺3.00 m、短辺2.15 m、検出面からの深さは0.92 mである。土坑の断面はフラスコ状を呈する。底面は平らである。覆土は黒褐色土を主体としている。

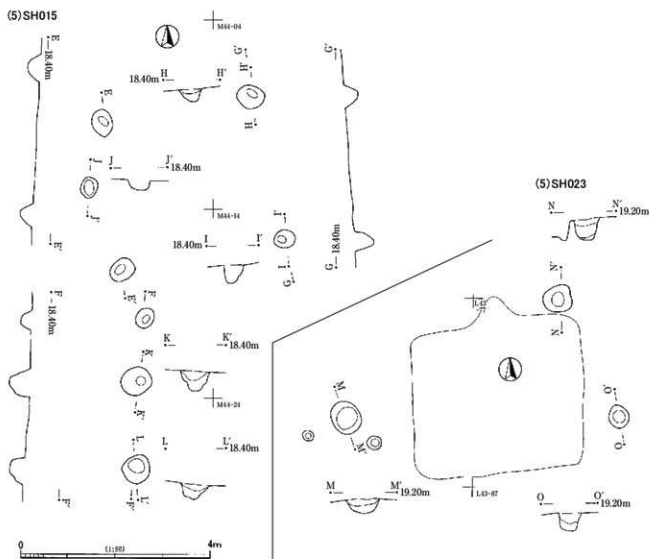
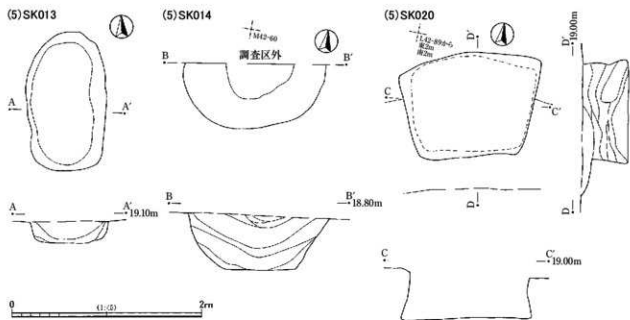
出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SH015(第79図、図版21)

M44-13グリッドに位置する。ピット群である。(5)SI009の堅穴住居跡に隣接するが、関連性はないと思われる。覆土の状態から中世までの時期のピットと思われるが、出土遺物はなく詳細な時期は不明である。8個のピットは規則性のある柱列にはなっていない。検出面からの深さは、浅いもので0.21 m、最も深いもので0.44 mあり、深さにバラツキがあり一つの遺構の存在を示唆するものではなさそうである。

(5)SH023(第79図)

L43-77グリッドに位置する。ピット群である。(5)SI005の堅穴住居跡に隣接するが、関連性はないと思われる。覆土の状態から中世までの時期のピットと思われるが、出土遺物はなく詳細な時期は不明である。検出面からの深さは、浅いもので0.26 m、最も深いもので0.47 mあり、深さにバラツキがある。



第79図 (5)SK013・(5)SK014・(5)SK020・(5)SH015・(5)SH023

(8)SK100(第80図、図版15)

J42-19グリッドに位置する。約半分が調査区外である。底面までの深さが相当にあり危険なため完掘するのを断念した。隣接する(14)SK001に類似するT字状を呈する地下式坑と推測される。北側が入口部とみられ、内部は抉り込まれて天井部が遺存している。天井部は崩落していると考えられる。覆土は底面近くにおいて暗褐色土を主体とし、後から黒褐色土が内部に流入している。入口の竪坑規模は径1.60m、室内規模は一辺約3.30m、検出面からの深さは1.48mである。出土遺物はないが、中世の地下式坑であろう。

(8)SK101(第80図、図版15)

J42-74グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、南西側に入口部を伴うようである。主室の規模は底面で長軸長2.40m、短軸長1.89m、検出面からの深さは0.86mである。天井部は崩落していると考えられる。室内の壁はほぼ直に立ち上がっている。底面の規模も検出面規模と同様である。底面は平らである。出土遺物はないが、中世の地下式坑であろう。

(8)SK102(第80図、図版15)

J42-76グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。(8)SK103と隣接しているが、直接の関連はないと考えられる。平面形は長方形を呈する。底面の規模は長軸長2.52m、短軸長1.28m、検出面からの深さは1.30mである。天井部は崩落していると考えられる。入口部が確認できておらず、北側が若干開いていることから、入口部であったのかもしれない。出土遺物はなかった。

(8)SK103(第80図、図版16・33)

J42-76グリッドに位置する。中世の地下式坑と考えられる。(8)SK102と隣接しているが、直接の関連はないと考えられる。平面形は長方形を呈する。底面の規模は、長軸長1.98m、短軸長1.41m、検出面からの深さは1.80mである。天井部は崩落していると考えられる。東壁側が入口部と考えられ、若干の足掛け状の突出がある。出土遺物は、瓦質の播鉢が2点出土しており、1点を図化できた。1は播鉢の底部片で、内面には8本単位の播り目が施される。

(8)SK104(第80図、図版16)

J42-68グリッドに位置する。中世の地下式坑と考えられる。(8)SK108などと隣接している。平面形は長方形を呈すると考えられる。底面の規模は長軸長2.60m、検出面からの深さは1.62mである。天井部は崩落していると考えられる。入口部は確認できていないが、東側が入口部の可能性が高い。出土遺物はなかった。

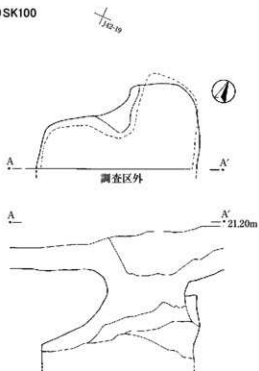
(8)SK105(第81図、図版16)

J42-18グリッドに位置する。中世の地下式坑と考えられる。約半分が調査区外である。検出面は楕円形を呈するが、底面は長方形を呈すると考えられる。底面の規模は短軸長1.76m、検出面からの深さは2.00mである。天井部は崩落していると考えられる。覆土は暗黄褐色土を主体とし北壁側からの流入を示していることから、出入口部は北壁側の若干の突出部分と考えられる。出土遺物はなかった。

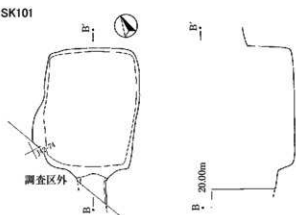
(8)SK106(第81・109図、図版16・33・41)

J42-05グリッドに位置する。埋葬人骨が検出された唯一の土坑墓である。東側が若干削平を受け失われている。検出面は長方形を呈する。長軸長1.02m、短軸長0.78m、検出面からの深さは0.14mである。人骨は土葬されたもので、頭蓋骨の一部と大腿骨の一部のみ検出された。北隅に頭部を置き、西向き横臥屈葬されたものと推測される。人骨の遺存状態が悪く、性別や年齢については分析不能である。土坑の規

(8)SK100



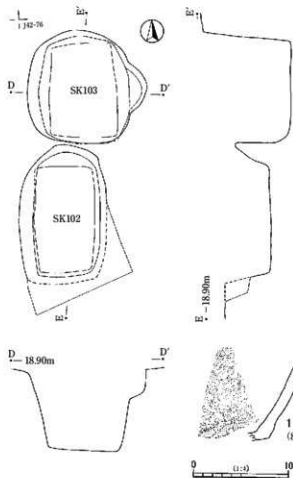
(8)SK101



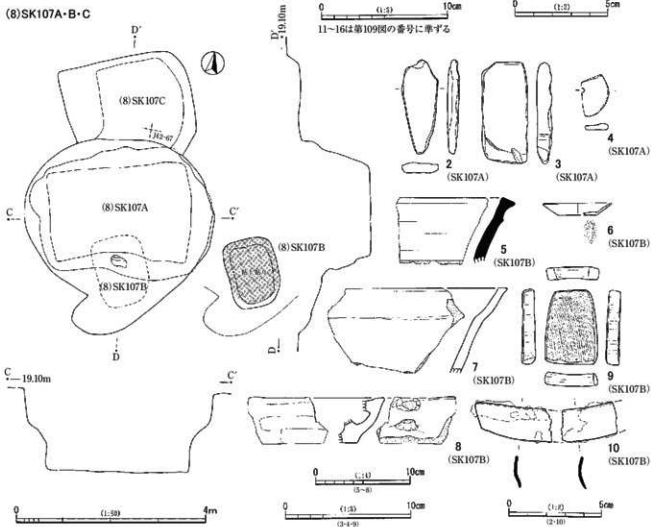
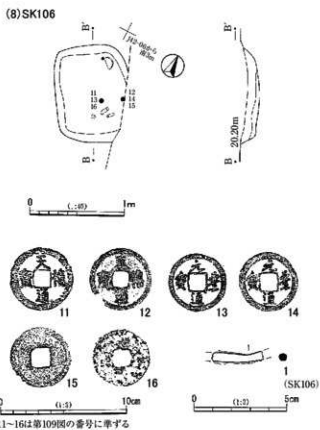
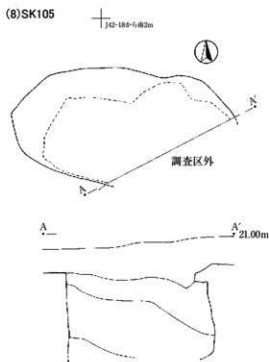
(8)SK104



(8)SK102·103



第80图 (8)SK100 · (8)SK101 · (8)SK102 · (8)SK103 · (8)SK104



第81図 (8)SK105・(8)SK106・(8)SK107A・(8)SK107B・(8)SK107C

模から子供の埋葬墓と推測される。六文銭として副葬された6枚の銭のほか器種不明の鉄製品が出土している。腹部位置の左右から3枚がまとまって出土しており、埋葬時に3枚ずつに分けられたか、あるいは遺体の上に置かれたものがたまたま左右に分かれて落ちたのかもしれない。出土遺物は、銭以外にはなかった。銭文が確認できるのは6枚中4枚で、天喜通寶2枚、元豊通寶2枚である。いずれも北宋銭であることから、中世後期の土坑墓と考えられる。

(8)SK107A(第81図、図版16・33)

J42-66グリッドに位置する。3基の土坑が重複しているが、関連性はなく(8)SK107B→(8)SK107A→(8)SK107Bの順に構築されたものと考えられる。本土坑は、地下式坑である。検出面は楕円形を呈するが、主室は長方形の底面で、壁はほぼ直に立ち上がっている。底面の規模は長軸長2.96m、短軸長1.80m、検出面からの深さは1.73mあり、規模の大きな地下式坑である。天井部は崩落していると考えられる。南側が入口部と考えられ、南壁中段に足掛け用の挟り込みが確認された。

出土遺物は、2の剣形の石製品、3の砥石、4の用途不明の有孔円形土製品など僅かであった。

(8)SK107B(第81図、図版16・33)

J42-66グリッドに位置する。(8)SK107Aの調査中に覆土内から、粘土貼土坑が検出された。遺物も豊富に出土している。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.46m、短軸長1.06m、検出面からの深さは0.41mである。底面から壁にかけて白色の粘土が貼られており、いわゆる粘土貼土坑である。底面は平らで、覆土は黒褐色土で炭化材、炭化物を若干含む。

出土遺物は多く、6点を図化することができた。5は須恵器の甕である。6は小型のかわらけで、口径7.4cm、底径4.0cm、器高1.25cmを測る。非常に薄く作られており、近世の所産であろう。7は内耳土器である。内耳部は見られないが頸部でくの字に屈曲する器形を持つ。内外面とも灰色を呈し、還元焼成で焼かれている。15世紀後半の所産と思われる。8は内耳焙烙で、内耳は欠損している。胎土には金雲母を含んでいる。近世の所産であろう。9は陶器片を再利用した製品である。捕鉢片の周縁を丁寧に磨いて、長方形に作り出している。掘り目は内面全面に施されており、近世の所産と思われる。10は鉄製品で、摘鎌であろうか。

(8)SK107C(第81図)

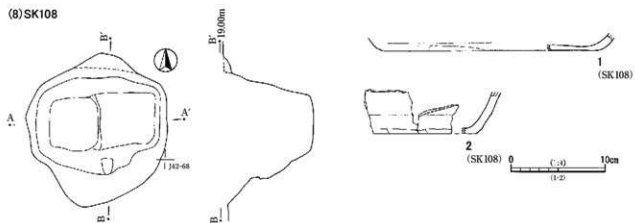
J42-56グリッドに位置する。(8)SK107Aに南側が壊されている。平面形は長方形を呈すると考えられる。検出面の規模は長軸長2.62m、検出面からの深さは0.24mである。底面は平らである。出土遺物はなかった。

(8)SK108(第82図、図版16・33)

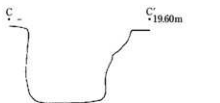
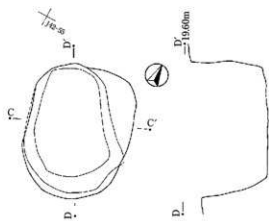
J42-57グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。検出面の平面形は不定形だが、底面は長方形で、底面中央に若干の段差がある。底面の規模は長軸長2.19m、短軸長1.18m、検出面からの深さは2.08mである。天井部は崩落していると考えられる。一段低い底面は、正方形で一辺約1.10mである。入口部は南壁の可能性があり、壁面中段に足掛け用と思われる凹みがある。

出土遺物は、2点図化することができた。共に内耳土器の底部である。1は平底で、底径23.6cmに復元できた。体部外面には、煤の付着が認められる。2も平底で、体部外面には煤が付着する。2は鍋かと思われるが、1は鍋か焙烙かは判然としない。

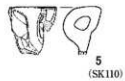
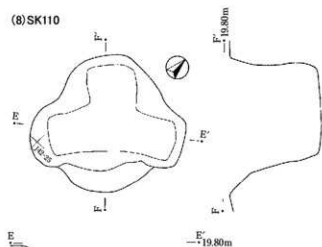
(8)SK108



(8)SK109



(8)SK110



第82图 (8)SK108 · (8)SK109 · (8)SK110

(8)SK109(第82図、図版17・33)

J42-55グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。平面形は不整楕円形を呈する。底面も同様で平らである。底面の規模は長軸長2.29m、短軸長1.50m、検出面からの深さは1.63mである。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。出入口部の位置は不明。

出土遺物は1点図化できた。3は内耳土器の底部で、底径25.0cm、現存器高2.5cmに復元できた。鍋か焙烙かは不明である。

(8)SK110(第82図、図版17・33)

J42-15グリッドに位置する。平面形はT字状を呈し、特異な地下式坑である。隣接する(8)SK111が類似している。底面の規模は北西方向で2.20m、北東方向で2.72m、検出面からの深さは2.00mあり、いたって深い。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。南東壁が上位で開き気味であることから、この部分が出入口部の可能性がある。

出土遺物は、2点図化できた。4は内耳土器の口縁部で、頸部でくの字に屈曲する。5は内耳土器の内耳部である。2点とも鍋と考えられ、外面に煤の付着が認められる。15世紀後半代のものと思われる。

(8)SK111(第83図、図版17)

J42-47グリッドに位置する。平面形はT字状を呈し、特異な地下式坑である。隣接する(8)SK110が類似している。底面の規模は北西方向で2.05m、北東方向で2.80m、検出面からの深さは1.90mといたって深い。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。南東壁が上位で開き気味であることから、この部分が出入口部の可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

(8)SK112(第83図、図版17)

J42-34グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。平面形は隅丸長方形を呈する。底面の規模は長軸長2.22m、短軸長1.38m、検出面からの深さは2.46mである。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平らである。南東壁に足掛け状の凹みが確認されているほか、底面には円形の凹みがある。出土遺物はなかった。

(9)SX009(第83図、図版21)

L44-32～L44-38グリッドに位置する。南面する斜面を造成した、いわゆる台地整形区画と考えられる。東西25m以上の規模と推測されるが、調査区境にあたり発掘に至っていない。西側約10m程度が確認できたに過ぎない。また、南北方向の奥行きが5m程度しかないことから、さらに南側に広がっていた遺構が、南側の市道によって失われたと考えられる。北側壁に沿って溝が確認されている。このほかには、土坑などは確認されなかった。また、遺構の時期を特定する遺物は出土していない。

(10)SK004(第84図、図版17・33)

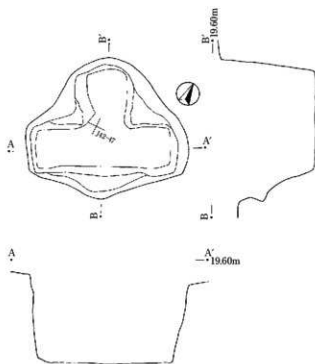
O44-06グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈する。検出面の規模は長軸長1.58m、短軸長0.89m、検出面からの深さは0.28mである。底面は平らである。覆土は黒色土を主体としている。

出土遺物は、土師質土器が出土している。

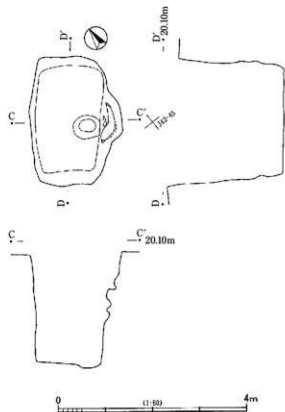
(10)SK023A・B・C(第84図)

O44-35グリッドを主体に位置する。3連の地下式坑と考えられ、3室がL字状に配置され、トンネルで連結されている。平面形はいずれも長方形を呈するが、規模は多少異なっている。検出面の規模は、Aが長軸長3.20m、短軸長2.22m、検出面からの深さは1.77mである。Bは長軸長1.90m、短軸長1.72m、検

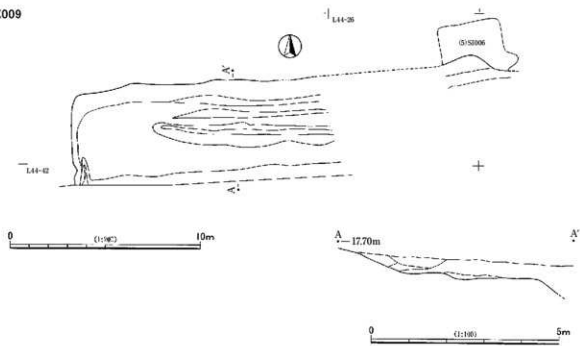
(8)SK111



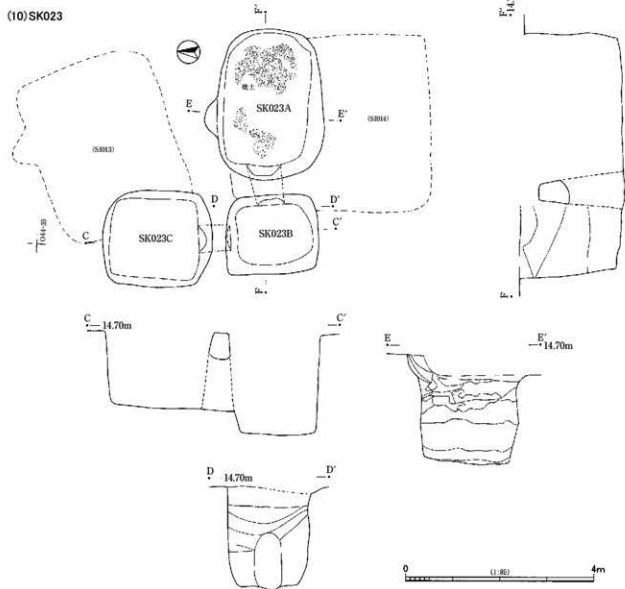
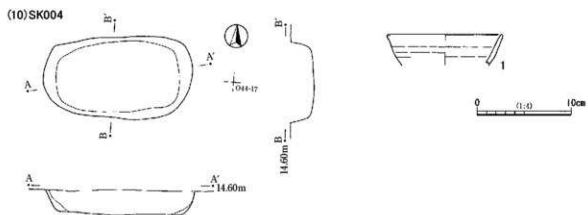
(8)SK112



(9)SX009



第83图 (8)SK111 · (8)SK112 · (9)SX009



第84图 (10)SK004 · (10)SK023

出面からの深さは245mである。Cは長軸長2.22m、短軸長1.68m、検出面からの深さは1.67mである。いずれも天井部が崩落していると考えられる。覆土は暗褐色土を主体とし、灰白色粘土のブロックが全体に混入している。各室をつなぐトンネルの大きさは、B・C間で高さ1.22m、幅0.56mあり、充分に人が通過することができる。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(11)SK005A(第85図、図版18)

I44-48グリッドに位置する。(11)SK005Bとの新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.28m、短軸長0.82m、検出面からの深さは0.28mである。覆土は暗褐色土を主体とし、焼土が若干混入している。底面は平らである。出土遺物はなかった。

(11)SK005B(第85図、図版18)

I44-48グリッドに位置する。(11)SK005Aとの新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形を呈する。検出面の規模は一辺1.05m、検出面からの深さは0.05mである。覆土は暗褐色土を主体とし、底面は平らである。出土遺物はなかった。

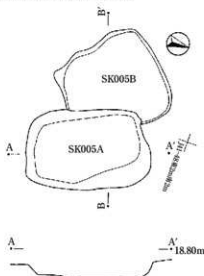
(11)SK007A(第85図、図版18)

I44-44グリッドに位置する。(11)SK107Bとの新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.64m、短軸長1.02m、検出面からの深さは0.32mである。覆土には若干の焼土が混入していた。底面は平らである。出土遺物はなかった。

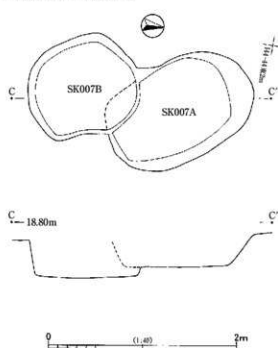
(11)SK007B(第85図、図版18)

I44-44グリッドに位置する。(11)SK107Aとの新旧関係は不明である。平面形は歪んだ方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.18m、短軸長1.00m、検出面からの深さは0.34mである。覆土には若干の焼土が混入していた。底面は平らである。出土遺物はなかった。

(11)SK005A・(11)SK005B



(11)SK007A・(11)SK007B



第85図 (11)SK005A・(11)SK005B・(11)SK007A・(11)SK007B

(14)SK001(第86図、図版18・32)

K42-20グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。平面形は長楕円形を呈し、北側は調査区外で完掘できていないが、中央部北側に突出部があり、平面形がT字状を呈する可能性があり、北側が出入口部と考えられる。底面の規模は長軸長4.35m、短軸長0.75m、検出面からの深さは1.85mで、規模の大きな地下式坑である。

天井部は崩落していると考えられる。底面には中央に低い部分があり、左右の底面が一段高くなっている。段差は0.22mである。壁はほぼ直に立ち上がっている。

出土遺物は、覆土から土製の鉢が1点出土している。鉢は楕円状の器形をとるが掘り目は見られず、常滑の片口鉢を模した物と思われる。胎土は金雲母を含んでおり、内耳土器と同一産地の可能性が考えられる。内面には使用された痕跡が見られ、軟質なものであるが、常滑の片口鉢と同様の使われ方をした物と思われる。

(14)SK004(第86図、図版18・33)

J43-49グリッドに位置する。平面形は不整形を呈する。底面の規模は長軸長5.06m、短軸長3.72m、検出面からの深さは1.26mで、規模の大きな地下式坑である。天井部は崩落していると考えられる。底面の南側に突出部があり、入口部の可能性が高い。覆土から多量の遺物が出土している。

出土遺物は、7点図化した。2は志戸呂の天目茶碗である。口径16.0cm、底径6.0cm、器高6.1cmに復元された。削り出し高台で、体部内外面は鉄軸、体部下端は鉄化粧が施される。3は古瀬戸の祖母壺で、口径11.2cmを測る。古瀬戸後期IV新にあたる。4は古瀬戸の平碗である。底部が遺存する。高台は貼付け高台で、底径は5.6cmである。古瀬戸後期Iにあたる。5は常滑片口鉢である。6・7は土製の楕円鉢である。共に内面には使用痕が認められる。15世紀代のものであろう。8は転用砥石である。常滑甕の肩部片を再利用している。表面及び断面に使用痕が認められる。

(14)SE003(第87図、図版18・33)

J42-96グリッドに位置する。井戸である。内径は1.00mで、底面が2mを超えるため完掘は断念した。周辺が一段低くなっており、掘削時に掘られたものか、あるいは一段低くなった井戸端に降りていくための通路であったのかもしれない。井戸内から遺物が出土している。

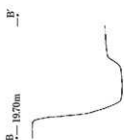
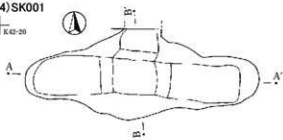
出土遺物は、5点図化することができた。1～3はカワラケである。1は口径12.0cm、底径5.6cm、器高3.0cm。2は口径11.0cm、底径5.4cm、器高2.6cm。3は口径11.0cm、底径4.8cm、器高2.8cmを測る。これらは内外面が磨減しているが、ロクロ成形後回転糸切を行い、見込をナデている。4は古瀬戸の折縁深皿である。古瀬戸後期IV古にあたる。5は常滑の片口鉢である。

(15)SK004(第87図、図版19・33)

J44-00グリッドに位置する。北側コーナーが攪乱されている。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は、長軸長2.46m、短軸長1.92m、検出面からの深さは0.54mである。覆土は黒褐色土を呈し、焼土を若干含んでいた。覆土からカワラケが出土しており、土坑墓の可能性もある。

図示できた出土遺物は、6の瀬戸の緑釉小皿1点である。約60%遺存し口径11.6cm、底径5.0cm、器高2.2cmである。

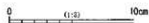
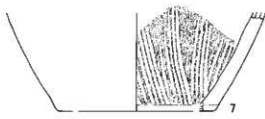
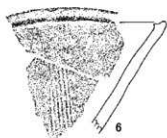
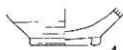
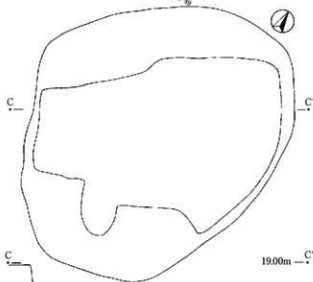
(14)SK001



A—19.70m

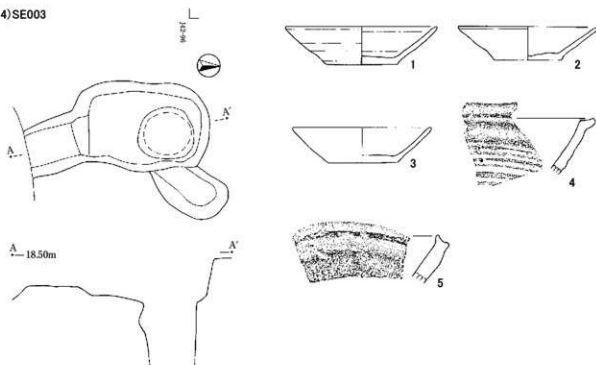


(14)SK004

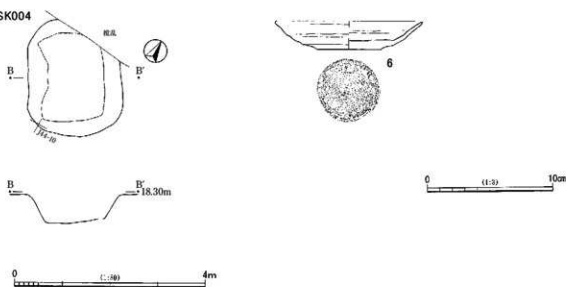


第86图 (14)SK001 · (14)SK004

(14)SE003



(15)SK004



第87図 (14)SE003・(15)SK004

(16)SE002(第88図、図版21)

K43-21グリッドに位置する。井戸である。内径は1.35mで、底面が2mを超えるため完掘は断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。周辺が一段低くなっており、掘削時に掘られたものか、あるいは一段低くなった井戸端に降りていくための通路であったのかもしれない。出土遺物はなかった。

(16)SK003(第88図、図版19・34)

K43-38グリッドに位置する。攪乱が顕著なため発掘できていないが、平面形は楕円形を呈すると推測される。検出面からの深さは0.49mである。覆土は暗褐色土を主体としている。覆土中から遺物が出土している。

出土遺物は、2点図化できた。1は瀬戸の天目茶碗である。約20%遺存しており、口径12.0cmに復元できた。内外面に鉄軸がかり、体部下端は露胎である。大窯1にあたろう。2は常滑片口鉢である。約10%程遺存しており、口径26.0cmに復元できた。内面には使用痕が認められる。11型式にあたろうか。

(16)SK004(第88図、図版19)

K42-89グリッドに位置する。平面形はT字状を呈し、特異な地下式坑である。(8)SK110・(8)SK111に類似している。底面の規模は北西方向で2.80m、北東方向で1.74m、検出面からの深さは1.59mといたって深い。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。(8)SK110などと同様であれば、南東壁側が出入口部の可能性がある。出土遺物はなく時期は不明である。

(16)SK005(第88図、図版19)

K43-18グリッドに位置する。円形土坑が3基連なっており、何らかの施設跡の可能性が高い。底径の大きさは、1.00m～1.28mあり類似している。3基の土坑に囲まれた中央にはドーナツ状の溝が巡っている。隣接してT字状の溝(16)SD033が位置しており、関連した施設なのかもしれない。出土遺物はなかった。

(16)SE008(第88図、図版19)

K42-70グリッドに位置する。井戸である。内径は0.90mで、1.20mを超えた時点で湧水があり発掘を断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。出土遺物はなかった。

(16)SK009(第89図、図版19・34)

J42-69グリッドに位置する。地下式坑である。底面は隅丸長方形を呈する。底面の規模は、長軸長2.40m、短軸長1.46m、検出面からの深さは2.10mである。天井部は崩落しており、暗褐色土を主体とする覆土には天井部の崩落土が確認できた。壁はややオーバーハンクしている。入口部は不明。覆土から遺物が出土している。

出土遺物は、4点図化できた。1は土製の播鉢で、底部から体部にかけ15%程遺存している。底径は11.0cm、内面に9本単位の播目が見られる。2は瀬戸播鉢の破片である。播目は見られないが、内外面に錆軸が施される。なお上面の割れ口は擦られている。3は土製播鉢の片口部である。1と胎土、色調が似ている。同一個体、あるいは同一産地と思われる。1・3とも、15世紀代のものであろう。4は砥石である。全長9.2cm、幅2.8cm、厚さ2.2cmで、全面擦られている。

(16)SE011(第89図、図版34)

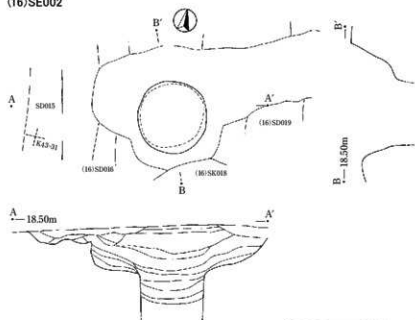
K43-34グリッドに位置する。井戸である。(16)SE012と隣接している。内径は1.80mで、底面は1mを超えた時点で湧水があり発掘を断念した。規模の大きな井戸である。覆土の崩落が激しく土層断面を残しておけなかったため図示できないが、(16)SE012の方が新しい。

出土遺物は少なく、図示できたのはカワラケ2点である。共に底部片で、5は底径5.0cm、6は底径6.0cmを測る。5は見込にナアを行っている。

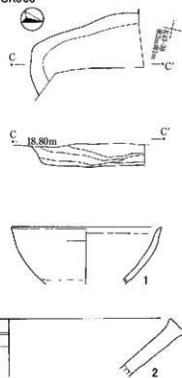
(16)SE012(第89図、図版32・34)

K43-44グリッドに位置する。井戸である。(16)SE011と隣接している。内径は0.90mで、底面は1.00m

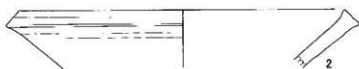
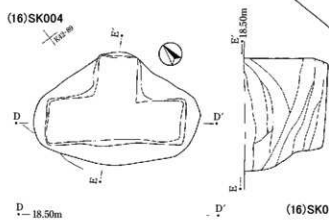
(16)SE002



(16)SK003

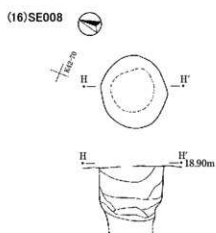


(16)SK004

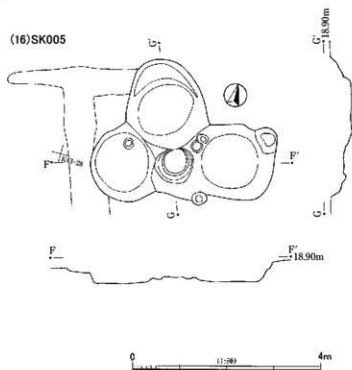


0 10m

(16)SE008



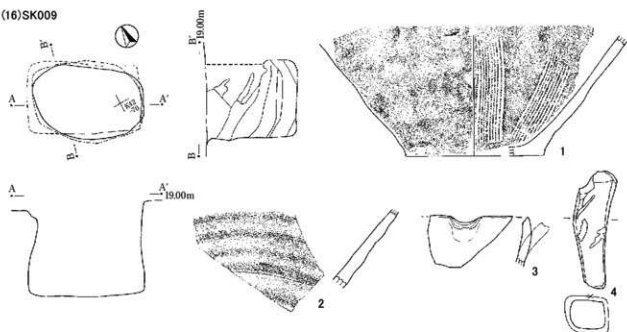
(16)SK005



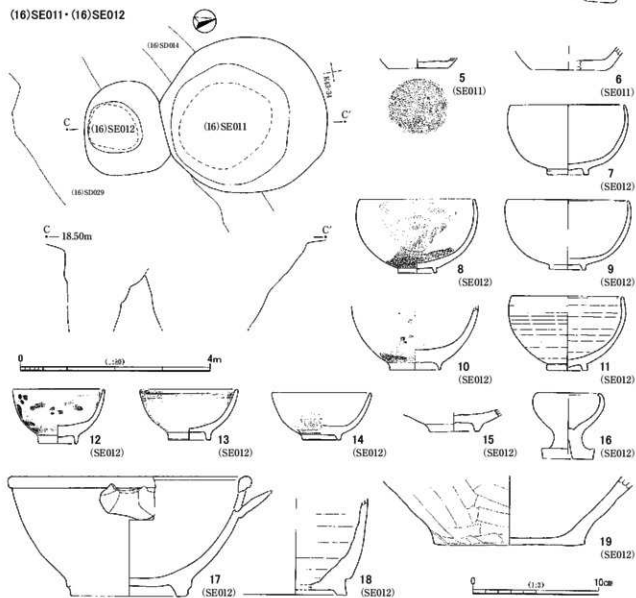
0 4m

第88图 (16)SE002 · (16)SK003 · (16)SK004 · (16)SK005 · (16)SE008

(16)SK009



(16)SE011 · (16)SE012



第89图 (16)SK009 · (16)SE011 · (16)SE012

を超えた時点で湧水があり完掘を断念した。覆土の崩落が激しく、土層断面を残しておけなかったため図示できないが、(16)SE011の方が古い。

出土遺物は多量に出土している。7～9・11は陶器の碗、10・12～15は磁器碗である。16は陶器のひょう燭。17は陶器片口鉢。18は壺である。19は常滑片口鉢である。19以外は近世前期の遺物であることから、遺構の時期は近世前期と判断される。

(16)SK013(第90図、図版19)

K43-42グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。検出面の規模は直径約1.30m、検出面からの深さは1.24mである。覆土は暗褐色土を主体としている。出土遺物はなかった。

(16)SK017(第90図、図版20・34)

K43-41グリッドに位置する。地下式坑の可能性が高いが、相当に深く、井戸の可能性もある。深さが2mを超えるため、途中で完掘を断念した。平面形は楕円形を呈すると思われる。検出面の規模は、長軸長4.50mである。覆土は暗褐色土を主体とし、中位層では灰白色の粘土を多量に含んでいた。覆土中から遺物が出土している。

出土遺物は2点図化できた。1は古瀬戸の平碗で、内外面に灰釉がかかる。古瀬戸後期Ⅲにあたろう。2は常滑片口鉢で、底部が10%遺存している。底径は10.0cmで、内面には使用痕が見られる。

(16)SE021(第90図、図版21・34)

J43-66グリッドに位置する。井戸である。(16)SD024と重複し、(16)SD024の溝に上層部が壊されている。1mを超えた時点で湧水があり、完掘を断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。内径は1.25mである。壁はほぼ直に立ち上がる。覆土内から遺物が出土している。

3は陶器碗で内外面に鉛釉が施される。4は磁器の碗。共に近世の所産であろう。5は古瀬戸の折縁深皿で、底部が遺存する。古瀬戸後期Ⅲにあたろう。6は常滑の片口鉢で、底部が遺存する。7は砥石で、全体に擦られている。

(16)SE022(第90図、図版20・34)

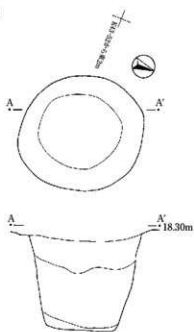
J43-26グリッドに位置する。井戸である。内径は1.80mで、1mを超えた深さで湧水があり完掘を断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。覆土内から土器が1点出土している。8は陶器の鉢である。底部が10%遺存し、外面に鉄釉の流れが見られる。近世の所産であろう。

(16)SK018(第91～95図、図版20・32・34・35・37)

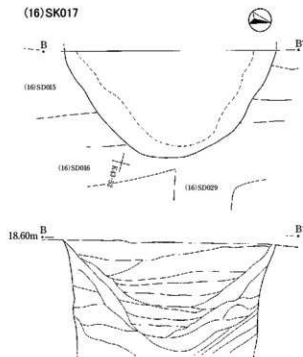
K43-29グリッドに位置する。検出面形は長楕円形を呈し、中央北側が突出している。底面は2辺が長い長方形を呈する。長軸の検出面の規模は、8.30mある。底面に至る壁は緩傾斜で、底面近くで、より深い長方形の掘り込みとなっている。底面は2段になっており東側に約5cmの一段高い面がある。最も低い底面の規模は、長軸長5.20m、短軸長0.65m、検出面からの深さは1.54mである。また、一段高い東側の底面は長軸長1.68m、短軸長1.60mである。北壁の中央に6段の小規模な階段と思われる段が削り出されている。

覆土は暗褐色土を主体とし、底面の掘り込み部分には、鉄分を含む砂分の多い覆土が堆積し、その中から加工痕を明瞭に伴わない棒状の木材や板碑、常滑、内耳鍋、搦鉢、カワラケ、石臼、砥石、陶磁器転用砥石、スラグなど雑多な遺物が出土している。底面近くの覆土には水分が多かったことから、木材等の有機質の遺物が保存されたと考えられる。四方の壁の傾斜が緩く開きが大きいことや検出面からの深さが約

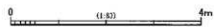
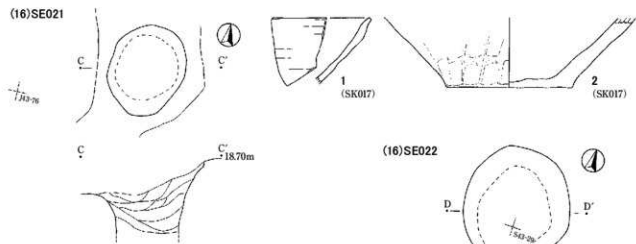
(16)SK013



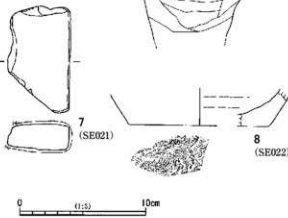
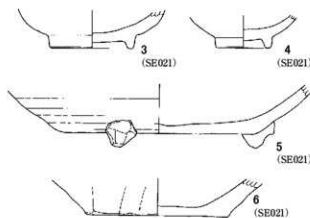
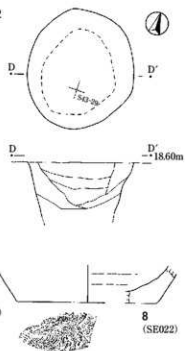
(16)SK017



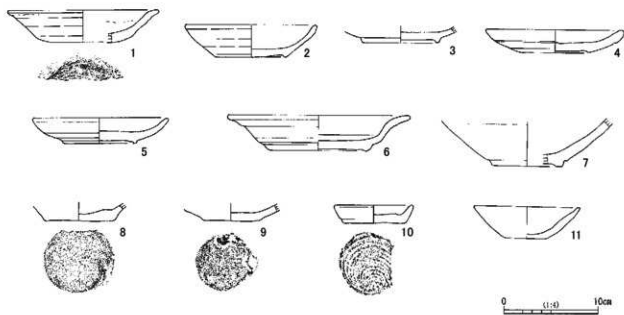
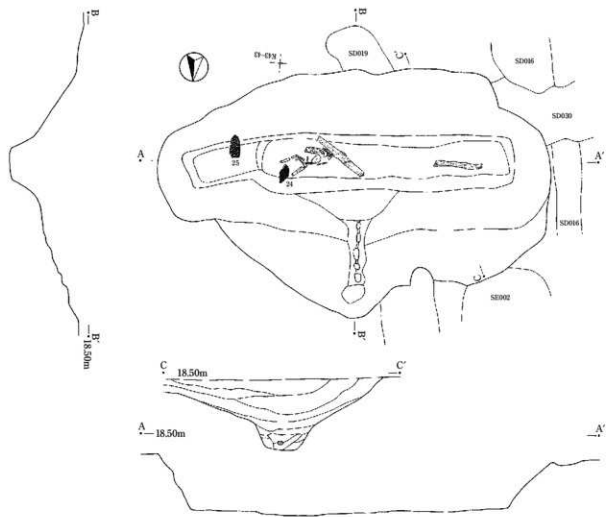
(16)SE021



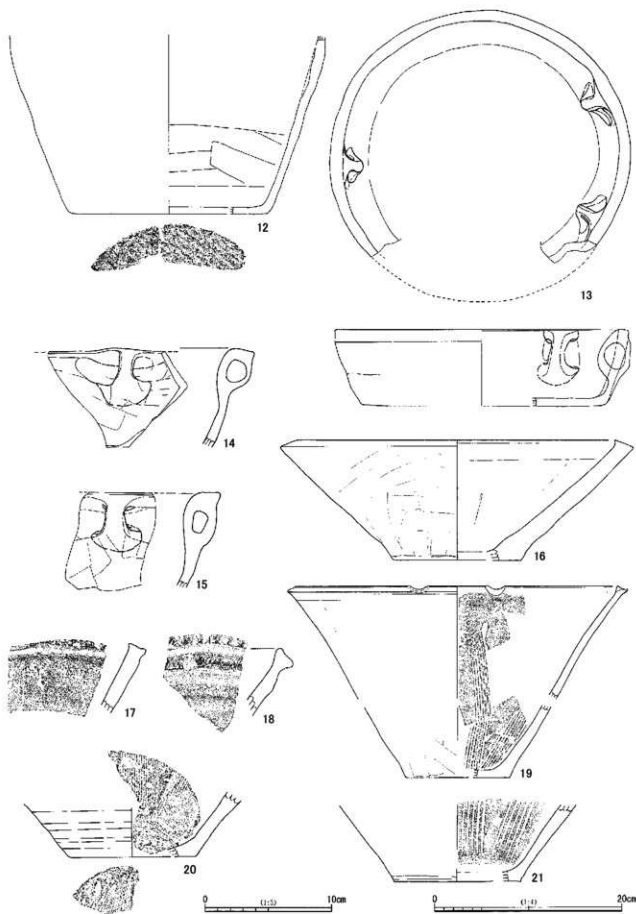
(16)SE022



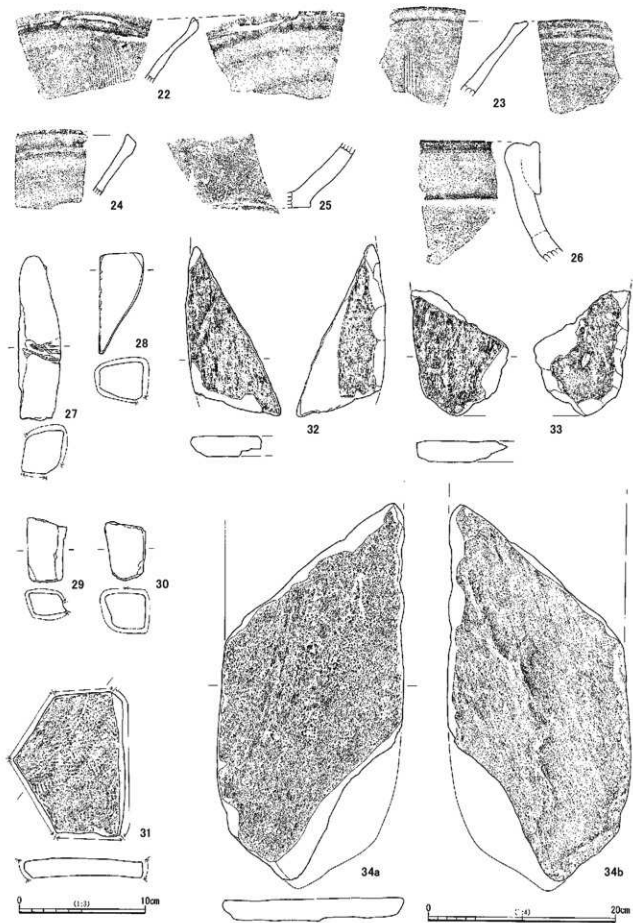
第90图 (16)SK013 · (16)SK017 · (16)SE021 · (16)SE022



第91図 (16)SK018(1)



第92図 (16)SK018(2)



第93图 (16)SK018(3)

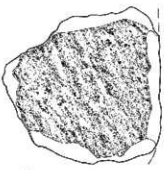
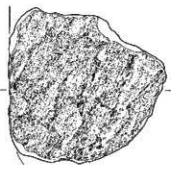
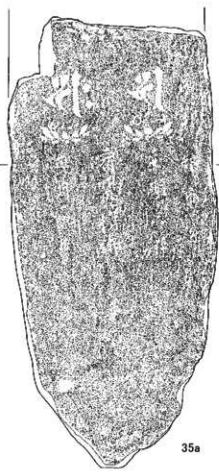
キリーク
 (蓮座)

サク
 (蓮座) 正月九日

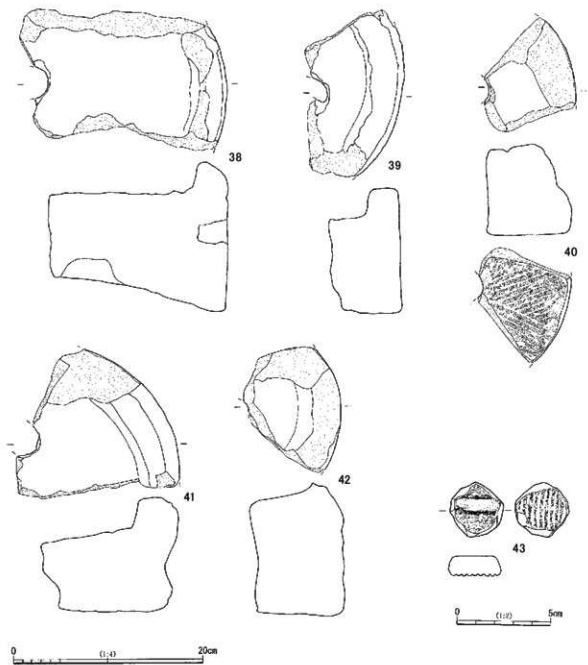
サ
 (蓮座) 文明二年 庚

宥賢律師

(光明真言)



第94図 (16)SK018(4)



第95図 (16)SK018(5)

1.50m程度しかないこと、覆土にロームの目立った堆積がないことから天井部が存在していた可能性は低いと考えられる。あるいは簡便な屋根が架けられ、地下式の室状を呈していたのかもしれない。土の天井部を伴わないことから、地下式坑とすることは難しく、特殊な用途の土坑と考えられる。板碑など本来土坑内から出土するはずのない遺物が含まれており、雑多な遺物で構成されている点から、最終的にはゴミ穴的に不要となったものを集積、廃棄したのであろうと推測される。

出土遺物は43点図化できた。1は瀬戸の挟み皿で、口径12.0cm、底径6.0cm、器高2.5cmを測る。口縁部内外面に灰釉を施す。2は瀬戸の丸皿で、口径10.4cm、底径5.8cm、器高2.5cmを測る。底部以外、灰

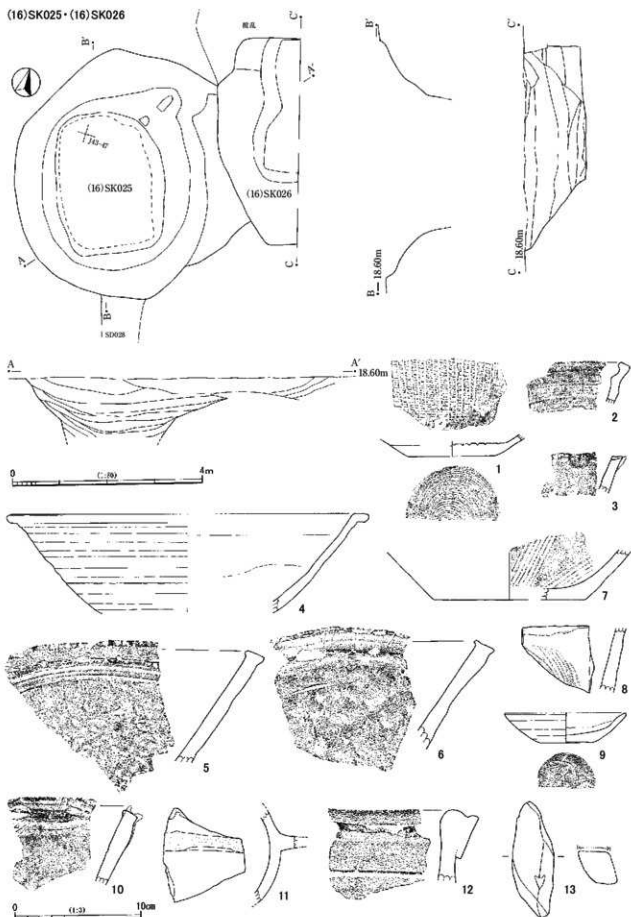
軸がかかる。高台の縁は擦られている。3も瀬戸丸皿で、底部のみが遺存する。底径は6.0cmで、全面に灰軸がかげられる。4も瀬戸丸皿で、ほぼ完形品である。口径11.0cm、底径5.5cm、器高1.8cmを測る。削り出し高台で、碁笥底になる。底部を除いて、灰軸がかかる。5は志野丸皿で、口径10.6cm、底径5.6cm、器高2.0cmに復元できた。全面に軸葉がかかるが、発色が悪い。6は瀬戸腰折皿で、口径14.4cm、底径8.0cm、器高2.8cmを測る。体部下端以外は軸葉がかかる。高台端は擦られている。7は古瀬戸平碗である。15%程遺存しており、底径は5.6cmになる。内外面に灰軸がかかるが、体部下端は露胎である。8～11はカワラケである。器面の摩耗が激しく調整は不明だが、8・10は見込をナデている。12は器種不明の土器である。底径は20.0cm、遺存する器高は19.0cmである。胎土には雲母を含み、底部にスタレ状の圧痕が見られる点など、内耳土器との共通点が見られる。13は内耳土器で、60%程遺存している。口径31.0cm、底径25.7cm、器高8.0cmを測る。耳は3耳と考えられる。胎土には雲母を多く含んでおり、12と似る。近世初頭のものと思われる。14・15も内耳土器で、内耳部のみ遺存する。共に銅と思われる。15は胎土に雲母を含むが、14は含まれない。15世紀後半代のものであろう。16は常滑片口鉢で、20%程遺存している。口径28.0cm、底径10.0cm、器高9.5cmを測る。8型式にあたるものと思われる。17も常滑片口鉢で、口縁部が遺存する。9型式にあたる。18は瀬戸の播鉢。19は土製の播鉢で底部及び体部が10%程遺存している。口径34.4cm、底径11.0cm、器高は20.0cm程になるものと思われる。20も瀬戸播鉢で、底径は10.0cmを測る。21は備前の播鉢で、底径10.0cmを測る。22～24は播鉢で22は古瀬戸後期IV新、23は大窯3、24は大窯1の時期にあたるだろう。25は常滑片口鉢の底部。26は常滑甕で、10型式にあたろう。27～30・32～42は石製品である。27～30は砥石、32～37は板碑である。板碑は総量で12.7kg、40点あまりが出土しその他に細片となったものがある。34・35を除けば、ほとんどは手の平大の大きさに割られているものであった。手の平大のものは何らかの面取りが行われており、転用のために再加工が行われているようである。形態の遺存がよい34・35も縁辺が研磨ないしは敲打され、再加工の痕跡をよく残している。出土した細片は、板碑を何らかの目的で加工した際の屑なのかかもしれない。34・35はともに銘が残るが薄れている。特に36は銘の部分の研磨が顕著である。34は上下を欠損する。右上に蓮華座の痕跡が、中央には「□□ニカ年カ二月日」の銘が何とか確認できる。35は上部を欠損するが、蓮華座の一部が残り、その下の左右に蓮華座と梵字(サク・サ)が見られることから、阿弥陀三尊種子と考えられ、欠損部にはキリークの梵字が刻まれていたと思われる。その下中央に「宥賢律師」その左右に「文明二年(1470年)」と「正月九日」、「年」の左右に「刁」と「庚」が読み取れる。刁は寅の異体字であろう。寅庚は文明二年の干支にあたり整合する。下端に外縁右側に6文字、左側に4文字の光明真言が刻まれている。38～42は石臼である。いずれも上臼で、もの入れの穴を伴っている。38は軸受けと挽き手のほぞ穴も確認できる。31は転用砥石で、常滑大甕の胴部片を再利用している。43は陶器片円盤で、播鉢片を円形に整形している。

(16)SK025(第96図、図版35)

J43-47グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。(16)SK026と隣接している。検出面の平面形は楕円形を呈する。底面は隅丸長方形を呈する。深度1.4mで湧水があり、完掘を断念した。検出面からの深さは1.50mを超えると推測される。(16)SD018の溝に上層部が攪乱されている。覆土は暗褐色土を主体とし、砂が混入している。北側のコーナー壁に足掛け用とみられる抉り込みが施されており、地下式坑と判断した。破片がほとんどだが覆土中から遺物が出土している。

1は古瀬戸鉢皿で、底部が50パーセント遺存し、6.6cmを測る。2は古瀬戸播鉢の口縁部である。3は

(16)SK025・(16)SK026



第96図 (16)SK025・(16)SK026

播鉢の口縁部で、片口部が残る。4は古瀬戸折縁深皿である。8%ほど遺存し、口径は28.6cmに復元できた。5・6は常滑片口鉢。7は播鉢で、底部の20%が遺存する。底径は12.0cmに復元でき、表面は明褐色、内面は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。播り目の入れ方は備前だが、胎土が違うので、備前を模した焼き物の可能性が考えられる。8は転用砥石で、割れ口に使用痕が見られる。9は古瀬戸の緑釉小皿で、口径9.6cm、底径4.1cm、器高2.4cmを測る。10は常滑片口鉢、12は常滑甕である。11は瓦質の羽釜である。色調は灰色で胎土は密である。体部が球形をなすので、あるいは茶釜かもしれない。13は凝灰岩製の砥石である。時期的には15世紀代のものが主体をなしている。

(16)SK026(第96図、図版20)

J43-37グリッドに位置する。地下式坑と推測される。(16)SK025の地下式坑が隣接している。約半分が調査区外となっており、未検出である。平面形は楕円形を呈すると推測される。底面は隅丸長方形であろう。検出面からの深さは1.32mで底面は平らである。覆土は暗褐色土を主体とし、底面近くには炭化物が混入していた。出土遺物はなかった。

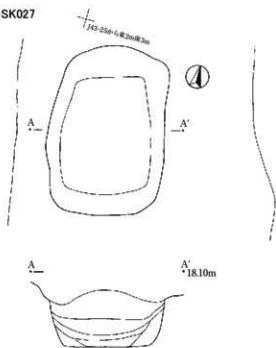
(16)SK027(第97図、図版20)

J43-35グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。底面もほぼ相似形で、検出面の規模は長軸長1.78m、短軸長1.22m、検出面からの深さは0.59mである。(16)SD023によって上層部は攪乱を受けている。覆土は暗褐色土を呈し、底面直上に粘土のブロックが堆積していた。土坑墓の可能性は低い。出土遺物はなかった。

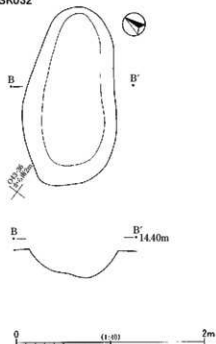
(16)SK032(第97図、図版20)

O43-36グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈する。検出面の規模は長軸長1.88m、短軸長0.99m、検出面からの深さは0.32mである。出土遺物はなかった。

(16)SK027



(16)SK032



第97図 (16)SK027・(16)SK032

第3節 溝状遺構

(5)SD004A・(5)SD004B(第98図、図版21)

(5)SD004Aは、L43-84～M43-74グリッドにかけて位置している。総延長距離は約50mである。東西方向に延びている。調査前に溝の存在は確認されておらず、完全に埋没していた。近接して農道があったことから道路関連の溝の可能性がある。溝幅は一定しており約1.40m、検出面からの深さは0.24mである。底面の幅は狭い。(5)SD004Bが並行している。溝に直接関連すると思われる出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SD004Bは、L43-84～M43-63及びM43-12～M42-73グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約90mである。調査区を異にしているが、溝2条が同一の溝と判断されたことから同一番号を付している。(5)SD004Aと並行し、一端北上して再度クランク状に曲がっている。近接して農道があったことから道路関連の溝の可能性がある。幅はほぼ一定しており、約1.30m、検出面からの深さは約0.40mである。底面の幅は狭い。溝に直接関連すると思われる出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SD003・(5)SD016・(5)SD017・(5)SD018・(5)SD019(第99・100図、図版21・36)

5条の東西方向に延びる溝が検出されている。調査前に溝の存在は確認されておらず、完全に埋没していた。北側に現道があることから道路に関連した溝であろうと考えられる。

(5)SD003は、L43-13～M43-90グリッドにかけて位置している。総延長距離は約35mである。本遺構のほか(5)SD016～(5)SD019の4条が並行して走っているが、これらの溝との新旧関係は不明である。溝幅は広く、3.00m、検出面からの深さは最大で0.40mである。底面は凹凸があり、径の小さなピットが不規則に検出されている。

(5)SD016は、L43-23～M42-93グリッドにかけて位置している。総延長距離は約35mである。本遺構のほか(5)SD017～(5)SD019の4条が接して走っており、セクションから南側ほど新しいと考えられる。溝幅は約1.70mである。検出面から深さは0.80mである。

(5)SD017は、L43-23～M42-83グリッドにかけて位置している。総延長距離は約35mである。左右の溝に壊されており幅を確認できず底面のみである。検出面から深さは0.60mである。

(5)SD018は、L43-33～M42-93グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約35mである。溝幅は約1.60mであるが一定していない。検出面から深さは0.40mである。

(5)SD019は、L43-33～N43-35グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約10mである。溝幅は約0.70mである。検出面から深さは0.42mである。

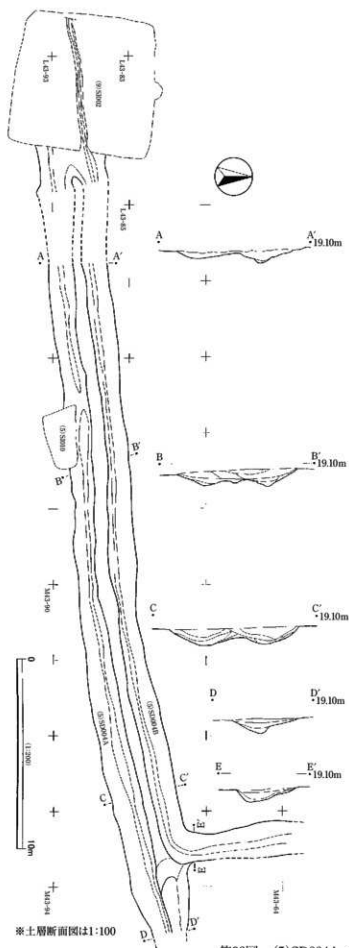
出土遺物には時期幅があり、本遺構の時期を特定することは難しいが、最も新しい遺物によって中世後期以降と考えられる。

出土遺物は、1～3が(5)SD003から、4～7が(5)SD018から、8が(5)SD019から出土している。1は須恵器長頸壺、2・4は土師器杯、3は板破片、5は瓦、6は陶器片円盤、7・8は砥石などである。いずれも各溝に伴うと判断できる根拠には乏しい。

(10)SD022(第101図)

N44-63～N44-69グリッドにかけて位置している。総延長距離は約24mである。東西方向に延びている。溝幅は一定しておらず約1.40m、検出面からの深さは約0.10mと浅い。底面は平らである。

出土遺物は、奈良・平安時代の堅穴住居跡を壊していることから、これら堅穴住居跡に伴っていた遺物



※土層断面図は1:100

第98図 (5)SD004A・(5)SD004B

が出土しており、溝本来の時期を特定できる遺物は出土していない。

(11)SD010A・(11)SD010B・(11)SD010C・(11)SD010D・(15)SD003 (第102図)

(11)SD010A・(11)SD010Dは南北方向、(11)SD010B・(11)SD010Cは東西方向に延びている。出土遺物がなく、それぞれの時期を特定できないが、大きな時期差はないようである。

(11)SD010Aは、J44-10～J44-41グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約14mである。溝幅は約1.90m、検出面からの深さは0.19mと浅い。(11)SD010Cと切り合っており、本溝の方が新しい。

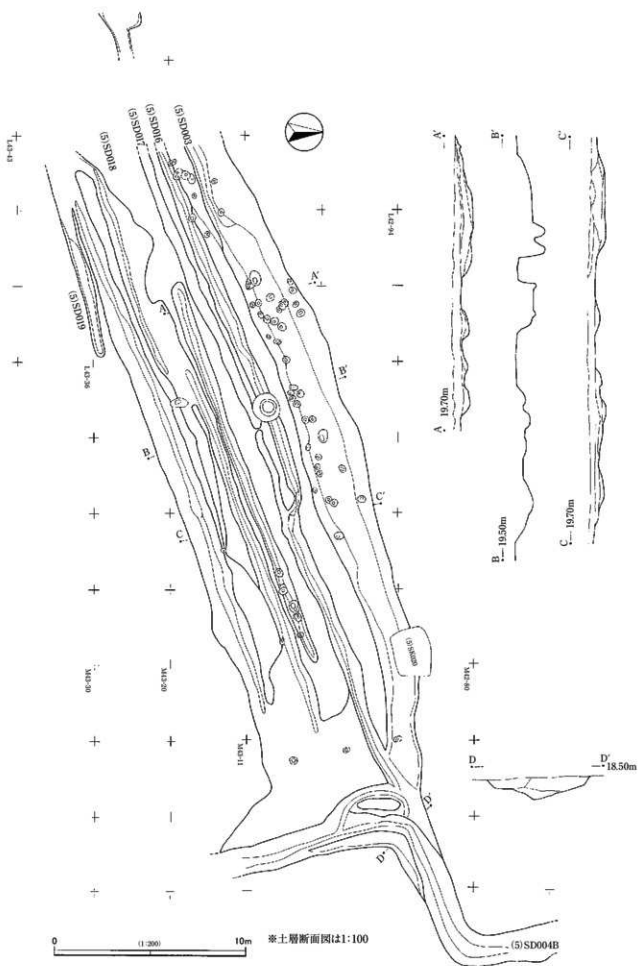
(11)SD010Bは、I44-20～I44-18グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約33mである。溝幅は1.80m、検出面からの深さは0.30mである。底面の幅は狭い。

(11)SD010Cは、I44-33～J44-10グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約28mである。溝幅は約2.60mで一定していない。検出面からの深さは約0.30mである。

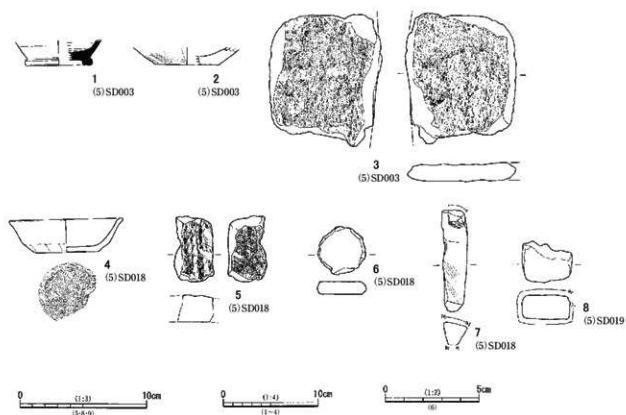
(11)SD010Dは、I44-22～I44-33グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約8mである。

(11)SD010Cと同一の溝で南北方向に方向が変わるのであろう。溝幅は約2.50mである。

(15)SD003は、I44-15～I44-16グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約7mである。(11)SD010Bなどと同一方向に延びている。溝幅は約0.90m、検出面からの深さは0.12mで浅い。底面は平らである。



第99図 (S)SD003 · (S)SD004B · (S)SD016 · (S)SD017 · (S)SD018 · (S)SD019



第100図 (5)SD003・(5)SD018・(5)SD019 出土遺物

(16)SD015・(16)SD023・(16)SD024・(16)SD028・(16)SD030(第103～105図、図版32・35・36)

中世の土坑群が位置する区域に伴う溝状遺構群である。屋敷地に関連した区画溝の可能性があり、溝で仕切られた区画内には、地下式坑などが検出されている。溝はコの字形を呈している。出土遺物は、中世陶器や砥石などが出土しているが、これらの溝の時期が特定できる資料には乏しい。

(16)SD015は、J 43-87～K 42-90グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約50mである。南北に延びる溝で、溝幅は一定しており約1.00m、検出面からの深さは0.25mである。南端で西に曲がり、(16)SD024と共に区画溝を構成している。

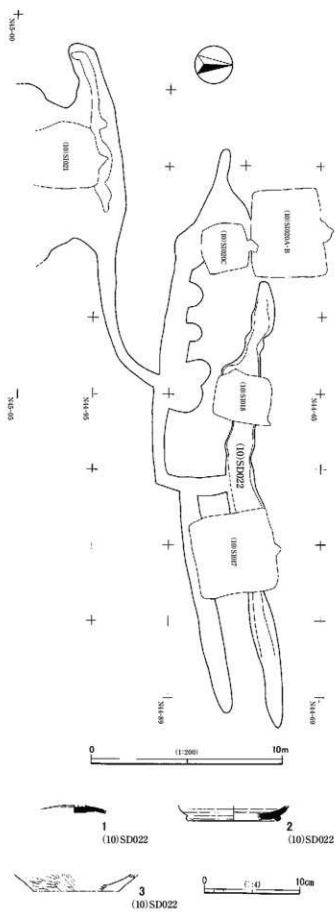
(16)SD023は、J 43-25～J 43-55グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約12mである。溝幅は約0.80m、検出面からの深さは0.13mである。(16)SD024と並行している。(16)SK007の中世土坑などが溝と切り合っている。新旧関係は不明である。

(16)SD024は、J 43-15～J 43-87グリッドにかけて位置している。総延長距離は約30mである。溝幅は約2.00m、検出面からの深さは0.57mである。(16)SD015と合わせコの字形の区画を呈する。

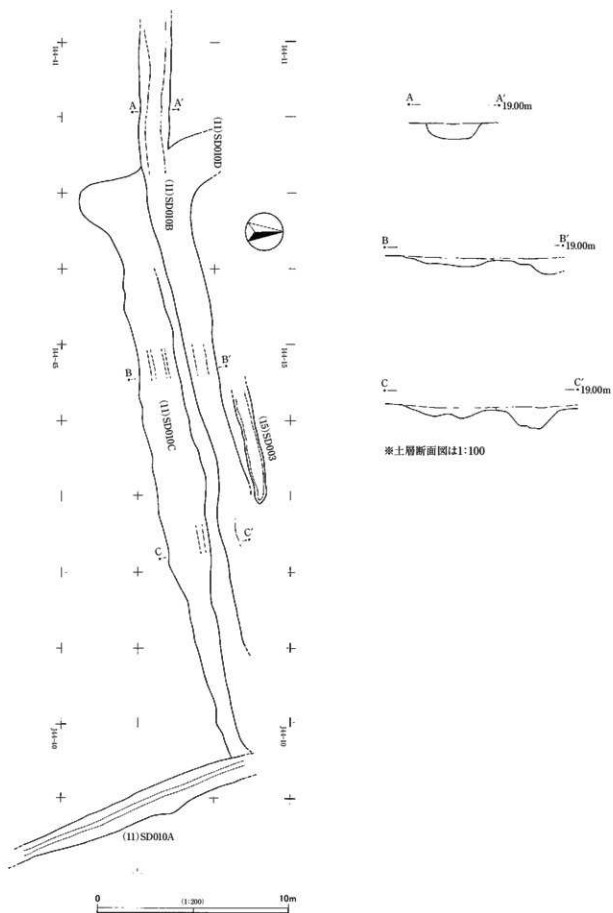
(16)SD028は、J 43-47～J 43-78グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約10mである。溝幅は約0.60m、検出面からの深さは0.17mである。コの字形の区画内にある。

(16)SD030は、K 43-31グリッドに位置している。総延長距離は、約4mである。溝幅は約1.80m、検出面からの深さは0.25mである。(16)SD015を壊しているが、特殊な土坑の(16)SK018から延びており、何らかの関連施設かもしれない。

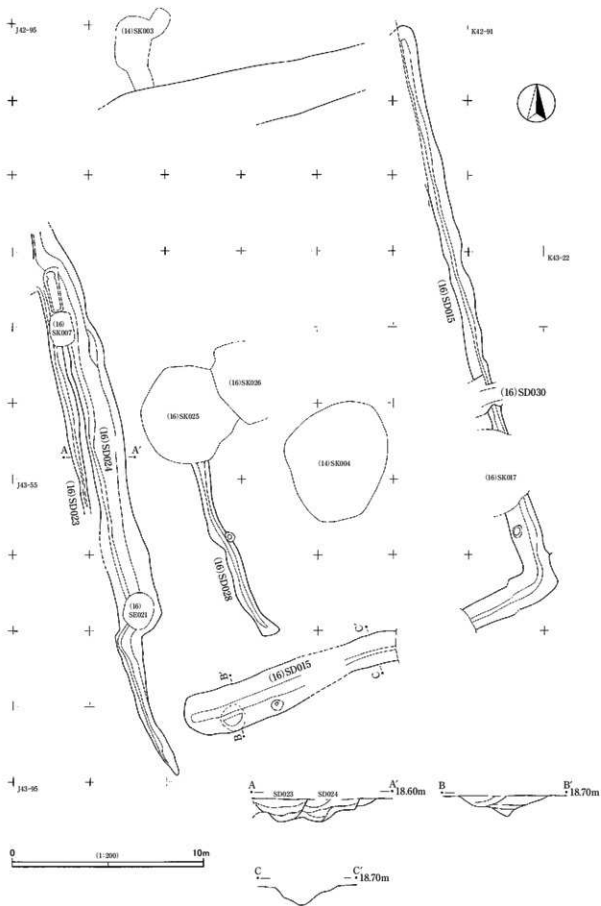
第104図1～8は、(16)SD024出土遺物である。1は磁器碗で、表面に花鳥文が描かれる。2は竜泉窯



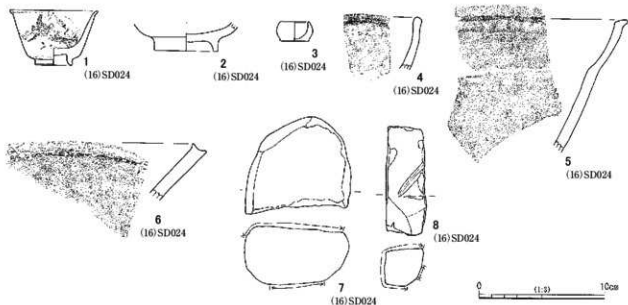
第101图 (10)SD022



第102図 (11)SD010A・(11)SD010B・(11)SD010C・(11)SD010D・(15)SD003



第103图 (16)SD015 · (16)SD023 · (16)SD024 · (16)SD028



第104図 (16)SD024 出土遺物

系の青磁碗。3はミニチュア土器。4は古瀬戸の平碗である。5は内耳土器。6は常滑の片口鉢である。7は砂岩製の砥石で、全体に焼けている。8は凝灰岩製の砥石である。1と3は近世の遺物であるが、他は中世の所産である。

(16)SD001・(16)014・(16)016・(16)019・(16)020・(16)029(第105・106図、図版36)

中世の土坑群が位置する区域に伴う溝状遺構群である。屋敷地に関連した区画溝の可能性があり、溝で仕切られた区画内には、地下式坑などが検出されている。L字に曲がる溝などが見られる。出土遺物は、中世陶器や鉄製品、砥石、石製紡錘車などが出土しているが、これらの溝の時期が特定できる資料には乏しい。

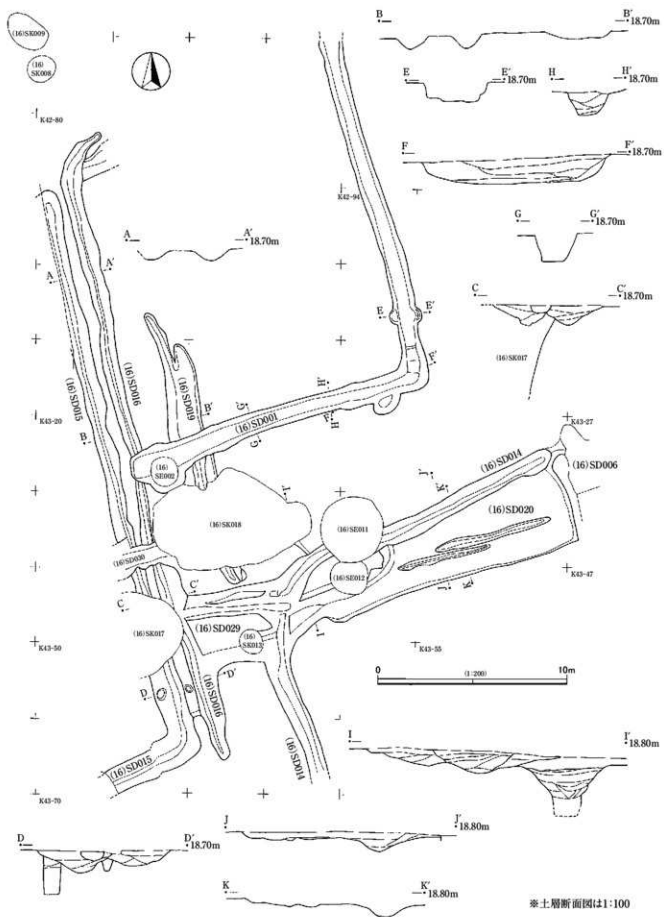
(16)SD001は、K42-73～K43-21グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約35mである。溝幅は約0.60m、検出面からの深さは約0.46mである。断面は逆台形状を呈する。L字形に曲がり、北へ延びている。

(16)SD014は、K43-26～K43-63グリッドにかけて位置している。総延長距離は約24mである。溝幅は約1.90m、検出面からの深さは0.26mである。東西方向から南にL字に曲がっている。(16)SD020に関連した溝かもしれない。

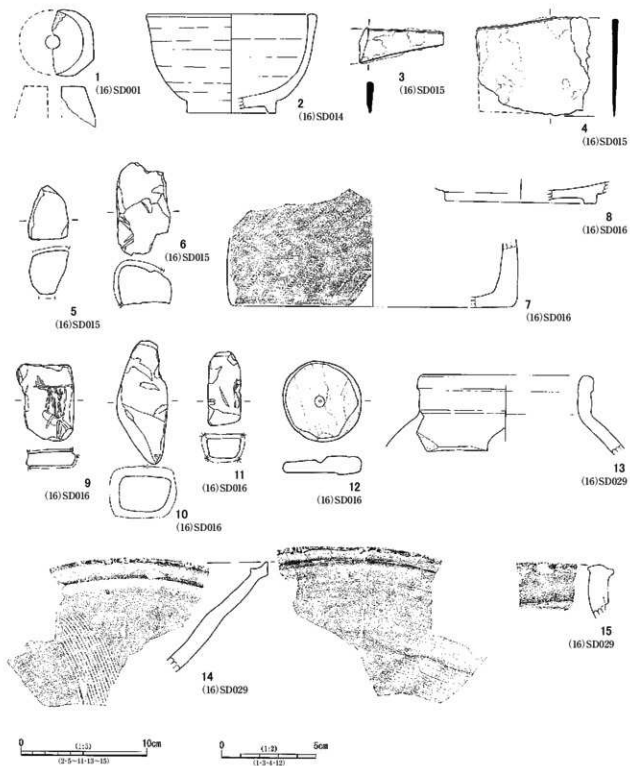
(16)SD016は、K42-80～K43-62グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約34mである。西側の(16)SD015に並行し、溝幅は約0.80m、検出面からの深さは0.20mである。北端で東方向に曲がっている。

(16)SD019は、K43-01～K43-42グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約15mである。溝幅は約1.70m、検出面からの深さは0.08mである。北側で2条に分かれることから、本来は2条だった可能性がある。(16)SD015・(16)016と並行している。

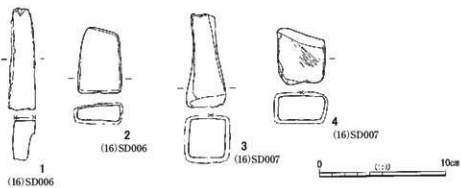
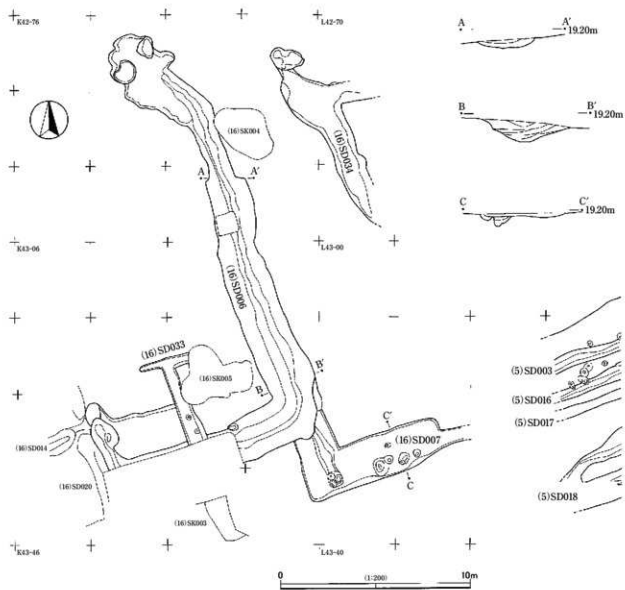
(16)SD020は、K43-37～K43-43グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約15mである。溝幅は約0.40m、検出面からの深さは0.12mである。溝というよりも台形様の浅い落ち込みと言った方が良



第105図 (16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・(16)SD016・(16)SD019・(16)SD020・
(16)SD029・(16)SD030



第106図 (16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・(16)SD016・
(16)SD029 出土遺物



第107图 (16)SD006 · (16)SD007 · (16)SD033 · (16)SD034

いかかもしれない。何らかの施設跡の可能性がある。底面中央に2条の細い溝が検出されている。

(16)SD029は、K43-42～K43-43グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約6mで、(16)SD014とは異なる溝と考えられる。溝幅は約0.40m、検出面からの深さは0.19mである。

第106図1は石製の紡錘車で、(16)SD001出土。2は陶器碗で、内外面に黄釉がかかる。(16)SD014出土で近世の所産。3・4は(16)SD015出土の鉄製品。3は刀子、4は鎌であろうか。5・6は(16)SD015出土の砥石。7～12は(16)SD016出土遺物である。7は瓦質の土器で、底径22.0cmに復元でき、表面には刺突による模様を描かれる。手あぶりもしくは風炉と考えられる。近世の所産であろう。8は陶器碗の底部で、30%遺存する。

9～11は砥石である。12は円形の石製品で、中央に穿孔の痕跡があるが貫通していない。紡錘車の未成品であろうか。13～15は(16)SD029出土の遺物である。13は常滑の壺である。口径14.0cmで玉縁口縁のものである。なお下端の割れ口は擦られており、砥石に転用された可能性がある。14は瀬戸の播鉢。15は常滑甕の口縁部片である。中世末から近世初頭のものであろう。

(16)SD006・(16)SD007・(16)SD033・(16)SD034(第107図、図版21・36)

中世の土坑群が位置する区域に伴う溝状遺構群である。屋敷地に関連した区画溝の可能性が高い。L字に曲がる溝などが見られる。出土遺物は少なく、砥石などが出土している。

(16)SD006は、K42-77～K43-38グリッドにかけて位置している。総延長距離は約27mである。北から南南東方向に向かい、L字に西に曲がっている。溝幅は約2.50mの太い溝である。検出面からの深さは約0.42mである。北端は溝幅が広がり何らかの施設があったようである。

(16)SD007は、K43-29～L43-21グリッドにかけて位置している。総延長距離は約10mである。溝幅は約2.30m、検出面からの深さは0.16mの浅い溝である。底面は平らで、(16)SD006と切り合っている。L字に曲がっており、底面に小ピットが不規則に検出されている。

(16)SD033は、K43-17～K43-28グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約5mである。溝幅は最大1.00m、検出面からの深さは0.05mである。T字状を呈する。東側に(16)SK005が隣接しており、何らかの施設の一部である可能性が高い。

(16)SD034は、K42-79～L42-90グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約12mである。溝幅は約1.50m、検出面からの深さは0.13mと浅い。(16)SD006にほぼ並行しており、北側が広がって何らかの施設が存在を示している点も(16)SD006に類似している。

第107図1～4は砥石である。1・2は(16)SD006出土、3・4は(16)SD007出土である。

第7章 遺構外出土遺物

第1節 概要

本章では、古墳時代以降の遺構外出土遺物について扱う。本来は堅穴住居跡などの遺構に伴っていたであろう古墳時代や奈良・平安時代及び中・近世の遺物などである。

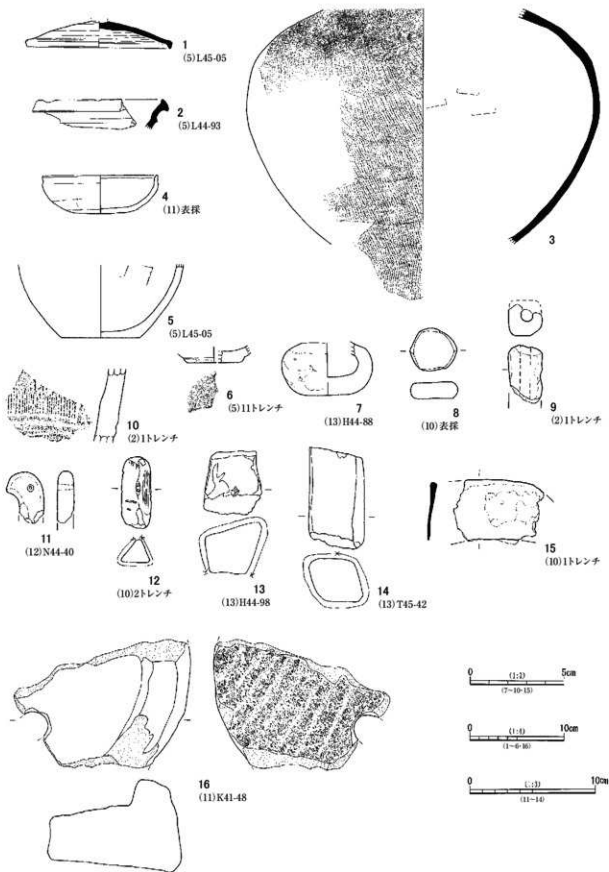
調査区全域から出土した遺構外の遺物で図示できるものは少なかった。掲載はしないが、全域から時期の特定できないスラグが出土している点の特徴の一つである。中世の地下式坑からもスラグが出土していることから、中世にこの地域で精錬・鍛冶などの操業が行われていた可能性がある。本遺跡に限らず、本区画整理事業地内の各遺跡の調査においてもスラグの出土が目立つものの、操業の痕跡を示す生産遺構は、これまで確認されていない。

第2節 出土遺物(第108・109図、図版30・36)

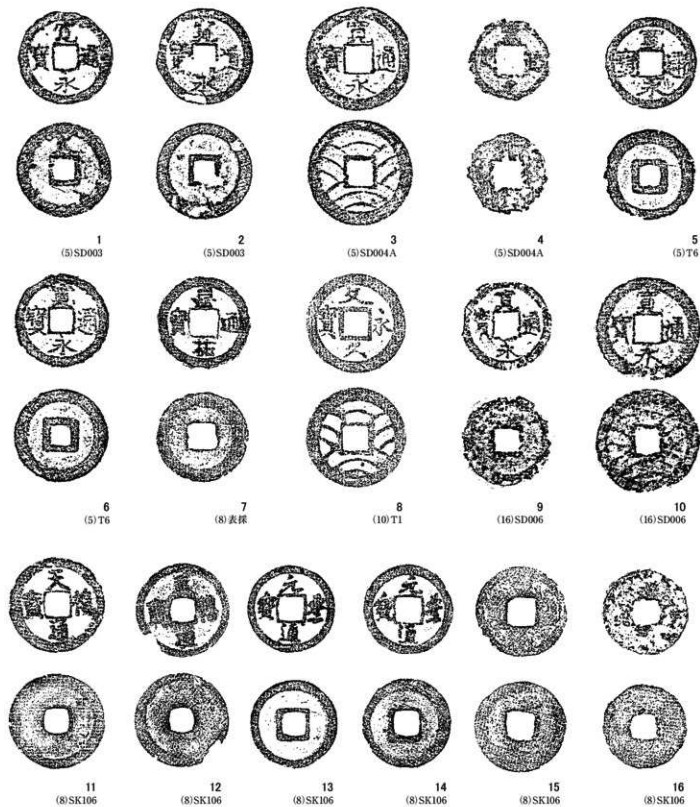
第108図1は須恵器の蓋で、宝珠を欠損する。2は須恵器甕の口縁部片で、自然釉がかかる。3は須恵器甕の胴部で、上半には自然釉がかかる。4は土師器坏である。丁寧な作りで、体部外面はヘラケズリ、口縁部、体部内面は横ナデを行う。5は土師器甕である。表面の磨滅が激しいが、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを行っているものと思われる。6は土師器坏の底部である。磨耗が激しいが、回転糸切後無調整のものであろう。7はミニチュア土器で、口縁部を欠損する。8は土製円盤で、土器片の周縁を磨き加工している。9は管状土錘である。10は円筒埴輪片。11は水晶製の勾玉で、下端を欠損する。

12~14は砥石である。12・13は凝灰岩、14は砂岩を使用している。15は鉄製品の鎌であろう。16は石臼である。もの入れの穴を伴う上臼である。前調査区内から出土した石臼は、全て破片である。下臼は1点も確認されなかった。下臼は転用されることが多いのかもしれない。

第109図1~16は、全調査区から出土した銭貨である。調査面積や中世の遺構数などからすれば、量的には少ないと言えるだろう。土坑墓から出土したものが6点、溝状遺構から出土したものが6点、遺構外が4点である。1・2・5・6・9が古寛永通寶、3・10が新寛永通寶、8が文久永寶である。4は渡来銭であろう。銭文は不明である。7は嘉祐通寶である。11~16は土坑墓から出土した六文銭である。11・12は天喜通寶、13・14は元豊通寶、15は拓本では文字が見えないが皇宋通寶などの北宋銭からなっている。



第108図 遺構外出土遺物



第109圖 出土錢貨

第6表 砥石一覧表

No.	挿回番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
1	第37回12	(5)	SI005	3	砥石	580	496	125	5599	凝灰岩	
2	第40回4	(5)	SI008	4	砥石	430	435	464	6329	凝灰岩	
3	第52回19	(9)	SI007	35	砥石	96.8	41.8	41.1	255.98	凝灰岩	
4	第54回3	(10)	SI002	3	砥石	34.6	28.6	11.7	8.74	凝灰岩	
5	第28回6	(10)	SI010	10	砥石	(156.0)	119.9	97.9	2881.13	安山岩	縄文時代石棒を転用
6	第20回7	(11)	SI004	1	砥石	71.2	22.5	40.4	66.66	凝灰岩	
7	第81回3	(8)	SK107A	1	砥石	80.8	35.6	12.2	60.25	凝灰岩	
8	第86回8	(14)	SK004	1	転用砥石	110.6	81.3	12.6	128.05	陶器	
9	第89回4	(16)	SK009	1	砥石	92.7	23.7	26.8	85.56	凝灰岩	
10	第93回27	(16)	SK018	2	砥石	120.0	27.3	34.6	134.58	凝灰岩	
11	第93回28	(16)	SK018	2	砥石	81.7	30.7	34.2	95.98	凝灰岩	
12	第93回29	(16)	SK018	2	砥石	50.6	26.2	18.2	40.84	凝灰岩	
13	第93回30	(16)	SK018	2	砥石	46.8	30.0	30.1	58.87	凝灰岩	
14	第93回31	(16)	SK018	-	転用砥石	113.6	88.5	12.0	180.09	陶器	
15	-	(16)	SK018	2	砥石	59.0	27.0	38.0	54.92	凝灰岩	
16	-	(16)	SK018	2	砥石	48.3	34.9	21.9	33.85	凝灰岩	
17	第96回13	(16)	SK025	2	砥石	91.2	31.6	25.3	52.06	凝灰岩	
18	-	(16)	SE012	2	砥石	80.4	40.8	64.0	296.44	安山岩	
19	第90回7	(16)	SE021	2	砥石	74.4	48.4	18.8	146.01	凝灰岩	
20	-	(5)	SD016	1	砥石	26.5	33.0	25.3	26.29	凝灰岩	
21	第100回7	(5)	SD018	10	砥石	79.7	20.8	17.3	36.23	凝灰岩	
22	第100回8	(5)	SD019	1	砥石	32.5	39.5	22.6	35.75	凝灰岩	
23	第71回3	(11)	SI006	1	砥石	70.5	39.2	24.5	101.29	砂岩	
24	第107回1	(16)	SD006	4	砥石	80.0	35.0	20.9	65.35	頁岩	
25	-	(16)	SD006	3	砥石	25.8	19.7	24.8	13.42	凝灰岩	
26	-	(16)	SD006	3	砥石	43.5	37.8	9.0	21.05	凝灰岩	
27	第107回2	(16)	SD006	3	砥石	51.8	34.1	12.9	36.11	凝灰岩	
28	-	(16)	SD006	3	砥石	24.6	33.0	7.3	6.87	凝灰岩	
29	-	(16)	SD006	3	砥石	26.8	39.0	9.1	10.11	凝灰岩	
30	第107回3	(16)	SD007	2	砥石	73.0	30.0	34.6	75.43	凝灰岩	
31	第107回4	(16)	SD007	2	砥石	45.0	37.3	19.4	51.56	凝灰岩	
32	-	(16)	SD020	2	砥石	25.0	22.4	11.0	5.32	凝灰岩	
33	第106回5	(16)	SD015	2	砥石	42.1	32.5	34.9	49.27	凝灰岩	
34	第106回6	(16)	SD015	2	砥石	73.7	41.6	31.3	91.38	凝灰岩	
35	-	(16)	SD015	2	砥石	49.5	27.5	22.6	43.29	凝灰岩	
36	-	(16)	SD015	2	砥石	71.2	41.4	21.2	62.02	凝灰岩	
37	-	(16)	SD015	4	砥石	96.8	33.5	43.9	52.18	凝灰岩	
38	第106回9	(16)	SD016	1	砥石	60.0	43.8	13.6	50.86	凝灰岩	
39	第106回10	(16)	SD016	2	砥石	97.4	39.9	30.8	122.25	凝灰岩	
40	第106回11	(16)	SD016	2	砥石	58.3	26.4	15.9	39.34	凝灰岩	
41	第104回7	(16)	SD024	2	砥石	73.0	80.6	44.9	353.01	砂岩	
42	第104回8	(16)	SD024	2	砥石	84.6	31.2	30.3	112.56	凝灰岩	
43	-	(17)	SI006	3	砥石	49.0	37.9	15.8	38.50	凝灰岩	
44	第108回13	(13)	H44-98	1	砥石	51.0	43.2	42.6	113.27	凝灰岩	
45	第108回14	(13)	I45-42	1	砥石	72.4	43.3	35.0	178.19	砂岩	
46	-	(2)	9801T	1	砥石	40.2	26.5	25.6	39.99	凝灰岩	
47	-	(5)	T10	1	砥石	56.3	54.8	7.9	28.14	頁岩	
48	-	(10)	T1	1	砥石	20.3	34.4	28.0	35.08	凝灰岩	
49	-	(10)	T1	1	砥石	36.5	34.8	9.9	9.84	凝灰岩	
50	-	(10)	T1	1	砥石	38.0	27.5	19.1	12.22	凝灰岩	
51	-	(10)	T1	1	砥石	97.7	24.8	15.3	73.28	頁岩	
52	第108回12	(10)	T2	1	転用砥石	56.7	19.8	22.0	18.85	瓦	
53	-	(10)	T4	1	砥石	41.0	19.1	9.8	8.14	凝灰岩	

第7表 石臼一覧表

No.	挿回番号	調査年次	出土地点	遺物番号	部位	重量 (g)	石材	備考
1	第95回38	(16)	SK018	27	上臼	4.100	安山岩	軸受け、もの入れ穴、挽き手の差込穴あり
2	第95回39	(16)	SK018	27	上臼	2.251	安山岩	もの入れ穴あり
3	第95回40	(16)	SK018	27	上臼	9.36	安山岩	もの入れ穴あり
4	第95回41	(16)	SK018	27	上臼	2.829	安山岩	もの入れ穴あり
5	第95回42	(16)	SK018	27	上臼	2.261	安山岩	もの入れ穴あり
6	第108回16	(11)	K41-48	5	上臼	2.107	安山岩	もの入れ穴あり

第8表 板碑一覧表

※全て破片のため計測値は重量のみとした

No.	挿入番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種類	重量(g)	石材	No.	挿入番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種類	重量(g)	石材
1	第100回 3	(5)	SD003	2	板碑	5556	緑泥片岩	41	-	(16)	SK018	26	板碑	529	緑泥片岩
2	-	(5)	SD003	63	板碑	535	緑泥片岩	42	-	(16)	SK018	26	板碑	321	緑泥片岩
3	-	(5)	SD003	63	板碑	242	緑泥片岩	43	-	(16)	SK018	26	板碑	536	緑泥片岩
4	-	(5)	SD003	63	板碑	37	緑泥片岩	44	-	(16)	SK018	26	板碑	91.4	緑泥片岩
5	-	(5)	SD004	2	板碑	1014	緑泥片岩	45	-	(16)	SK018	26	板碑	64.5	緑泥片岩
6	-	(5)	SD016	5	板碑	482	緑泥片岩	46	-	(16)	SK018	26	板碑	95.5	緑泥片岩
7	-	(5)	M4280	1	板碑	246	緑泥片岩	47	-	(16)	SK018	26	板碑	88.2	緑泥片岩
8	-	(5)	T18	1	板碑	3.8	緑泥片岩	48	-	(16)	SK018	26	板碑	115.6	緑泥片岩
9	-	(9)	S003	6	板碑	2405	緑泥片岩	49	-	(16)	SK018	26	板碑	46.9	緑泥片岩
10	-	(9)	SX009	2	板碑	223	緑泥片岩	50	-	(16)	SK018	26	板碑	76.2	緑泥片岩
11	-	(10)	SD022	1	板碑	380	緑泥片岩	51	-	(16)	SK018	26	板碑	21.4	緑泥片岩
12	-	(10)	T2	1	板碑	128	緑泥片岩	52	-	(16)	SK018	26	板碑	51.3	緑泥片岩
13	-	(14)	SK004	1	板碑	2122	緑泥片岩	53	-	(16)	SK018	26	板碑	46.6	緑泥片岩
14	-	(14)	SK004	1	板碑	912	緑泥片岩	54	-	(16)	SK018	26	板碑	152.9	緑泥片岩
15	-	(16)	SD006	2	板碑	2285	緑泥片岩	55	-	(16)	SK018	26	板碑	71.8	緑泥片岩
16	-	(16)	SE011	3	板碑	2285	緑泥片岩	56	-	(16)	SK018	26	板碑	536.5	緑泥片岩
17	-	(16)	SE011	3	板碑	1336	緑泥片岩	57	-	(16)	SK018	26	板碑	51.8	緑泥片岩
18	-	(16)	SE011	3	板碑	926	緑泥片岩	58	-	(16)	SK018	26	板碑	16.1	緑泥片岩
19	-	(16)	SE011	3	板碑	153	緑泥片岩	59	-	(16)	SK018	26	板碑	12.3	緑泥片岩
20	-	(16)	SE011	3	板碑	47	緑泥片岩	60	-	(16)	SK018	26	板碑	21.3	緑泥片岩
21	-	(16)	SE011	3	板碑	81	緑泥片岩	61	-	(16)	SK018	26	板碑	14.8	緑泥片岩
22	-	(16)	SE012	2	板碑	1501	緑泥片岩	62	-	(16)	SK018	26	板碑	12.3	緑泥片岩
23	-	(16)	SE012	2	板碑	416	緑泥片岩	63	-	(16)	SK018	26	板碑	12.1	緑泥片岩
24	-	(16)	SK013	1	板碑	1663	緑泥片岩	64	-	(16)	SK018	26	板碑	28.6	緑泥片岩
25	-	(16)	SK013	1	板碑	418	緑泥片岩	65	-	(16)	SK018	26	板碑	13.8	緑泥片岩
26	-	(16)	SD015	3	板碑	1569	緑泥片岩	66	-	(16)	SK018	26	板碑	6.0	緑泥片岩
27	-	(16)	SK017	1	板碑	328	緑泥片岩	67	-	(16)	SK018	26	板碑	8.8	緑泥片岩
28	第94回 35	(16)	SK018	3	板碑	43000	緑泥片岩	68	5cm以下の断片合計	(16)	SK018	26	板碑	174.7	緑泥片岩
29	第93回 34	(16)	SK018	4	板碑	28000	緑泥片岩	69	-	(16)	SD020	3	板碑	141.0	緑泥片岩
30	第93回 32	(16)	SK018	26	板碑	4196	緑泥片岩	70	-	(16)	SD020	3	板碑	5.4	緑泥片岩
31	第93回 33	(16)	SK018	26	板碑	4401	緑泥片岩	71	-	(16)	SD020	3	板碑	1.5	緑泥片岩
32	第94回 36	(16)	SK018	26	板碑	11465	緑泥片岩	72	-	(16)	SD020	3	板碑	4.6	緑泥片岩
33	第94回 37	(16)	SK018	26	板碑	7610	緑泥片岩	73	-	(16)	SD020	3	板碑	6.6	緑泥片岩
34	-	(16)	SK018	26	板碑	565	緑泥片岩	74	-	(16)	SD020	3	板碑	5.0	緑泥片岩
35	-	(16)	SK018	26	板碑	245	緑泥片岩	75	-	(16)	SD022	1	板碑	16.5	緑泥片岩
36	-	(16)	SK018	26	板碑	528	緑泥片岩	76	-	(16)	SD022	1	板碑	13.4	緑泥片岩
37	-	(16)	SK018	26	板碑	2296	緑泥片岩	77	-	(16)	SD024	2	板碑	21.5	緑泥片岩
38	-	(16)	SK018	26	板碑	4344	緑泥片岩	78	-	(16)	SK025	2	板碑	575.7	緑泥片岩
39	-	(16)	SK018	26	板碑	556	緑泥片岩	79	-	(16)	SK025	2	板碑	322.9	緑泥片岩
40	-	(16)	SK018	26	板碑	323	緑泥片岩	80	-	-	-	-	板碑	224.8	緑泥片岩

第9表 銭貨一覧表

挿入番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種類	時期	初鑄年	外部外径 (cm)	内部内径 (cm)	備考
第109回 1	(5)	SD003	2	寛永通寶	江戸	-	2.50	0.53	
第109回 2	(5)	SD003	2	寛永通寶	江戸	-	2.56	0.56	
第109回 3	(5)	SD004A	8	新寛永通寶	江戸	-	2.78	0.65	
第109回 4	(5)	SD004A	8	-	-	-	2.09	0.78	窠食跡著、模銭状?
第109回 5	(5)	T6	1	寛永通寶	江戸	-	2.41	0.58	
第109回 6	(5)	T6	1	寛永通寶	江戸	-	2.47	0.53	
第109回 7	(8)	表挿	2	嘉祐通寶	北宋	1056	2.44	0.71	
第109回 8	(10)	T1	1	文久水寶	江戸	-	2.64	0.64	
第109回 9	(16)	SD006	6	寛永通寶	江戸	-	2.40	0.62	
第109回 10	(16)	SD006	6	新寛永通寶	江戸	-	2.79	0.63	
第109回 11	(8)	SK106	7	天喜通寶	北宋	1017	2.53	0.65	
第109回 12	(8)	SK106	3	天喜通寶?	北宋	1017?	2.47	0.63	模銭状?
第109回 13	(8)	SK106	7	元豊通寶	北宋	1078	2.31	0.62	行書
第109回 14	(8)	SK106	3	元豊通寶	北宋	1078	2.36	0.65	行書
第109回 15	(8)	SK106	3	皇宋通寶	-	-	2.41	0.72	窠食跡著、模銭状?
第109回 16	(8)	SK106	7	?	-	-	2.20	0.65	窠食跡著、模銭状?

第8章 まとめ

すでに各章で、遺構・遺物についての概要を述べたが、改めて前平井堀米遺跡から検出された遺構・遺物について、時代別にまとめてみたい。

旧石器時代

本遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、極めて限定的なものであった。その要因としては、立川ローム層が台地の斜面部ではほとんど失われていること、台地の中央部においても立川ロームVI層以下の下層部のみが確認される状況であったことなどが挙げられる。

流山市域では、ほぼ全域でII層～III層にかけての層位に攪乱が顕著であり、IV層以下の所謂ハードローム上層部の遺存も、本遺跡周辺ではあまり良くない。このことは、旧石器時代の活動が少なかったとは一概には言えず、立川ロームの遺存状況に影響され、その痕跡が失われていることも加味する必要があるだろう。

今回の調査では、僅かに2ブロックの石器群が確認された程度である。第1ブロックは、被熱した礫群からなり、層位の確認が成されていないため、時期を確定することが難しい。立川ローム層の遺存状況からすれば、VI層以下の可能性が高い。第2ブロックは、IX層から2点の剥片が出土した小ブロックである。このほか単独だがナイフ形石器などが出土している。

縄文時代

縄文時代の遺構は、陥穴2基のみであった。遺物は縄文時代早期、前期、中期、後期の土器や石器が少量出土しているほか、石棒、玦状耳飾などが出土している。旧石器時代と同様にII層～III層の遺存が悪いことや、後世の耕作などの影響も考えられるものの、本遺跡内における縄文時代の痕跡は概ね希薄である。出土した縄文土器は少なかったが、このうち前期黒浜式が最も多く出土しており、縄文海進が海退に転じた頃の黒浜式期には、本台地においても小規模ながら集落が営まれていた可能性がある。また、中期とみられる大型石棒などが出土していることから、中期においても短期間ではあるが集落が営まれていた可能性がある。

古墳時代

5世紀から7世紀の堅穴住居跡が8軒検出されている。このうち5世紀中葉の古墳時代中期の堅穴住居跡はわずかに1軒しかなく特異な存在である。石製模造品が出土しているが、成品のみであることから、工房跡の可能性は低い。残る7軒は古墳時代後期7世紀後葉と考えられ、8世紀代の集落へと継続していくものと考えられる。7世紀後葉の堅穴住居跡は、散漫な展開を示しており、居住域としてのまとまりはあまりない。8世紀代の堅穴住居跡群と混在しており、各地点で細々と集落が継続していくようである。堅穴住居跡の遺存状態についてはあまり良くない。奈良・平安時代の堅穴住居跡についても同様である。堅穴住居跡内のカマドは総じて北西方向に設置されている。遺物の出土量は、中期の堅穴住居跡を除けば少なかった。

奈良・平安時代

8世紀から9世紀にかけての堅穴住居跡が43軒検出されている。この他に土坑などの遺構は検出されていない。このうち遺物を伴い時期が決定できた堅穴住居跡が30軒、遺物が伴わないため時期を特定す

ることが難しいものの、堅穴の規模や施設、カマドの設置位置などから8世紀～9世紀代と考えられる堅穴住居跡が10軒となっている。堅穴の総数としては多いものの、台地の大きさからすれば、かなりまばらな分布を示している。この台地では、古墳時代終末の7世紀後葉から集落が営まれ、8世紀にかけて小規模な集落が継続的に営まれたと考えられる。東西に長い台地は中央の最も高い所で標高20m前後を示しており、この地形から見た集落の展開状況は、20m前後の平らな部分に展開するグループと南緩斜面に展開するグループの2つからなっていることがわかる。ただし、本来一つの遺跡と見なしてもよい西隣の前平井遺跡においては、100軒を超える堅穴住居跡が調査により発見され、同時期の集落がより広い展開を示している。残念ながら前平井遺跡については未整理のため、集落の展開状況について言及することは難しく、この付近の集落の動静については、前平井遺跡の報告を待って改めて検討する必要がある。

奈良・平安時代の堅穴住居跡群も古墳時代の堅穴住居跡群と同様に堅穴の遺存状態はよくなかった。堅穴の規模は、一辺が6mを越える大型の堅穴住居跡はほとんどなく、一辺4m前後の小規模な堅穴住居跡が主体となっている。カマドは概ね北側の壁に設置されており、古墳時代の堅穴とは主軸方位が若干異なってくるようである。

時期的な変遷を詳しくみると、8世紀前半期の堅穴住居跡が14軒、8世紀後半期が最も多い15軒で、9世紀代は4軒と少なくなる。8世紀後半がピークとなり、9世紀に入ると集落は急速に規模を縮小していくようで、9世紀後葉には集落が営まれなくなる。

本遺跡の南約2.5kmに流山市思井堀ノ内遺跡があり、限られた面積の調査ではあったが奈良・平安時代の集落が検出されている(注1)。思井堀ノ内集落は8世紀後半に出現し、9世紀代になって集落が拡大しており、本遺跡の集落を引き継ぐような形で周辺近隣地において集落が展開することがわかってきている。

堅穴に伴う出土遺物の中には、須恵器の坏、高台付坏、蓋、長頸壺、甕などがみられ、(9)SI007の堅穴住居跡からは13点もの須恵器が出土している。少なくとも2点～4点の須恵器を伴う堅穴住居跡が多く、8世紀前半の一般的な様相を反映している。須恵器には湖西産とみられる坏や高台付坏、長頸壺などがある程度は含まれるが、雲母を胎土に含む新治産須恵器の坏、高台付坏、蓋などが割合としては多いといえ、この地域の特徴を示している。土師器については、武蔵などの影響と思われる長胴の甕が多くみられ、常陸甕などはあまりみられなかった。このほか、鉄製品が出土しているものの、刀子や鎌などの生産用具は微量であった。鉄鎌などが若干だが出土している点で目を引いている。思井堀ノ内遺跡では、137点もの墨書土器が出土しているが、本遺跡からは墨書土器が1点も出土していない。

中・近世

検出された遺構の主体は、中世後期15世紀～16世紀と考えられ、一部に近世江戸期のものも含まれている。遺構の種類としては、地下式坑20基、土坑墓1基、土坑17基、井戸7基、溝状遺構28条などが検出され、中世の台地整形区画とみられる遺構が1か所発見されている。この台地整形区画については、調査区の端にあたり十分な調査には至っておらず、時期など詳細は不明である。

主な遺構群のまとまりは、台地の最も標高が高く平地となった地点や南緩斜面などの比較的限定した範囲で検出されている。溝状遺構は、屋敷地の区画溝とみられるものが主で、地下式坑などは屋敷地など居住域内に伴う遺構群の一部と考えられる。20基の地下式坑は全て天井部が崩落しており、入口部の位置やその規模が不明なものが大半である。検出面から底面までの深さは、1mを超えて2m程度に及ぶものもみられる。2m程度の深さのものでは、天井部が存在したとしても坑内の高さは1.5m前後、平面の広さ

は2m四方あって、坑内での作業が充分に行える広い空間となっているものがみられる。地下式坑の平面形態は、楕円形、長方形、T字形などがある。地下式坑に伴う遺物が全体に少なく、時期がおおよそ決定できるのは一部である。(14)SK004の地下式坑では、祖母壺や平碗など、古瀬戸後期の15世紀代の遺物のほか、志戸呂の天目茶碗なども出土しており、出土遺物には時期幅がある。最も新しい遺物から(14)SK004は16世紀後葉の地下式坑とみられる。検出された地下式坑の時期は、概ね15世紀後半～16世紀代にかけてのものと考えられる。

17基の土坑は、隅丸長方形ないしは楕円形を呈するものが主体である。ほとんど出土遺物を伴わなかった。人骨、六文銭を伴う土坑墓は僅かに1基だったが、土坑群の一部は土坑墓の可能性もあるだろう。土坑として扱った(16)SK018は、長楕円形を呈し、検出面の規模が長軸8.30mの規模の大きな土坑で、検出された他の土坑とは全く異質である。底面近くで、より深い長方形の掘り込みとなり、周囲の壁は緩い傾斜面となっている。壁の開きが大きく、地下式坑のような天井部が存在した可能性は低い。長辺の片側に底に降りる階段状の作り出しがあることから、底面まで降りて何らかの作業が行われたのではないかと考えられる。底部は湧水による水気があり、棒状の材などが遺存していた。出土遺物は多様で、瀬戸の挟み皿や丸皿、瀬戸腰折皿、古瀬戸平碗、志野丸皿、常滑片口鉢、古瀬戸後期IV新～大窯1期の播鉢などのほか内耳土器などが出土している。また破損した板碑が多数出土している。銘が判読できたものとしては「文明二年(1470年)」「正月九日」の銘があるものが1点だけである。また、石臼の破片も複数出土している。内耳土器などは近世初頭にあたると考えられるものがあり、これらの最も新しい遺物によるならば、本土坑の時期は16世紀後葉～17世紀前葉と考えられる。(16)SK018は特異な形態の土坑であり、類例が乏しく、その用途は不明である。出土した多くの遺物は、この土坑の廃絶に伴い廃棄されたものと考えられ、土坑の用途を直接反映している可能性は低いと推測される。日常の多様な什器が廃棄されていることから、屋敷の廃絶に伴う廃棄などが考えられる。一方、生活道具とは異質な板碑なども一括して廃棄されており、刻印された銘が磨れて見えなくなっている事例などは板碑の転用のされ方を検討する上で興味深い点である。なお、銘が判読できた第94図35の板碑は、個人の追善供養として造立された卒塔婆と考えられる。個人名に付された「律師」銘のある板碑は、流山市内では他に1例のみである。

板碑の文明二年(1470年)前後は、流山市内の板碑が最も多く造立された時期にあっている(注2)。本事業地内の複数の遺跡の調査でも多数の板碑が出土しており、出土した板碑は破損がひどいものが多い。近世になると卒塔婆の意識が薄れて、他の用途に転用される事例が多くなるのかもしれない。

井戸については7基が検出されている。このうち(16)SE012からは磁器碗や常滑片口鉢などが出土したほかは近世遺物が主体であった。また(16)SE021では、古瀬戸後期Ⅲ折縁深皿などが出土したものの、近世の磁器碗なども出土しており、出土遺物に時期幅がある。井戸については廃絶時が近世と考えられるものがほとんどのようである。15世紀代の遺物を出土することから、中世から使用され続けたものが一部にはあるのかもしれない。

注

- 1 財団法人千葉県教育振興財団 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2 -流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器時代～奈良・平安時代編)-』
- 2 流山市教育委員会 2010『中世の流山を探る 附. 流山市内板碑集成』流山市立博物館調査研究報告書26

写 真 图 版



前平井堀米遺跡



調査前風景 (2)地区



調査前風景 (2)地区



調査前風景 (2)地区



遺構配置状況 (5)地区



遺構配置状況 (5)地区



遺構配置状況 (5)地区



遺構配置状況 (5)地区



旧石器時代第1ブロック
遺物出土状況 (8)地区



遺構配置状況 (9)地区



旧石器時代第2ブロック
遺物出土状況 (10)地区



遺構配置状況 (16)地区



調査風景 (5)地区



(4)SI001



(4)SI001 カマド



(4)SI002



(4)SI002 カマド



(5)SI005



(5)SI005 カマド



(5)SI006



(5)SI007



(5)SI008



(5)SI008 カマド



(5)SI009



(5)SI010



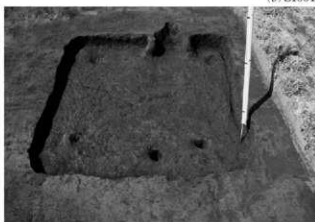
(5)SI012



(9)SI001



(9)SI002



(9)SI003



(9)SI004



(9)SI005



(9)SI005 遺物出土状況



(9)SI006



(9)SI007



(9)SI007 遺物出土状況



(9)SI007 カマド内遺物出土状況



(9)SI007 遺物出土状況



(9)SI008



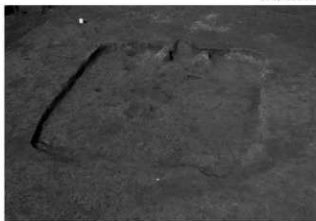
(9)SI008 遺物出土状況



(10)SI001



(10)SI001 炭化物・遺物出土状況



(10)SI002



(10)SI003



(10)SI003 カマド内支脚出土状況



(10)SI005



(10)SI006



(10)SI007



(10)SI008



(10)SI008 カマド



(10)SI010



(10)SI010 カマド



(10)SI010 遺物出土状況



(10)SI011



(10)SI011 カマド



(10)SI012



(10)SI012 カマド



(10)SI013



(10)SI013 カマド内遺物出土状況



(10)SI014



(10)SI017



(10)SI018



(10)SI019



(10)SI020A



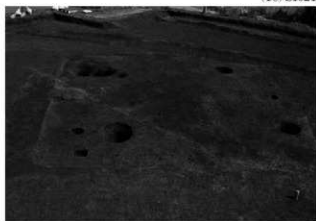
(10)SI020B



(10)SI021



(10)SI021 遺物出土状況



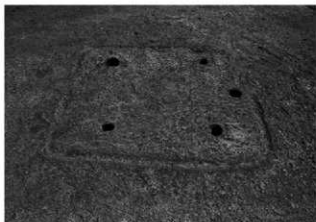
(11)SI001



(11)SI002



(11)SI002 カマド



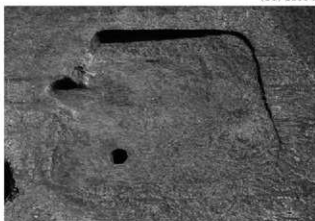
(11)SI003



(11)SI004



(11)SI004 カマド



(11)SI006



(11)SI011



(11)SI011 カマド



(11)SI012



(11)SI013



(11)SI013 カマド



(11)SI014



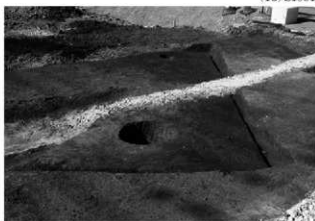
(12)SI001



(13)SI001



(13)SI001 遺物出土状況



(15)SI001



(15)SI002



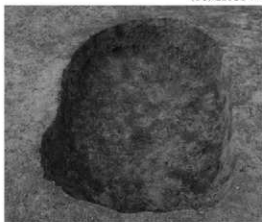
(16)SI001



(16)SI031 カマド



(16)SI031 遺物出土状況



(5)SK013



(5)SK014



(5)SK020



(8)SK100



(8)SK101



(8)SK102



(8)SK103



(8)SK104



(8)SK105



(8)SK106

(8)SK106 人骨検出状況



(8)SK107A



(8)SK107B



(8)SK108



(8)SK109



(8)SK110



(8)SK111



(8)SK112



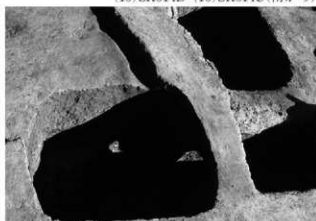
(10)SK004



(10)SK014B・(10)SK014C(南から)



(10)SK014A・(10)SK014B(東から)



(10)SK014C・(10)SK014D(西から)



(10)SK014C



(11)SK005



(11)SK007



(11)SK008



(11)SK009



(14)SK001



(14)SE003



(14)SK004



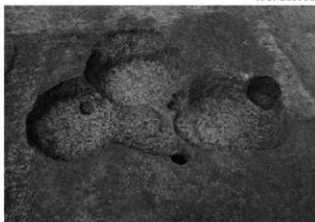
(15)SK004



(16)SK003



(16)SK004



(16)SK005



(16)SE008



(16)SK009



(16)SK011



(16)SK013



(16)SK017



(16)SK017 土層断面



(16)SK018 遺物出土状況



(16)SK018



(16)SE022



(16)SK026



(16)SK027



(16)SK032



(5)SH015



(16)SE002



(15)SD003



(5)SD004A · (5)SD004B



(16)SE021



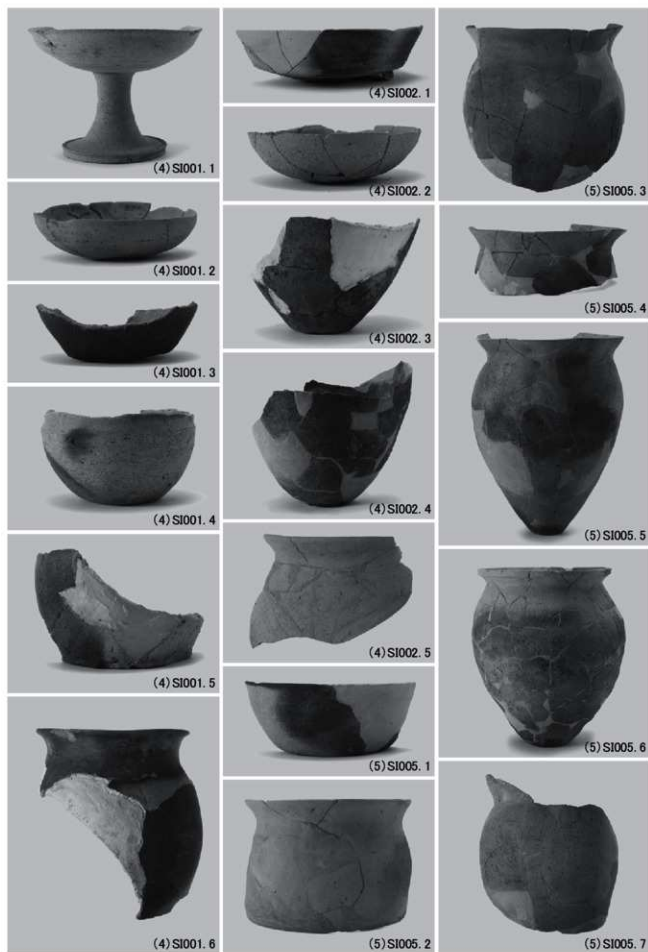
(16)SD001



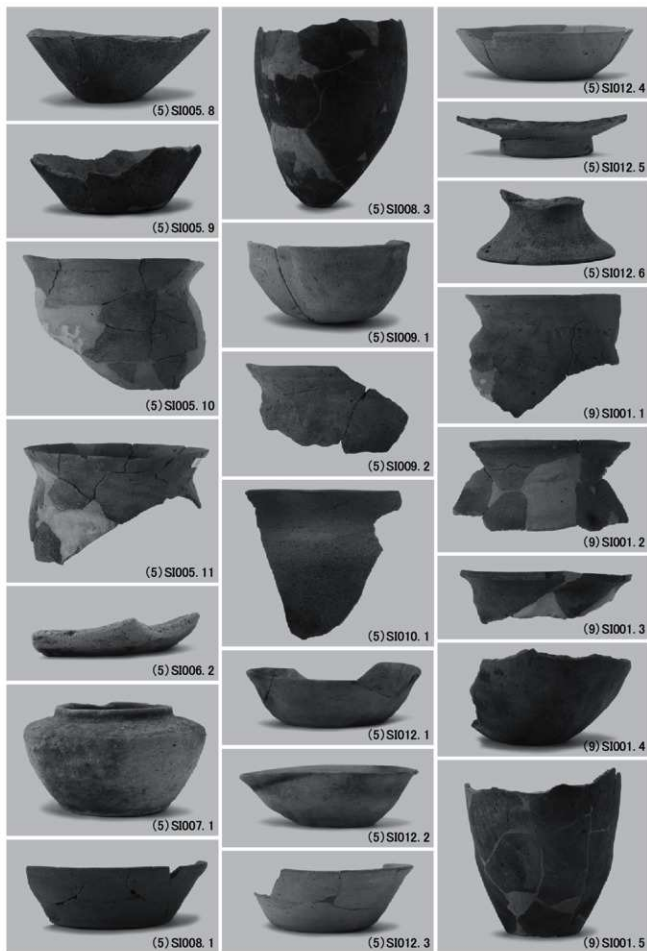
(16)SD007



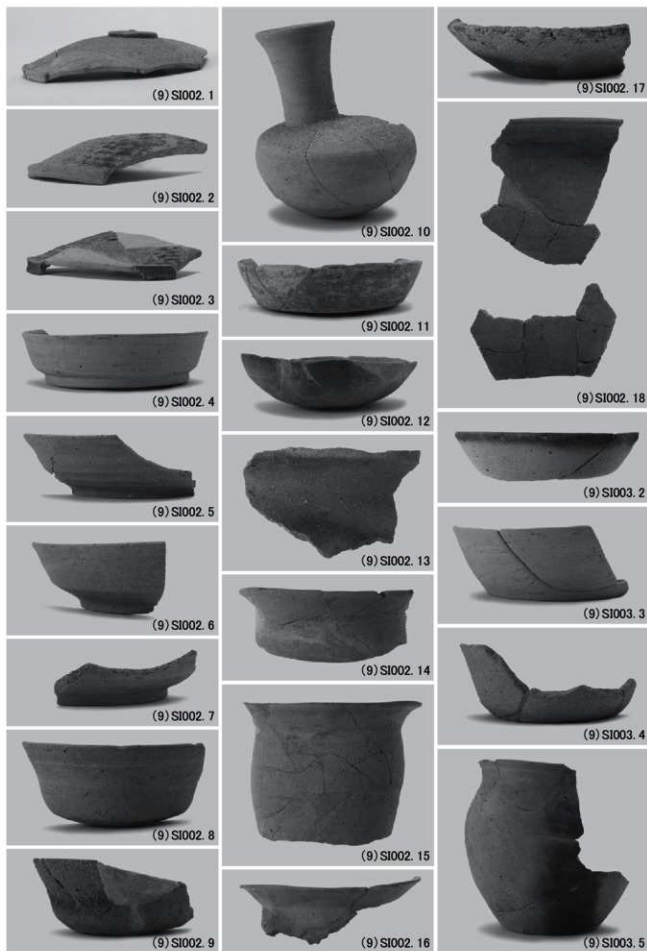
(9)SX009



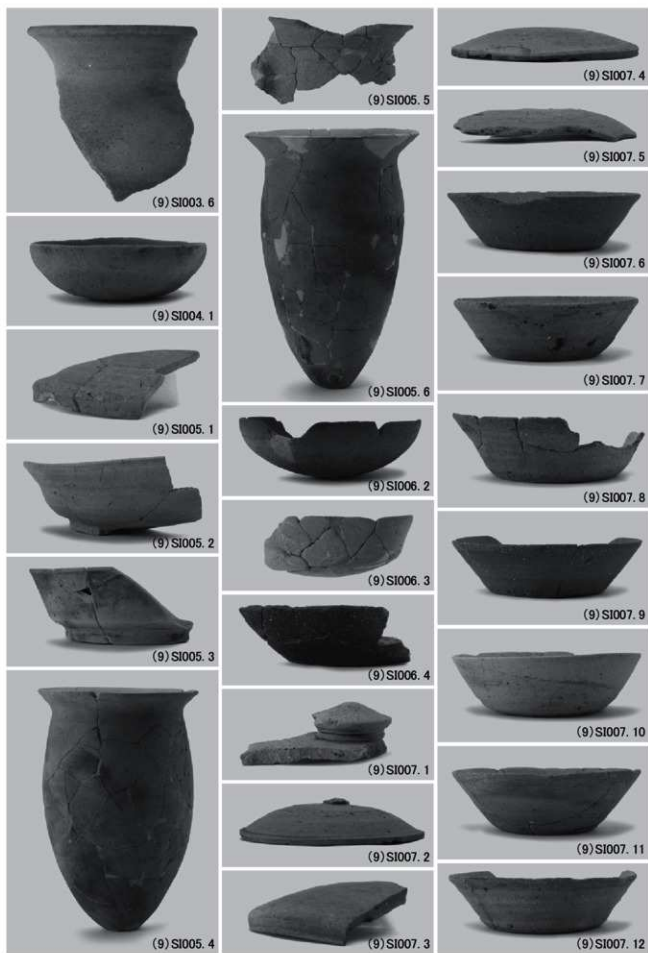
竖穴住居跡出土土器(1)



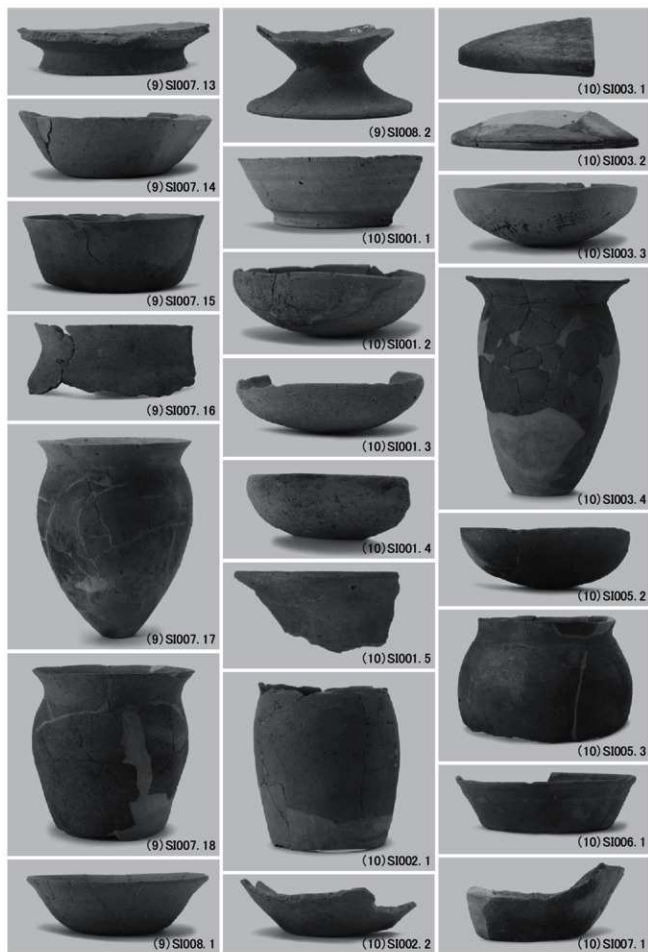
竖穴住居跡出土土器(2)



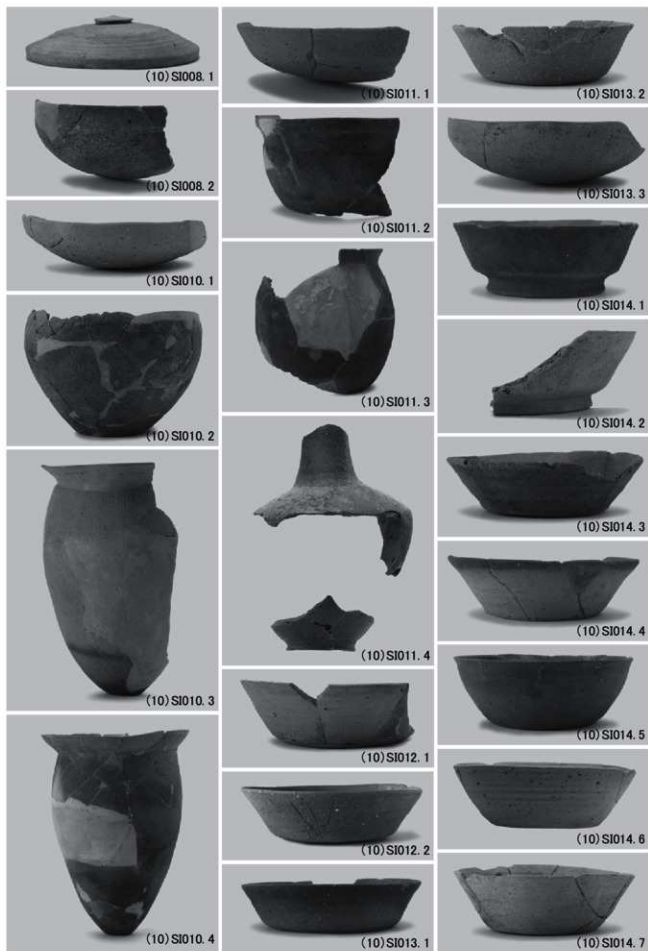
整穴住居跡出土土器(3)



竖穴住居跡出土土器(4)



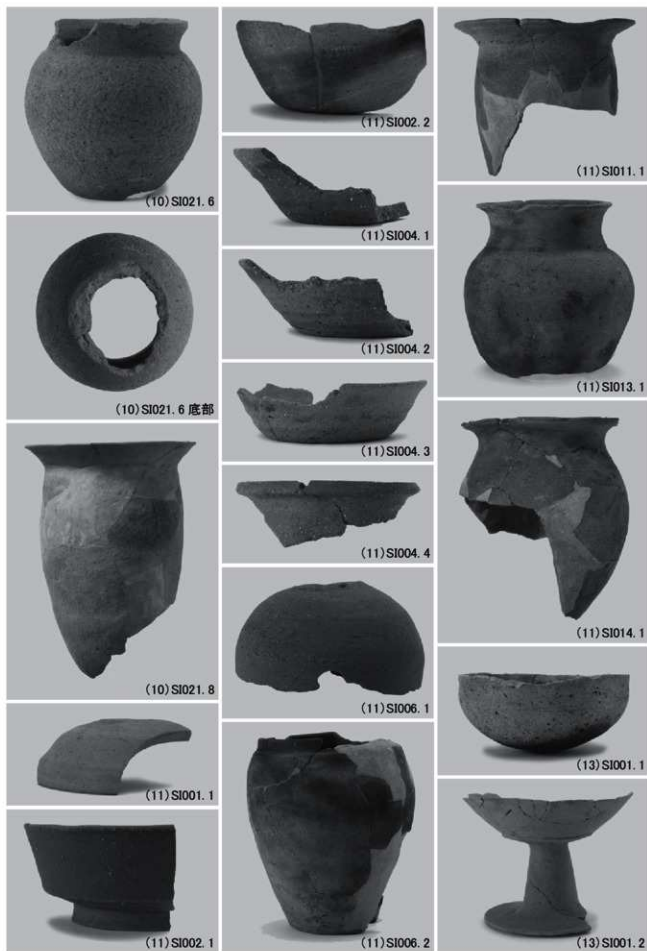
竖穴住居跡出土土器(5)



竖穴住居跡出土土器(6)



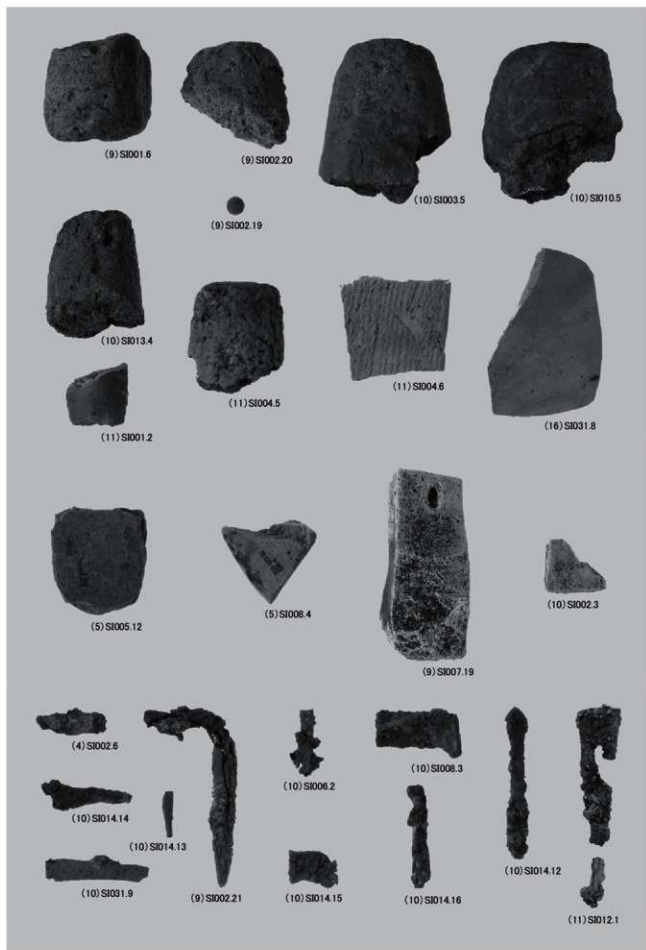
竖穴住居跡出土土器(7)



竖穴住居跡出土土器(8)

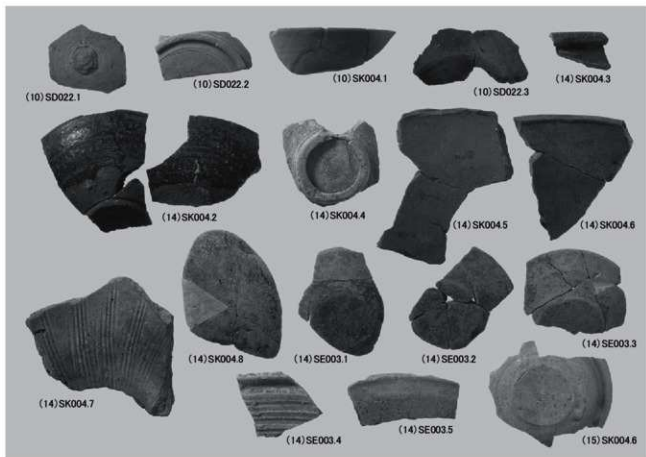


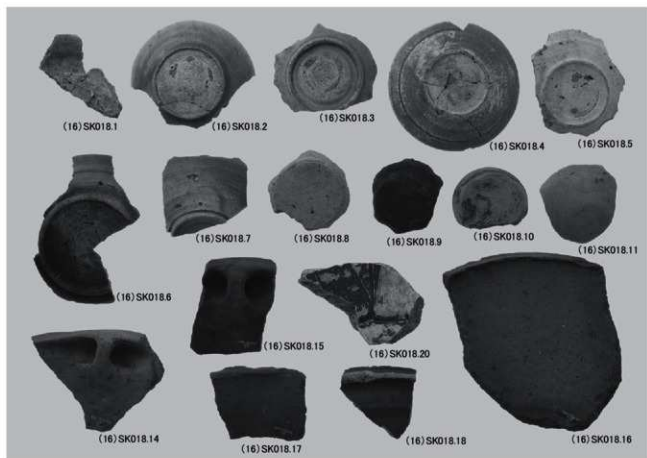
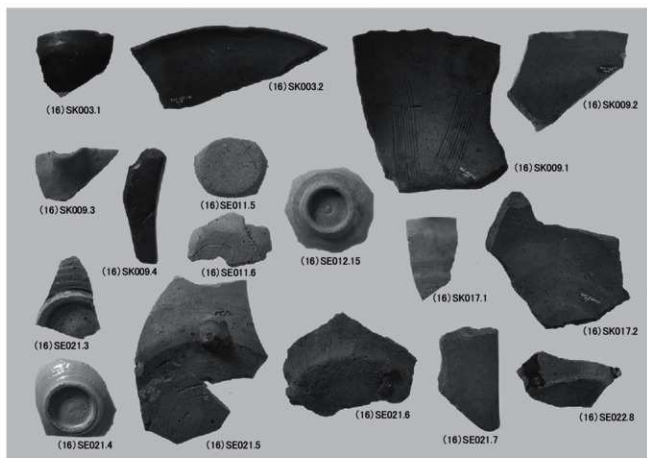
竪穴住居跡出土土器(9)・遺構外出土土器

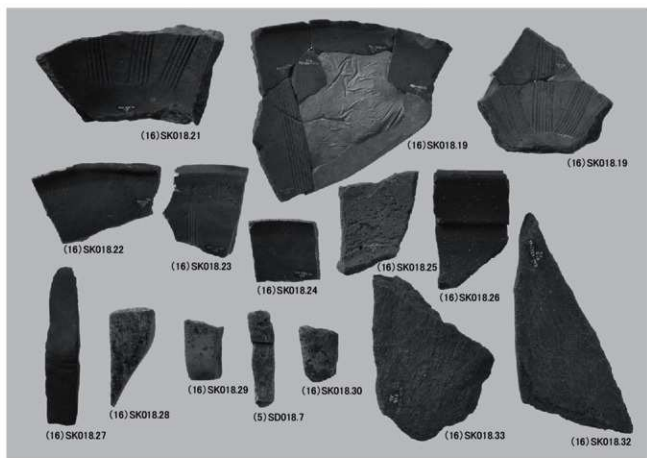


土製品・砥石・金属製品

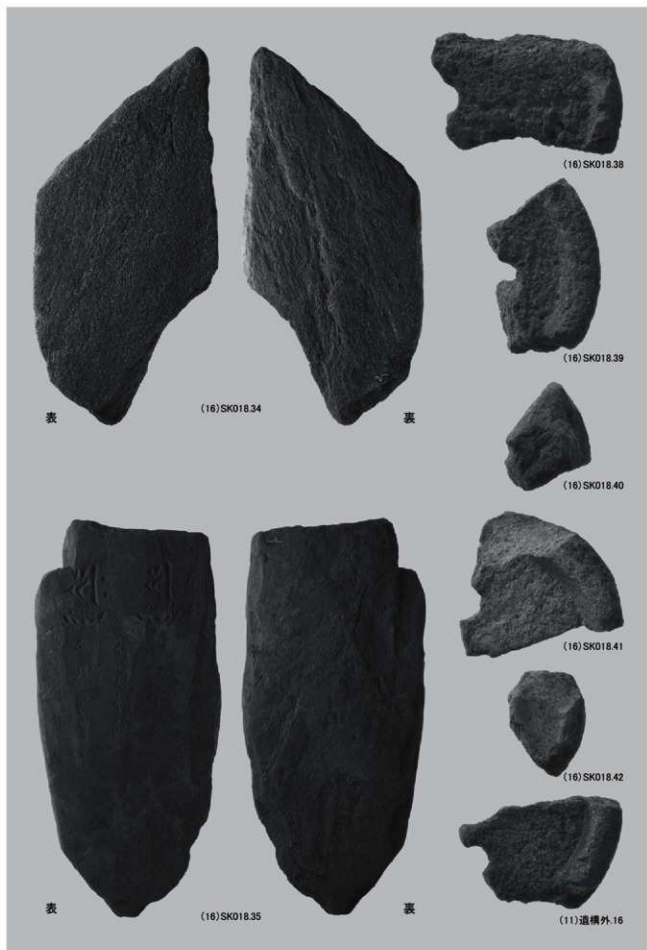




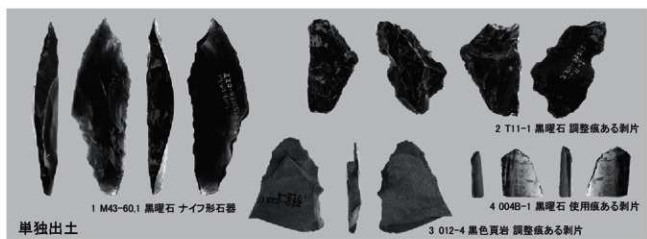


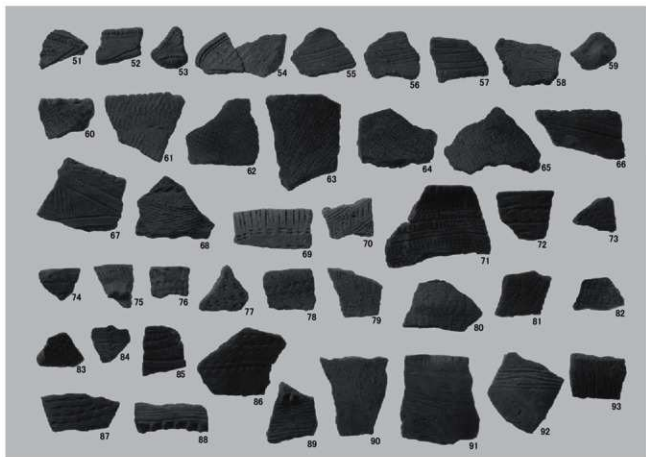
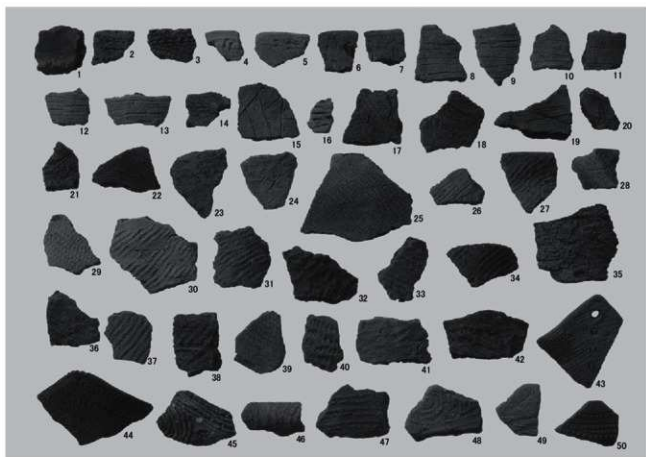




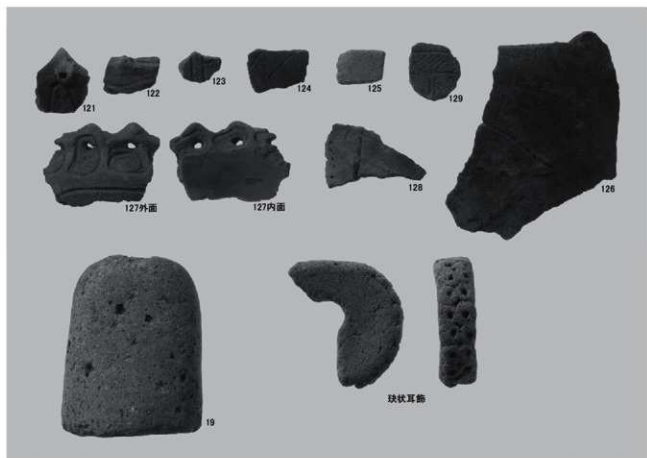


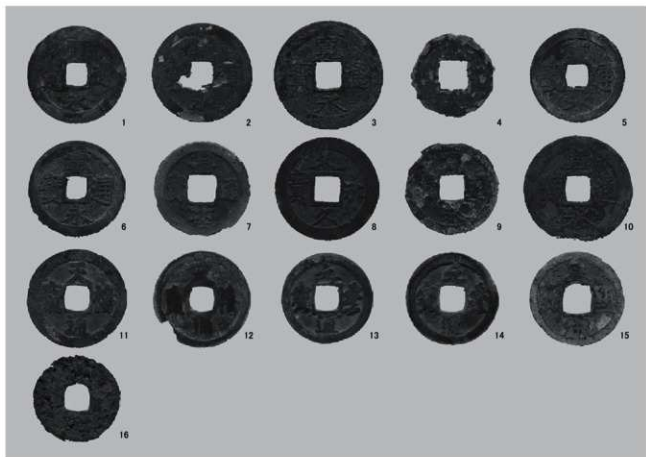
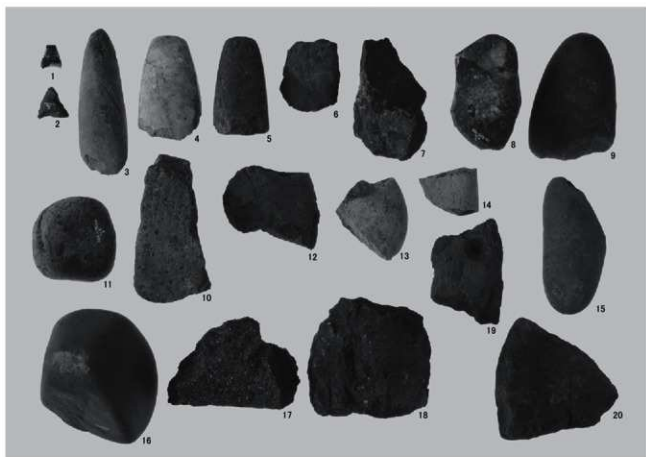
板碑・石臼





繩文土器(1)





繩文時代石器・錢貨

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいぞうふんかざいちようさほうこくしょ							
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	流山市前平井堀米遺跡							
巻次	5							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第34集							
編著者名	蜂屋孝之 落合章雄							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2020年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
まのりいほくろみ 前平井堀米	ながれやましほくろみ 流山市前平井 あひらひのこみ 字堀米 110ほか	12220	033	35度 51分 16秒	139度 54分 46秒	19980220 ～ 20120511	40,840㎡	土地区画整理 事業
				日本測地系				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前平井堀米	包蔵地	旧石器	石器集中地点 2か所	ナイフ形石器、剥片、礫				
	包蔵地	縄文	陥穴 2基	縄文土器（早期～晩期）、縄文時代石器（石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石類、石皿）、土製品（球状耳飾）				
	集落跡	古墳	竪穴住居跡 8軒	須恵器、土師器、石製模造品・瓦・砥石				
		奈良・平安	竪穴住居跡 43軒	須恵器、土師器、金属製品（鏃・刀子・鎌・釘）、支脚、砥石				
		中・近世	地下式坑 20基 土坑墓 1基 井戸 7基 土坑 17基 ピット群 2か所 溝状遺構 28条	陶磁器、土師質土器、カワラケ、内耳土器、土製品（転用砥石）、石製品（板碑、石臼、砥石・円盤）、金属製品（鎌）、銭貨		紀年名のある板碑が出土		
要約	旧石器時代は、2つの石器集中地点が検出されている。縄文時代の遺構は陥穴が検出されているほか、縄文土器・石器が僅かに出土している。土器は早期～後期の時期である。古墳時代以降では、5世紀中葉の竪穴住居跡が1軒検出されているほかは、7世紀後半～9世紀前半までの小規模な集落が継続して営まれていたことが明らかとなった。中世後期15世紀～16世紀の地下式坑や土坑などが検出され、区画溝とみられる溝状遺構などから屋敷地の存在が推測される。多量の陶磁器類のほか紀年銘のある板碑が出土している。							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第34集

流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書5

－流山市前平井堀米遺跡－

令和2年12月25日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉県中央区市場町1-1

印刷 株式会社 八千代折込広告
八千代市ゆりのき台7-5-3
